

---

# ひぐらしのなく頃に 神殺し編

アスラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に 神殺し編

### 【Nコード】

N2462I

### 【作者名】

アスラ

### 【あらすじ】

惨劇を打ち破った梨花たちは、7月の学校にいた。そして、突然、転校生がやってきた。楽しくワイワイ過ごしていたが、新たな危機が梨花たちに訪れようとしていた。オリキャラが出てくる、ひぐらしのなく頃にの二次創作です。表現がグロテスクなところもあります。苦手な方は注意してください。

転校生（前書き）

初投稿です。

週一ぐらいで更新しようと思います。

（暇なら2、3日でも）

## 転校生

「はい、みなさん席についてください。」

知恵先生が入ってきて、皆は席についていく。

「それじゃ、委員長号令」

「きりーつ、礼、着席」

何も変わらない普通の号令。ただ一つ変わっていることは今は7月だということ。

「突然ですけど、皆さんに新しい友達を紹介します。」

本当に突然のことだった。

クラスがざわめき、いつものメンバーもその中に含まれていた。

「こんな時期に転校生とは、珍しいな。」

「はうう、どんな人が来るのか楽しみ」

「お手並み拝見とさせていただけますわ。」

「みい、しよっぱなから沙都子のトラップに引っかかったら不登校になるかもしれないのです。」

「沙都子、加減しときなよ。」

「あうあう、沙都子、それはひどいのですよ」

ざわめきは納まらず、なお音が大きくなる。

先生はさすがに歯止めをかけた。

「はいはい静かに。それじゃ、どうぞ入ってきてください。」

扉の窓に影がうつり、ゆっくりと扉が開かれる。

そして

ガラガラ・・・ヒュヒュヒュン

開いた扉めがけてチョークが3本飛んで行った。

「なっ！！」

と素っ頓狂な声が出たと同時に

ガガガン

何か当たる物音がした。

「をーっほっほっほ、大したことありませんでしてよ。」

「いくらなんでも転校した子にチヨークはないよ。おじさん、心配になってきちゃった。」

「あいつ、不登校にならなきゃいいんだが。」

「はうゝ、大丈夫かな、かな。」

一部を除いて、皆の考えはレナと同じく、開いた扉の方を心配そうに見ている。

すると、扉から一人の少年が入って来た。

「あぶねーなったく。ここはどんな学校なんだよ。」

「!?!」

誰もが驚いた。

体にチヨークの後はなかったが、何故か持っているスケボーにチヨークの跡があった。

転校生はスケボーでガードしていたのだ。

チヨークのスピードは時速30キロはあっただろう。

距離は5メートルほどなのに完全にそのスケボーで防いでいた。

「そんな、わたくしのトラップを初見で防ぐなんて……」

「沙都子のトラップを初見で防ぐとはなかなかできるね。」

「みいゝ、転校生は只者ではないのですよ。」

「俺ですらなかなかかわすことのできないトラップ防ぐとは。一体、どんな奴なんだ。」

皆興味がわいてきているようだ。

転校生はゆっくりと入ってきて教卓の横に立った。

見た感じ、圭一と同じ中学生ぐらいだった。

「では紹介します。契勇人君ちきゆうじんです。それでは契君、何か一言を。」

「チヨーク飛ばした奴出てこい。」

やっぱりっていいほどの一言だった。

契view

「わ・・わたくしでございましたよ。」

金髪の子が恐る恐るでてきた。

怯えるなら、最初からやるなよ・・・

「も・・申し訳ございませんでしてよ。ほんの出来心です。」出来心ですな!!!」「ヒツ・・・」

誰もがビクツとなる声でいつてやった。

ちよつと、大人げなかったかな。

重苦し空気になりそうだったから、目線を合わせて、やさしい声で

「あんまり人に迷惑をかけてはだめだぞ。」

といつて軽くデコピンをした。

「ほ・・本当に申し訳ありませんでした。」

そう言つて金髪の子は頭を下げた。

どうやら、本当に反省してるようだ。

「わかつたらいいんだよ。」

そういつて、下がっている頭を撫でてやった。

「これからよろしくな。改めて、契勇人だ。」

「ほ・・北条沙都子でしてよ。」

まだ怖いのか声が震えている。

ま、俺は年上で背だつて大きいし、当たり前だな。

そして、俺は立ち上がった

「んじゃ、皆にも改めて、契勇人だ。よろしくな。」

よろしくの意味を込めて拍手をしてくれた。

結構、いいクラスかもな。

なんか騒々しかったけど何とか自己紹介は終わり、俺の新しい学校生活は始まった。

転校生（後書き）

設定は

中学2年 圭一 レナ 勇人

中学3年 魅音 詩音

小学5年 梨花 羽入 沙都子

という風にしています。あしからず。

## 午後の時間（前書き）

言い忘れていましたが、作者は難しい言葉がわからないので、難しい言葉がないかもしれませんが、そんなひぐらしでも構わない方は続きをどうぞ。



## 午後の時間

### 昼食の時間

皆、困んで昼食をとっていたが、契だけは一人ポツンと食べていた。ちなみに、契の席は一番前のグランドの窓際である。

それを見た魅音が

「誰か、契君を誘いに行かない？」

と聞くが

「委員長である魅音が行くべきだと俺は思う。」

「レナもさんせうい。」

「左に同じでしてよ。」

「魅い、ふあいとく、おゝなのです。」

と綺麗に返されてしまった。

「ちよつと待つてよ！。なんでそうなるのよ。」

「あうあう、魅音がかわいそうなのですよ、皆。」

羽入が同情するが、綺麗に無視されてしまった。

すると、勇人に動きがあつた。

ガタツ

突然、勇人が弁当を持ってどこかにいってしまったのだ。

それをみた梨花が

「みく、皆がワイワイしていて、自分が一人だけだったから嫌になつて出て行ったのですよ。多分。」

と、嫌な言葉を発した。

その言葉に反応した、皆は

「ちよつと俺、追いかけてくる。」

「レナも行くよ。」

「わたくしも行きますわ。」  
「僕も頭なでなでしてくるのです。」  
「あうあう、皆置いていかないでほしいのです。」  
と、追いかけに行った。  
ただ、一人除いて・・・  
「ちよつと、そんな気があるならなんで私に押しつけたのよー!!」  
遅れた一人も後を追い始めた。

搜索すること1分。

勇人は木陰の下で弁当を食べていた。

「ん？どうしたお前ら。」

どうやら、魅音達に気付いたらしく、勇人が声をかけてきた。

「あ、いや、その・・・」

心配で追いかけてきたという言葉がなんだか照れくさくて言いにくいのか、魅音は口ごもってしまった。

魅音がそわそわしているので、圭一が代わりに答えた。

「お前が孤独死でもしてしまうかと思っついてきたんだ。朝、あんなことがあったからな。」

「ははっ、そんなくらいで死んでしまうほど俺はやわじゃないぜ。」  
苦笑いをしながら勇人は言い返した。

皆が思っていた程、深刻な状態ではないようだ。

するとレナが

「ねえ、皆と一緒にご飯食べてもいいかな、かな。」

最初に企てていた計画を実行した。

「別にいいよ。」

あっけなくOKをもらい、皆は弁当を取りに行った。

皆で食べていると魅音が

「そういえば、まだ私たちの名前知らないっけ。」

「まあ、教えてもらってないしな。」

それを合図みたいに皆が一斉に自己紹介を始めた。

「俺は前原圭一。よろしくな。」

「レナは竜宮レナだよ。よろしくね。」

「改めて、北条沙都子ですよ。」

「みく、僕は古手梨花なのですよ。にぱく。」

「同じく、僕は古手羽入なのです。あうあう。」

「私は園崎魅音、クラスの委員長だよ。」

「契勇人だ。よろしくな、前原、竜宮、北条、古手梨花に羽入、園崎。」

勇人は普通に返事をした。

しかし、皆は納得していない顔になっていた。

「ん？どした。」

不思議に思った勇人が聞いてみる。

すると、魅音が代わりに答えてくれた。

「なんか名字だと変な感じだから名前で呼んでほしいな。」

「いくらなんでも初めての人に名前は失礼だろ。」

勇人は当たり前前だと思って答えたつもりが、皆にとってはいらぬお世話だった。

魅音に続いてレナも言う。

「でも、もう勇人君はレナたちの仲間だよ。」

「仲間……」

「そうだけ。勇人は俺たちのなかm「わりー。ちょっと席外すわ。」

おい、まだ俺の話が終わってねーぞ。」

突然、態度が変わった勇人が圭一の声に聞く耳を持たずにどっかに行ってしまった。

「どうしたんだろ。急に。」

そんな様子レナは心配していた。

「でも、これで距離は縮まったとおじさんは思うよ。」

「そうですね。これも大きな一歩でございましてよ。」  
「戦いはまだ始まったばかりなのですよ。にぱ〜。」

カラン、カラン、カラン

昼休みの終わりを告げる、校長のベルの音が鳴り響いた。

「さあて、午後の授業の用意でもすっかな。」

圭一が締めくくり、皆は教室へ戻って行った。

教室に戻った時、勇人はいつもの勇人に戻っていた。

放課後

勇人が帰る準備をしていると、魅音が声をかけた。

「勇ちゃん、我が部活動に参加してみないかい。」

「部活？なんだよ急に。それに勇ちゃんって。」

「細かいことは後。今日一日部活体験だけでもいいからさ。ね。」

魅音は拜むように手を合わせてお願いしている。

勇人はさすがに、これを断ることはできないと思った。

「わーったよ。やってやるよ。」

「ありがとう勇ちゃん。よしそれじゃ早速。」

すると、魅音が強引に勇人の手を引っ張って後ろの方へ連れて行く。

そこには

「遅いぜ勇人」

「待ってたよ勇人君」

机をつなげて昼食時のメンバーがそこにいた。

「なんだ、お前ら部活メンバーだったのか。ところで部活ってなにをするんだ？」

「ふっふっふ、私たちの部活活動はこれだー！！」

パンパカパーン、と擬音語を使っているように、魅音は高らかにトランプを掲げていた。

「トランプって、ここはゲーム部か？」

「そうだよ。じゃ早速いつてみようかー。」

『おー』

魅音の掛け声に、皆テンションが最高潮になった。

その異様なテンションに勇人は少し驚き気味である。

「そこまでテンション上がるか、普通。」

「甘いぜ勇人。この部活は勝つためなら何でもありなんだぜ。」

「ふーん。」

「そして、過酷な罰ゲームが待っているんだよ、だよ。」

「罰ゲームねえ」

勇人にとって、その言葉はいまいちピンとこなかった。

ただ、前者の言葉は頭の中に残している。

「それじゃ、最初はわかりやすい”じじ抜き”でいこうか。」

「いいよそれで。ルールは知ってるし。その前に少しトランプ貸してくれ。」

「いいよ、はい。」

魅音からトランプを受け取ると勇人は

パラパラ……………

マジシャンのようにカードを素早くめくり見た。

「もういいよ。」

「え！？それだけ。」

勇人は表と裏をパラパラと見ただけであった。

その時間わずか7秒弱

なんか細工すると魅音は見ていたが何もしなかったので驚いていた。

カードを配りゲーム開始。

（勇ちゃん、悪いけどこの試合は負けてもらって強制的に部活メンバーになってもらうからね。）

そう、これが魅音の狙いだった。

勇人の罰ゲームで部活に入ることにすれば、ほぼ毎日交流を取ってられるからである。

（勇ちゃんと羽入ちゃんはカードを知らないはず。しかし、羽入ちゃんは少しはカードを覚えている。後は、私たちがうまくすれば勇ちゃんに勝ち目はない。）

魅音の考えに狂いはなかった。

しかし、ことは思い通りには進まなかったのである。

ゲームが中盤に差し掛かる当たりに事件は起こった。

（気のせいだろうか、勇ちゃんのカードの減りが早い。まあ、気のせいよね。）

既に、魅音やレナと同じぐらいカードが減っていることに気付いた。そして、勇人がカードを引いた。

「あがり。」

『うそーー』

全員声をあげて驚いた。

もちろん、手加減などしていない。

むしろ、いつもよりも本気である。

すると、不思議そうに見ている皆に対して、勇人が答えてやった。

「残念だったな。圭一が”勝つためには何でもあり”がピンときてな、カードを覚えておいたんだよ。」

「ちよつと、いつのまに覚えたのよ。」

「7秒弱パラパラしてたとき。」

あっさり答えたが、皆は驚愕している。

たったあれだけで全部のカードを覚えたというのだから。

「そんなはずあるわけないじゃん。そんなとんでもない人間みたいなことできるわk」古手羽入、お前から見て、園崎の一番左のカー

ドで上がれるぞ。「っ!？」

それを聞いた羽入は、すかさず魅音の左端のカードを取った。

「えい。わーい、ほんとに上がったのです。ありがとうございます。」

「あ」

啞然とする魅音。

「俺をなめんなよ。」

そして、人差し指を振りながら勝ち誇る勇人。

「くっ」

魅音は始めて新人に敗北を浴びせられた。

「まあ、お前らのことだから、俺を負けさせて部活にでも入れるつもりだったんじゃないのか。」

「な・・何でそこまでわかるのよ。」

「今、お前が言ったから。」

「あ」

魅音は完全に敗北という海に沈んでいった。

すると、勇人は思いもがけないことを言った。

「入ってやるよ。」

『へ!？』

勇人が主語を言っていないから意味が分かっている訳ではない。ただ、いきなりの言葉に少し驚いているだけである。

「嫌か？」

再び確認を取ると、皆が一斉に答えてくれた。

「いいぜ。こんな強い奴が入るなんておもしれえじゃねえか。」

「レナもいいよ。」

「強いほど、倒しがいがありましたよ。」

「みく、大勢の方が楽しいですよ。」

「あうあう、異論はないですよ。」

「満場一致だな。よろしくな。」

そうして、一日が終わるのであった。

「ちょっと、おじさんをわすれないですよー!」



午後の時間（後書き）

急に長くなってすみません。

少し魅音をいじめすぎました。魅音ファンの方々、申し訳ありません。

## 忍び寄る影

契view

ピ。ピ。ピ。ピッ

ピ。ピ。ピ。ピッ

ピ。ピ。ガチャッ

「ふあゝあ、もう朝か。」

鬱陶しい目覚ましを叩き黙らせ、別に分かっている時間を確認する。  
現在、6時30分。

学校に着かなくてはならない時間は8時30分。

別に、学校から家が遠いから早く起きたわけではない。

かといって、朝のジョギングなどはしていない。

ちよつと、家の事情でこんな時間になっている。

「さつさと用意するか。」

まださめてない頭を叩き起して、俺は台所へ向かった。

「朝飯と弁当は昨日の余り物でいいか。ちよつと付け加えるだけで済むし。」

そうして、顔を洗って、飯を済ませ、着替えていると

ピンポーン

インターホンが鳴った。

「ん？誰だこんな時間に。」

「勇人くん。レナだよー。」

「なっ!？」

なんであいつが俺の家を知ってるんだよ。  
教えてないぞ。

しかもまだ7時10分だぞ。

「あいつ、まさか昨日の帰りにつけてきたのか。」

「勇人くん、いるー。」

とりあえず、待たせるのもかわいそうなので着替えを済ませて玄関を開けてやった。

そこには、制服姿で準備万端の竜宮が立っていた。

「おはよう勇人君。学校一緒にいこ。」

「おはようじゃねーよ。早すぎだろ。それにそんな大声だと近所迷惑だろ。」

「はうー、早いって言うてる割には着替え終わってるし、そもそもこのあたりに家なんてないよ。」

「あ。」

そう、俺の家は悲しいことにご近所さんがいないのだ。

近くの家で200メートル先である。

寂しいものだ。

「大体、なんで俺の家知ってたんだよ。」

「簡単だよ。スケボーの跡がおしえてくれるもん。」

俺は地面を見てみた。

確かに、ここは道路ではないし車もめったに通らないため、スケボーの跡がかすかに写っている。

「まったく、お前は意味がわからんよ。昨日のことといい。」

昨日のことは、部活の結果で古手梨花が罰ゲームでメイド服を着せられると急に竜宮が「かあいいよー。お持ち帰りいー」とかいながら人さらいをしかけたことだ。

何とか鎮めることができたが、あの力は凄かった。

「とにかく、学校一緒にいこ。」

「だめだ。」

「どうして。友達でしょ。」

「友達だからだめなんだよ。」

レナは頭に？マークを飛ばしていた。

そりゃ、そうだろうな。

「前の学校で俺と一緒に登校した奴は、確実に後悔してるんだよ。」  
「何でかな、かな？」  
「知らないことが幸せであることだってある。とりあえず、お前一人で行け。」  
「ほう、わかったよ。それじゃ、学校でね。」  
「意外にすんなりあきらめたな。」  
「まあ、これがあいつのためになるからな。」

レナが来て20分後

「今なら登校している奴は少ないはずだな。」  
俺はスケボーに乗って学校を目指した。  
ちなみに、学校にはスケボーの件はOKをもらっている。  
「なんにもなければいいのだがなあ。」  
「と言ってるそばから問題が発生した。」  
「おはよう勇人君。」  
「うわあっと。」  
いきなり草陰からレナが出てきた。  
俺はバランスを崩しながらも態勢を立て直した。  
「一緒に行こ。」  
「前言撤回、全くあきらめてなかった」  
「絶対後悔するぞお前。」  
「お前はじゃなくてレナだよ。」  
「わーっ たよ、竜宮。」  
「もー、勇人君の恥ずかしがり屋。」  
俺は軽くスルーをしようとしたが、また事件発生。  
「おうおう、なにいちやついてんだお前ら。」  
「はい、後悔の種の一つ、不良が来たよ……ちなみに3匹」

この際だから説明するけど、俺は登校する時、約95%（ほぼ確実に不良や強盗に絡まれるだよ。

昨日は運よく何もなかったが最悪の場合ヤクザにも絡まれたことがある。

「誰に断つていちゃついでんだ、ああ。」

「わっ、何かな何かな。」

「へえー、お譲ちゃんかわいいねー。そんな奴よりお兄ちゃん達と遊ぼうよ。」

不良の一人が竜宮の手を掴んだ。

無粋な奴らだな。

「は・・放してよ。」

「ほれみろ、後悔するぞつていったたる。」

こんな状況にも関わらず、俺は竜宮に念押しをした。

「なんやお前。俺らが怖くないのか。」

「足がすくんで動けねえんだろ。ヒヤハハハハ。」  
うぜえ。

ザコのくせに、無駄にうぜえ。

とりあえずこんな奴の話はスルーして

「ふあゝあ。」

あくびで威嚇。

すると大半は

「なめやがって。おらあ。」

と殴ってくるのでそれを

ガンツ！！

「いてー！ー！！！！！！」

スケボーでガード。

これは、前の学校でもやってたお決まりのパターンだ。  
意外と田舎でも通用したな。

「言つとくけど、このスケボーはチタン製でね。それに横の表面積がちっちゃいんだ。どういう意味かわかるか落ちこぼれブラザー。」

「なめんな。」

いつの間にか後ろに回っていた不良が突っ込んでくる。

「・・・足音がもろに聞こえるぞ。」

「踏み込みがあめーよ。」

振り返ることもなく、肘打ちでみぞおち。

そして、腹を抱えて怯んだところをこのスケボーで

ザシュツ

斬る。

傷は浅くしている。

軽く、包丁で切ったくらいだ。

「表面積がちっちゃいほど圧力が大きいって習わなかったかい。包

丁の原理だよ落ちこぼれ君。」

不良のリーダー格の胸に一閃の傷をつけた。

これくらいなら過剰防衛にはならないだろ。

「こいつ、化け物か。逃げろー。」

そして、リーダーがやられればザコは逃げる。

王道な展開だな。

ちなみに、竜宮を捕まえていた奴はへたれだったのか斬った瞬間、

竜宮をおいて逃げて行った。

「わかったかレナ。二度と俺と一緒に登校しようとか言っなよ。」

「あ、いまレナって。」

「え!？」

しまった・・・

「やったー。ついにレナって呼んでくれたー。」

「つ・・・つい竜宮ってというのが言いにくいからいつてしまっただ

けだ。」

うわゝ、我ながらダメないい訳だな。

「それでも言ったことには変わりないよ。はうゝ、やったー。」  
びよんびよん跳ねてる。

そこまで喜ぶものか普通。

いや、レナに普通は通用しないんだな。

「名前で言われることがそんなに嬉しいものか?。」

「うん。だって、名前は自分の象徴みたいなものだもん。それを認めてもらえるみたいでとつてもうれしんだよ、だよ。」

「そうか・・・ってやば、もうこんな時間かよ。走るぞレナ。」

「え・・・ちよつと待ってよ勇人君。」

そうして、俺は学校へ全力でスケボーを蹴った。

レナview

ついに、勇人君に名前で呼んでもらっちゃった。

これで、皆のことを名前で呼んでくれるよね。

それにしても、勇人君はとて強いんだね。不良をやっつける姿は  
かっこよかつたかな、かな。

でもただ一つ気になることがあった。

「あのときの反応はなんだったんだろう。」

それは皆でお昼を食べていた時に、急にどっかに言ってしまったこと。

あの時の勇人君は絶対変だった。

きつと、前の学校で何かあったに違いない。

いつか、聞き出せるときが来るかな、かな。

「・・・ってやば、もうこんな時間かよ。走るぞレナ。」

はつと気付くともう勇人君はすごい速さでスケボーを蹴っていた。

「え・・・ちよつと待ってよ勇人君。」

その速さに唾然としながらも私は追いかけた。

学校

既に揃っていたメンバーが適当に会話をして時間を潰していた。

「圭一、レナはどうしたのですか?。」

「ああ梨花ちゃん、それが今日はいつも待っているところにいなかったんだ。夏風でも引いたのかなレナは。」

「みく、圭一はレナに愛想疲れたのですよ。にぱく。」

梨花のリアルな言葉に、圭一は思いっきり焦った。

「な・・そんなわけないだろ。」  
すると

ガラガラ

扉が開く音がした。

「レナか?。」

圭一はつい立ちあがって、反射的に扉を見る。

「わりーな。レナじゃなくて。」

しかし、そこにはレナではなく、勇人の姿があった。

「なんだよ。レナじゃねーのかよ。」

がっかりしながら席に着く。

すると梨花が驚いた顔で勇人を見ていた。

いや、梨花だけではない。

沙都子や魅音も同じように驚いていた。

「どうしたんだ、一体。」

圭一が疑問に思いながら問う。

すると、魅音がおもむろに聞いた。



「ねえ勇ちゃん。いまレナって言った?。」

「あ」

圭一はその言葉でやっと気付いたようだ。

「俺がレナって呼んじゃだめなのか、魅音。」

「!?!?」

レナだけではなく、魅音も下の名前で呼んだ勇人にさらに驚く部活メンバー。

「なんで急に?」

「つい口が滑ってレナって呼んでから、もうやけくそだ。」

「み〜、実際は名前で呼びたくてもなかなか呼べない恥ずかしがり屋さんじゃないのですか。」

「ち・・・違う。断じて違う。」

「ああああ、勇人の顔が赤いのです。」

「をーっほっほっほ、勇人さんはシャイでございましたよ。」

「最強の中にもかわいいところがあるんだねー。」

「う・・・うるせー!!!」

圭一以外の皆が冷やかしていると、勇人の隣りから息切れしている音が聞こえてきた。

それは、紛れもないレナだった。

「おはよー・・・皆ー。はう〜・・・勇人君・・・おいて・・・行かないでよ〜。」

息を切らしながら挨拶をする。

レナの言葉に勇人は無視してさっさと席に着いた。

その瞬間、先生がレナの後ろからやって来た。

「はいはい、皆席についてー。竜宮さんももっと余裕を持ってくるように。」

「はい・・・すみません。」

しぶしぶ席に着くレナだった。

ちなみに、勇人は息切れするどころか、全く着かれた様子を見せなかった。

不良達 view

「たつく、えらいめにあつたぜ。」

「リーダー、大丈夫すか。」

「あのガキ、今度会ったらぶつ殺してやる。」

「リーダー、あつちにいいガキがいますぜ。」

「ちようどいいぜ。」

俺らは黒いフードをかぶつたさつきと同じぐらいのガキに近づいた。へへ、いいカモだぜ。

「おい。テメーに恨みはねーがちよつと殴らせてもらつぜ。」

「なんか言えや、ゴラツ!!」

そついうとガキが写真を見せてこつ言つた。

「こいつら知つてる?この7人。教えてくれたら、見逃してあげるよ。」

「なにいつてんだテメー。状況が分かつてねーのか。ああ!」

「知らない?」

「うるせーんだよこのガキ グシャツ!! !?」

何か引き千切られる音がした。

訳も分からず、あたりを見回すと、そこには足がもげた仲間がもたえ苦しんでいた。

「ぎゃああああああああああああ」

「なんなんだよこいつ。」

もう一人の仲間は腰を抜かしやがった。

俺も脚が震えて動けねえ。

するとガキはまた写真を出して言った。

「知ってるの？知らないの？」

知つても言えるわけねえじゃねえかよ。

恐怖で何も言うことができねえんだから。

「まあ、いいや。やっぱり自力で探すよ。それじゃ……」

ガキはゆっくりとフードを上げ、素顔を見せて呟いた。

” バイバイ ”

その後、彼らの姿を見たものは誰もいなかった。

## 忍び寄る影（後書き）

なんか最後がテイルズになってしまいました。

## 過去話へのいざない

### 帰宅路

部活が終わり、勇人は圭一、レナ、魅音と一緒に帰っていた。すると、勇人から話を切り出した。

「やっと明日から休みだな。」

「そう言えば、勇人君は雛見沢ってどれくらい知ってるのかな、かな?。」

「全然だ。ほとんど忘れてしまってる。」

「忘れてしまってるって、前はここに住んでいたのか?。」

「一応、生まれて4年くらいはな。」

「へー。勇ちゃんってここ出身だったんだ。」

「親父の仕事で引越しまつたんだ。」

「じゃあ、なんで戻ってきたんだよ。」

「それは……。」

急に勇人は少し暗い顔になった。

「どうしたのかな、かな?。」

心配そうにレナが聞くが、勇人はすぐにいつもの顔になった。

「なんでもねーよ。それで、なんでそんなこと聞いたんだ?。」

「勇ちゃんに雛見沢を案内しようと思うんだけど。」

「そいつは助かるぜ。まだいろいろわかんねーからな。」

「それじゃ、明日10時に古手神社に集合。圭ちゃんも来てね。部活もするから。」

「ああ、わかったぜ。」

「ちよつとまってくれ。俺は古手神社なんて知らねーぞ。」

「だいじょーぶ。レナが案内するから。」

「なら頼むよレナ。……それにしても圭一、よく平然としてられるな。」



などと軽い愚痴をこぼしながらベットに倒れこむ。  
そして、今日、不意に聞かれたことを考えていた。  
「いずれ、ここの事情も気づかれるんだろうな。ま、その時がきたら正直に言うか……」  
あまり深く考えず、着替えずにそのまま眠りについた。

「……て……お……て……きて……うと……ん。」  
「んにゃ……なんか聞こえる……」

意識がはつきりしないが誰かがいることに気付き、起きる。  
そこには

「おきて勇人君。もう9時半だよ。」

「……！？。な……なんでレナがいるんだよ。」  
レナがいた。

普段着を着ているレナが勇人の部屋にいたのだ。

「返事がしないから入ってきたんだよ。鍵かけてなかったから。」

「不法侵入じゃねーか。」

「そんなことより、早く用意しないと遅れるよ。」

勇人は冷静にあたりを見回した。

窓からは朝日が漏れ、時計を見ると夜が終わっていることに気付いた。  
た。

「わかったわかった。着替えるから部屋を出る。」

レナに部屋を出て行かせると、勇人は着替え始めた。

着替えながら、あることを悩んでいた。

「もう、ばれたかな。」

そして着替え終え、外に出るとレナが自転車にまたがって、いつでも行ける態勢でいた。

「はいこれ。」

「ん？。」



渡されたものは、パンでハムやレタスを挟んだ簡単なサンドイッチだ。

「サンキュ。そういえば昨日の夜、何も食ってなかったっけ。」  
思い出して腹がすいたのか、勇人はそれを5秒で食べ終えた。

「さあ、行こうぜレナ。」

「で・・・でも勇人君、自転車には乗らないのかな、かな。」

レナが心配するのも当然である。

勇人はスケボーに片足を乗っけているだけであった。

「安心しろ。俺はスケボーでチャリに負けたことなんてないから。」

「そうなんだ。じゃあ、信じるよ。」

そういつてレナは自転車を精一杯こぎ始めた。それを勇人はついて行った。

現在 9時45分

「古手神社には何分ぐらいで着くのか。」

「20分くらいかな、かな。」

勇人は腕時計を見た。

その針は勇人をあせらせた。

「おい、間に合わねーぞ。」

「しかたないよ。勇人君が起きないんだから。」

「くっそ〜。あっそうだ。おいレナ。」

「何かな、かな。」

「今回の部活、俺が勝って皆をメイド服にしてやるぞ。」

「はう〜。梨花ちゃんや沙都子ちゃんのメイド姿〜。お持ち帰りい〜。」

ギョルルルル

普通の人間が自転車では決して出せない音が出てきた。勇者の狙いはわかるように狂変したレナ（通称かぁいいモード）にすることで隠された力を発揮させることだ。勇者はここ2、3日でレナの扱い方がわかってきたようだ。「すごいな。かなり懸命にこいでいたのに4倍近くスピードが上がってんぞ。もはや人間の出せるスピードじゃないな。」と言いながらも、そのスピードに普通についてきている勇者であった。

古手神社

魅音 view

もうすぐ約束の時間。

なのに、圭ちゃんはあるうことかレナ達が遅れるとは思ってもいなかった。

「遅いね〜。もうすぐ時間だよ。」

「大丈夫なのですよ魅い。今、展望台からすごい砂煙が見えましたから。」

「それって・・・まさか・・・」

きつとかぁいいモードのレナだろう。

まさか、勇ちゃんが何か言ったんじゃないでしょうね。

「あ、誰か来ましたわ。」

沙都子に促されるように、私は階段の方を見た。

そこには一人の人影が・・・いや違う。一人が一人をおぶっている影だ。

そのおぶられているのは・・・

「レナ!？」

私は半分疑った。

あのかあいいモードのレナがばててる。

「無理にチャリをこぎすぎたんだろ。無限のスタミナかと思えば違  
つたんだな。」

勇ちゃんが少し反省気味に言っていた。

「ちよつと、勇ちゃんは何で平気なの。まさか、レナに引っ張って  
もらったんじゃないでしょうね。」

「違う、断じて違う。それを証明するのはこの汗だろ。」  
よく見ると、勇ちゃんも汗をかいている。

レナほどではないが。

そして、勇ちゃんの持っているものに目が行ってしまった。

「嘘・・・まさか、そのスケボーでレナについて行ったの?。」

「そうだ。」

一言で返された私は驚愕した。

勇ちゃん、あんたはどこまで規格外なんだい。

「す・・・すさまじい脚力でありましてよ。」

「みく、勇人は一体、何モードになったのですか?。」

「あうあう、勇人は人間なのですか?。」

皆が代わりに私の聞きたいことを聞いてくれた。

「最後の質問は結構失礼じゃないか。まあ、ガキの頃に親父に鍛えられたからな。それに、スケボーは2歳ごろから好きだったから。」  
といったが、一体どれだけ鍛えればレナのかあいいモードに勝てるのか想像がつかない。  
するとレナが口を開けた。かあいいモードのレナではない。いつものレナである。

「勇人君の両親、今はどうしたのかな、かな。」

「……聞きたいか？。酷な話だぞ。」  
場の空気が急に変わった。

すると勇ちゃんが重々しく口を開けた。

「多分レナが察しているのが合っていると思うぞ。」

「……」

レナは黙り込んだ。

一体、何があつたんだろう。

「やあやあ諸君。遅れてすまん。」

「圭一さん、遅刻でございましたよ。」

この場に似合わないタイミングで圭ちゃんが来た。

この空気から逃げるように沙都子が圭ちゃんに話しかけた。

しかし勇ちゃんは構わず話を続けた。

「この話を聞いたら、多分お前らとはもう友達ではなくなるだろう。」

それでも聞くか？。」

「な……なんなんだこの空気は。」

「俺の酷な過去話を聞くか聞かないかの空気だ。」

「勇人の過去……」

圭ちゃんは少し考えて察した。

「勇人、お前がどんな過去を持っていようが俺らは仲間だ。」

「そういうのは話を聞いてからにしろ。んで、聞くのか、聞かないのか？」

「そう勇ちゃんが問う。」

皆の答えはもう決まっている。

「聞いてやるぜ。仲間には隠し事はなしだからな。」

圭ちゃんが先陣をきつてくれた。

続いて私と皆が交代で答える。

「どんな過去を持ってたって、レナは勇人君の味方だよ。」

「このわたくしが聞いてあげてもよろしくても。」

「僕も聞いてみたいのですよ。にぱ〜」

「僕も聞くのです。仲間としてそれを受け止めてあげたいのです。」

「あたしも聞くよ。部員が聞いて部長が聞かないわけにはいかないからね。」

どんな話がこようと、私たちの意思は変わらない。

「お人よしすぎるぞ、お前ら。」

そんな態度に勇ちゃんは少し呆れ気味だった。

そして、遠くで蝉がなくこの場所で勇ちゃんは自分の過去を語り始めた。

## 仲間（前書き）

この話は全部契viewです。

## 仲間

4月

「早く行こうぜ勇人。今日はクラス替えだぞ。」

「お前は先に行行って、どうせ追い越すから。」

「わーたよ。お前のスケの早さはシャレにならないからな。」  
今日からは進級して2年生になる。

新しい空気が送り込まれるこの日は嫌いではなかった。

「さてと、んじゃ母さん、行ってきまーす。」

そして俺はいつものスケボーで登校。

途中、平十がいたが完全無視してスルーした。

### × 学校 掲示板前

今日は運がいいのか、なにもなく登校。

「さーて、俺はどこかなつと。」

人ごみをかき分けて掲示板の前についた。

「1じゃない・・・2でもなく・・・あった。3組か。」  
俺の名前は3組にあった。

だからって、何も無いんだけどな。

「おい勇人、お前スルーはねーだろ普通。」  
「どうやら、平十が追いついたようだ。」

中々、足の速い奴だ。

「お前はスルーでもせな疲れるからな。」

「ひでーな。俺らは仲間だろ。」

「わーってるよそんくらい。けど、お前とまともに話すと少し疲れ  
るんだよ。」

こいつは話したが最後、言い終わるまで話し続ける。  
そういえば、紹介がまだだったな。

こいつは西田平十<sup>にしだひらひ</sup>。中1で知り合った仲間。

親は事故で亡くなってしまい現在一人暮らし。仲間という理由はこいつには命を助けられたときにちよつとな。

「本当に仲間と思ってるのか。」

「思ってるよ。お前にはあの時から感謝しぱなっしだからな。」

「だよなだよな。そりゃー俺があの際に……」

やべ、はじまった。こうなったら……

「逃げつ。」

俺は一目散に教室に逃げた。

「おい、待てよ。俺様のカツコイイ話を聞けよ。」

「何がカツコイイだよ。ためーの話をきーたら日が暮れちまっよ。」

俺は面倒になりそうなのでさっさと教室へ行った。

それがあいつとの最後のまともな会話だった。

飛んで5月中旬

3組にも馴染んできた。

ひよんなことから、俺は平十に呼ばれて学校の屋上にいた。

「どした平十。はぶられてるから俺に何かよーか。」

「ちげーよ。……お前、今が幸せか?。」

はつきり言っつてわけがわからなかった。

とりあえず質問されたことを答えた。

「まあ、幸せかな。朝の登校と父さんが死んだこと以外は。」

俺の父さんは何者かに殺されてしまった。

まだそいつは捕まっつてないらしいが。

俺は悲しみのシヨックでふらふら歩いて交通事故に遭いかけた。

そのとき、こいつが助けてくれたんだ。



似た境遇だったから俺らはすぐに意気投合した。

「親父に会いたいのか?。」

「会えるなら会いたいさ。」

「そうか……。」

「!?, お前大丈夫か。やっぱ、はぶられておかしくなったか?。」

「ちげーよ。じゃあな」

そう言っつて、あいつは教室へ帰って行った。

このときに俺は最大の過ちをしていた。

6月下旬

母さんがインフルエンザにかかってしまい、俺は看病するために学校を休んだ。

「ごめんね勇人。いろいろ迷惑かけて、最低な母親だね。」

「なに言っつてんだよ。母さんと父さんがいなければ俺は存在しないんだから、それだけでも感謝だよ。そんじゃ、俺は薬でも買っつてくるからおとなしく寝ててくれよ。」

「ありがと勇人。気をつけて行くのよ。」

それが母さんとの最後の会話だった。

俺は薬を買い、家に帰ってきた。

「ただいまー。」

俺は母さんがいる寝室へ行った。そこに地獄絵図があるとも知らずに。

ガチャ

「母さ……。」

俺は絶句した。

血がそこらじゅうに飛び散っており、白いベットが真っ赤になっていた。

さらに、母さんの体がバラバラにされており、指がそこらじゅうに転がっていた。

「・・・ハハ、なんだよこれ。」

全く笑えるところなどないのに、俺は笑ってしまっていた。

口が開いたとき、俺はもう俺ではなくなっていた。

「やっと帰ってきたんだ。」

「!？」

振り向くとそこには・・・

「平十!？なんでお前が・・・まさかお前。」

「お前を完全に幸せにするためだよ。」

はつきりいって意味がわからない。

でもこれだけはわかる。

こいつは血塗られたのこぎりのもっていたこと。

それは母さんを殺したことを意味する。

そして俺の思いは一つ・・・

”お前を殺す”こと

「てめー！！！！母さんの痛みを思い知れ！！！」

「大丈夫。お前も死ねば父さんと母さんに会える。だから死んでくれ。」

「お断りだ！！！！てめーが死んで会ってきやがれ！！！」

近くにあった長ぼうきを持って平十に突っ込んだ。そして……

「はあ……はあ……」

俺は平十を殺した。

ぼうきの細い棒で目玉をえぐり、奪ったのこぎりで胴体を真っ二つにしてやった。

そこまでやって、俺は自分の過ちに気付いた。

「俺は……これからどうすればいいんだ……」

人を殺してしてしまった。

親はいない。

俺の仲間はだれ一人としていない。

いや、いない方がいいんだ。

仲間がいたからこんなことになったんだ。

すると、半開きの引き出しからある写真を見つけた。

「これは……生まれ場所の写真」

それは雛見沢でとったまだ幼いころの写真。

「そつえば、まだ別荘としてここに家があったっけ。……ここに隠れよう。」

俺は身支度をして家を出た。

死体はバラバラだったから袋に詰めて、近所の人には引越すといった。

子供があいさつに来るのはおかしいだろうと思ったようだがそこはうまくごまかした。

家には新聞などもとってないし、誰も来ることはない。

途中、俺は通り道の山奥で母さんと平十の死体を埋めた。

「母さん、行ってきます。」

そして雛見沢に向かった。

## 結ばれる絆

「これで話は終わりだ。」

皆は何も喋ることなく、ただ黙り込んでいた。

話の途中、勇人はレナを段差に座らせてやっていった。

「俺の過ちは父さんが死んで、その弱った心をどうにかしようと思っ間を作ってしまったことだ。俺が仲間を作らなければ母さんは助かった。」

勇人はどこか悲しそうに、一人言のように言った。

勇人は皆の方を見ながら聞いた。

「さあ、どうする？。俺を警察にでも突き出すか？。まあ、目の前に残酷な殺人をした奴がおるからな。もう仲間でも友達でもねえよな。」

「で・・・でも勇人は俺らと仲良くなってるじゃねーか。やっぱり寂しいからじゃねーのかよ。」

「理由は簡単だ。お前らはしつこそうだから、そのふりをしていなかった。」

「嘘だつ！！！！！！！！！」

「！？？」

レナの恐ろしい声とともに立ちあがった。

木に止まっていた鳥が一斉に飛び立ち、この場の空気が瞬時に凍りついた。

「レナは知ってるよ。勇人君は、本当は仲間思いな人。」

「な・・・何言うんだよ。俺はお前らを騙っていた最低な野郎だぞ。」

「じゃあ、なんで勇人君は昨日の朝、レナを助けたの？」

「お前を助けたわけじゃねえ。自分の身を守ったら勝手に助けたようになっただ。」

「じゃあ、なんでレナを先に登校さようとしたのかな、かな？」

「それは・・・」

「勇人君は心の隅っこでレナが危ない目に遭わせたくないと思つていたからじゃないの？それって仲間を傷つけたくないって思ったからじゃないのかな、かな。」

「……………」

「勇人君は間違っているよ。」

「!？」

レナは一度皆を見まわした。

そして、もう一度勇人と向き合う。

「仲間は常に自分より相手を思っているんだよ。平十君だって勇人君を思つてたに違いないよ。」

「だからあいつは母さんを殺したんだろ。」

「確かに、平十君は勇人君のためにお母さんを殺してしまった。だけど、勇人君が本当の幸せになれると間違ってしまっただけ。でも勇人君は平十君と一緒にいて幸せだったんじゃないかな、かな?。」

「それは……………」

勇人は答えることができず、黙り入り込むしかできなかった。

「勇人君は間違ってるよ。それを私たちが訂正してあげる。だから、私たちを仲間と思つて。」

そうしてレナは手を差し出した。

「無理だ。俺は母さんと約束したんだ。もう過ちをしないと。」

しかし、勇人はその手を払った。

「仲間を作ることが勇ちゃんのお母さんは本当に過ちだと思ってるの。」

「どういうことだ?。」

突然、入り込んだ魅音の方を見ながら聞く。

しかし、魅音は勇人の方を向かず、俯いている。

「私たちと一緒に部活をする勇ちゃんはとても幸せそうだった。だけど今は違う。仲間を失いそうな勇ちゃんは泣いている。」

「俺が泣いてる?。寝言は寝て言えよ。」

「じゃあ、自分の顔を確認してよ!!!そしたら、わかるから!!!」

！」

魅音はバツと顔を上げ、思わず叫んだ。

魅音は少し落ち着くとまた俯いた。

まるで、勇人の顔を見たくないように。

「なに叫んでんだよ。俺は泣いてなんか……」

勇人は魅音に言われたとおりに顔を確認するため、頬に手を当てた。そこには、涙があつた。

「あれ、なんでいままで気づかなかつたんだ？。てか、なんで俺は泣いてるんだ？。」

「勇人君、人は一人で生きていけないんだよ。必ずどこかで支えられて初めて生きていけるんだよ。」

「勇ちゃんはまた過ちをおかそうとしてるよ。」

「ふざけるな！！俺は仲間なんk「ふざけてるのは勇人君だよ！！」つ！？」

「なんで勇人君は素直にならないの？。どうして体が悲しんでるのに素直にならないのかな、かな？」

「だから俺はもうなかm「おい勇人。」なんだよもう。」

「俺もお前ほどではないが昔、過ちをおかしたことがあつた。」

圭一はおもむろに自分の過去を話し始めた。

勇人はそれをただ黙って聞いた。

「俺はここに引つ越す前、モデルガンで女の子に怪我をさせてしまったんだ。俺は親とともに自首してその場所にいることができなくなりここに引つ越してきた。そして皆と出会った。皆のおかげで俺は自分の過ちから立ち直れたんだ。だから、皆を信じてくれ。俺らがお前の過ちから立ちなおさせてやるから。」

「……なんで……」

勇人はさらに涙を零しながら言う。

「なんでだよ。お前らを騙してたのに……」

「それは勇人の本当の気持ちじゃねえ。俺らはお前の本当の気持ちが知たいんだ。」

圭一の言葉に、皆が頷いた。

そして、レナが再び手を差し伸べた。

「もう一度聞くよ勇人君。私たちを仲間と思つて。」

すると勇人は気づいたのか腰を落とした。

「……俺は……また……過ちを……繰り返そうとしてたか  
もしれない。」

「さあ、この手を取つて。」

「……こんな……過ちばかりかす俺を……頼む……」  
そういつて手を握り返した。

「大丈夫。私たちは絶対に間違えないから。そして、もう勇人君を  
間違えさせない。」

蝉が鳴くこの神社で皆の絆は偽りなく結ばれた。

「んじゃ、本題に入るよ。」

落ち着いたところで魅音は話を変えた。

「そういえば俺の雛見沢案内だったな。なんか深刻な話をして忘れて  
たな。」

「んで魅音、部活つてのは何をするんだ?。」

「よくぞ聞いてくれた、圭ちゃん。部活は各スポットに用意してあ  
る。」

「み、まずはこれなのですよ。」

そついうと梨花は勇人の手を引つ張つた。

「な……おい梨花、一体何なんだよ。」

すると、梨花は大きく息を吸い込んで

「助けてー!ー!人さらいなのですよー!ー!」

と大声で叫んだ。すると5秒ぐらい経つと草陰から人が飛び出して  
きた。

「誰だ、梨花ちゃんをさらおうとするものは!ー!」



「あ・・赤坂さん」

魅音、梨花、勇人以外一致ではもった。

「誰だあの人は？」

何も知らない勇人は一応梨花に聞いてみる。

「み〜、今日の部活は入部試験なのです。」

「え！？俺正式に入部してなかったの？」

「そうなのですよ。赤坂と相手をして決めるのです。にば〜」

圭一view

突然の赤坂さんの登場にわけがわからない俺は魅音に聞いてみた。

「おい魅音。なんで赤坂さんがいるんだよ。それに入部試験つて。」

「いや〜、レナの話聞いたたらどれくらい強いかわりたくてね。それで、入部試験をよそおって実力を測ろうと。」

「それでも赤坂さんはまずくねーか？」

あの人は一人で梨花ちゃんと助けるほどの実力者だ。

普通、子供が勝てる相手のわけがない。

「大丈夫大丈夫。危なくなったら私たちで止めるから。」

「だ・・だけどな・・。」

「ほらほら圭ちゃん、始まるよ。」

そういつて魅音は強引に話を終わらせた。

仕方がない、勇人を信じてみるか。

契view

なんか少しイケメンな成人が現れたが、梨花は平然と演技をこなした。

「助けてなのです赤坂。こいつが昨日言ったあやしい奴なのですよ。」

「・・・こいつって・・・」

「大丈夫だよ梨花ちゃん。すぐに君を助けるから。」  
あの、俺は悪役ですか。」

ここは乗ったほうがいいのかな？」

てか、あの人も少しは考えたら嘘だつてわかるだろ。」

こんな朝っぱらから誘拐なんてないだろ。」

しかもそこらへんに目撃者もいるし。」

すると梨花が小声で

「赤坂は武道をやっていたから強いのですよ。気をつけるのです。」

「ふん、赤坂か。強い奴ならやりがいがあるぜ。」

ここはノリに乗ってやるか。」

「おい、金を出せや。さもなれば、こいつの頭が宙を舞うぜ。」

そういつて俺は梨花の首にスケボーを軽く突き付けた。」

我ながら迫真の演技のつもりだ。」

「みー！！死にたくないのですよー！！」

「く・・・なら・・・」

そういつと赤坂は姿勢を低くした。」

ダッシュか？」

「!?!?・・・早い!?!?」

俺の予想通り、ダッシュだったがあまりにも速かった。」

「はあああああ。」

「うわつと。」

突っ込みを利用したパンチを俺は何とか回避した。」

しかし近くにいた梨花がいなかった。」

「これで正々堂々勝負できる。」

梨花は赤坂が抱えていた。」

何時の間に・・・」

「あいつ、パンチをおとりに梨花を助けたのか。やるな。」

俺は赤坂の目を見た。

赤坂も俺の目を見た。

「私は手加減が苦手です。自首するなら危害は加えない。」

「上等。かかってこいよ、青二才。」

俺は人差し指を立てて挑発した。

しかし、あの落ち着きっぷりは挑発の効果はなさそうだ。

こうして、俺の入部試験は幕を切った。

## 結ばれる絆（後書き）

羽入と沙都子が空気になってしまいました。  
どうもすみませんでした。

## 契の強さ

「ではこちらから参ります。」

赤坂はさつきと同じぐらいのスピードで勇人に近づいてきた。

「同じ戦法？。かなり低く評価されてるな。」

赤坂は勇人を子供と思っているのか同じ戦法で来た。

「じゃあ、決めてやるか。」

そして赤坂はまったく同じストレートパンチをくりだした。

「ひよい。」

勇人は紙一重でかわした。

「何!?!」

「もらい。」

とつさに右足を軸に回転し、遠心力を使ってスケボーの面を顔面に

ガンツ!!

「なっ!?!」

しかし、かわされて壁を殴っただけだ。

「甘い!?!」

「!?!」

すぐさま赤坂はさつきとは逆のストレートパンチをくりだした。

「読んでるぜ、そんならい。」

「なに!?!」

赤坂は一瞬動揺した。その一瞬を勇人は狙っていた。

「甘すぎるぜ。」

勇人はパンチをかわし、足払をした。

「!?!?..しまった。」

赤坂は足を取られ、バランスを崩しうつぶせに倒れる。

「くらえー!!」

すかさず、勇人は倒れた赤坂めがけてスケボーを振り下ろした。

ガッ!!

しかし赤坂は身をひるがえし、スケボーは地面をえぐった。

「ちっ・・・やはりできるな。」

赤坂は転がりながら距離をとって立ち上がった。

そして勇人の姿を確認するが

「!?!?・・・彼はどこに?。」

赤坂は転がっているうちに勇人を見失ってしまった。

すると赤坂は目を閉じた。

今聞こえるのは蝉の鳴き声だけであった。

そして一時の間ができた。

契view

俺は赤坂が転がっているうちに草陰に入った。隙を狙おうとしているのだがはつきりいつて隙がない。

あの集中じゃ、ちよっとでも物音をたてたら気付かれてしまうだろう。

「ふー。これは中々厳しい入部試験だな。」

ここは様子見でいくとするか、後ろから行くか・・・

「いや、後ろはだめだな。完全に精神を研ぎ澄ませてやがる。いやでも・・・」

俺は自問自答を繰り返しながら策を練った。

ギャラリーview

「すげー。赤坂と同格だぜ。」  
「ここまでとは、おじさん驚いちゃったよ。」  
「勇人さんは一体どのような生活を送っていらっしやるのかしら。」  
「み〜、赤坂が負けたら勇人は敵無しなのですよ。」  
「僕にはさつき何が起こったのかわけわからないのです。」  
「はう〜、不良の時もすごかったけど、今もすごいかな、かな。」  
皆、勇人に興味がわいてきているのであった。  
「お、勇人が動き出したぜ。」

勇人はこれでは進まないと思ったのか草陰から出てきた。  
出てきた場所は赤坂の後ろだ。

「くらええええええ。」

「.....」

勇人はスケボーを振り上げながら赤坂に接近した。  
すると赤坂は

「はあ!!!」

「なっ!!!」

バツク宙をした。

高さは勇人の頭一個分ぐらい上だ。

そして回転中に

「終わりだ。」

足をのばし、勇人の首の後ろを狙った。

ガッ!!!

「!?!」

「やっぱあんたは完璧すぎるぜ。」

勇人はこれを見切ったというのか振り上げていたスケボーを後ろに

倒し、後頭部から背中を完全に防いでいた。

「こんどはこっちの番だ。」

そういうと勇人は赤坂の足が乗ったスケボーを上へ思いっきり投げた。

「!!!……しまった。」

赤坂は完全に空中での制御を失った。

「ぶっ飛べええええ!!!!!!!!!!!!」

勇人は蹴りやすい位置に赤坂が落下した瞬間、左足を軸に右足を赤坂の腹に

ドゴツ!!!!!!

「ごぶっ!!!!!!」

蹴った、いや蹴っ飛ばした。

どこまですさまじい脚力なのか、赤坂は唾液を吐きながらきれいなループパスのように約6メートル吹っ飛んだ。

「やべっ。加減し忘れた。」

そして戦いの幕を閉じた。

梨花・沙都子・羽入の家

とりあえず気絶した赤坂を梨花たちの家に運び、赤坂が無事を確認すると勇人は皆と会話をしていた。

「すげーぜ勇人。あの赤坂さんに勝つなんて。」

「まさか本当に勝ってしまうとは、おじさん勇ちゃんを甘く見ていたよ。」

「どうやったらあんなに強くなるのかな、かな?。」

「み〜、今度みんなで勇人のおうちにいくのですよ。」



「いい案ですわ梨花。それなら、何故あそこまで強いのかわかるか  
もれませんか。」

「あうあう、今度は勇人の家でお泊まり会なのです。」

「おい、勝手に話を進めるなよ。」

などと皆で雑談していると赤坂が目を覚ました。

「ん・・・っ！！梨花ちゃんは・・・」

赤坂は起きると同時に梨花の状態を確認し始めた。

「大丈夫なのですよ赤坂。僕はここにいるのですよ。」

「梨花ちゃん！！よかった無事で。」

「あの〜、大丈夫すか?。」

「!!!?なぜ君がここに・・・痛・・・」

勇人の姿を見て驚いた赤坂が戦闘態勢をとるが、腹の痛みで態勢が崩された。

「赤坂、あんまり動いちゃだめなのです。彼は僕たちの仲間なので  
すよ。」

「!?!、どういうことだい、梨花ちゃん?。」

「私から説明します。」

魅音は正座をしながら赤坂に向き合った。

「本当にすみません。実は梨花ちゃんが変な奴に狙われているのは  
嘘なんです。ただ赤坂さんに協力していただきたくて騙してしま  
いました。本当に申し訳ありません。」

そういつて頭を深々と下げる。

皆も釣られて頭を下げた。

「そうだったのかい。・・・まあ、梨花ちゃんが無事なら許すよ。

それにしても君は強いんだね。どこの武道で習ったのかい?。」

「あ・・・いえ、別に武道に習ったのではなく我流です。」

「そうだったのか。君とはまた手合わせ願いたい。」

「いいですよ。・・・あっ、俺の名前は契勇人といいます。」

「契君か、赤坂衛だ。」

「よろしくつす。」

そういつて握手をした。

区切りがいいのか魅音が話し出した。

「さあて、そろそろ次のスポットに行こうか。」

「次はどこなんだ?。」

「次は入江診療所だよ。怪我したときとかにお世話になるから覚えてなくちゃね。」

「診療所か。それは知ってないといけねーな。」

「それじゃ、レッツゴー」

皆は玄関に行き、家を出発した。

遅れて立ち上がる赤坂を見て、梨花が聞いてみる。

「赤坂、本当に大丈夫なのですか?。」

「もうだいぶ良くなってる。彼は完全には急所に当てなかったらしい。だから僕も、もういくよ。」

「み〜。」

梨花と赤坂は皆を追いかけた。

皆は自転車（一人スケボー）に乗り赤坂に別れを告げ次のスポットに向かった。

皆は次のスポットに到着した。

「ここが診療所か。やっぱ田舎だけあって小さいな。」

などと失礼な感想を述べていると、中から白衣を着た人が出てきた。

「おやおや、皆さんお揃いで。どうしたのですか?。」

「監督、昨日言ってた観光です。」

魅音は昨日、ここに来ることをあらかじめ伝えておいていたのだ。

それを聞いた白衣の人が納得しながら頷く。

「そうですね。そちらの方が新しく来たという。」

「あ・・どうも、契勇人です。」

「入江京介です。見ての通りここで診療所をやっています。」

初めましての挨拶をしている二人の影で、梨花と沙都子が話し合っていた。

「沙都子、昨日で準備はできているのですか?。」

「仕掛けは上々ですよ。」

すると魅音は急に高らかに言い出した。

「それじゃ、入部試験第2回戦はじめるよ。」

「おいおい、こんな狭いところで何をするんだよ?。」

魅音は勇人を無視してあるものを取り出した。

「これは何かな魅ちゃん?。」

出されたものは空のティッシュ箱の中に紙が入っているだけのもの。

そして、魅音は説明をしまった。

「こんどは全員参加だよ。2人1組に分かれて、診療所の中にあるビー玉を一つ持ってきてもらう。三つバラバラに置いてあるうちの一つを持ってくるように。ただし、沙都子があらかじめトラップを仕掛けてるからそれをくぐりぬけてもらう。ただ見るだけじゃつまらないから先輩ぶりを見せようじゃないか。」

ちなみに、昨日のうちに沙都子が診療所を改造している。

すると、勇人があることに気付いた。

「おいおい、奇数で一人余るぞ。」

「わたくしは当然参加しませんわ。全てわかっておりますので。」

「それじゃ、全員じゃないじゃん。」

「細かいことは気にしない気にしない。」

「よーし、ちょうど退屈してたところだ。」

そーいうと圭一は箱に手を突っ込み、一枚の紙取った。

「1番か。」

「次、誰が引く?。」

「レナが引く……はう、圭一君と同じ1番だよ。」

「レナがペアなら楽勝だな。」

「次は僕が引くのです……み、2番なのです。」

「今度は僕が引くのです……僕は3番なのですよ、あう。」

「んじゃ、俺わつと……3番だ。よろしくな羽入。」

「じゃあ、私は2番だね。これで組分け完了。」

「よーし、先輩の実力を勇人に見せてやるぜ。」

圭一はやる気満々で診療所に足を踏み入れた。

すると魅音が

「あー、言い忘れてたけど、罨で服が汚れたら今日一日メイドf」

ぎゃああああああああ「あちゃー、早速だよ。」

「はう、圭一君まつ黒だよ。」

圭一は頭から墨汁を大量にかかっていた。

圭一は魅音にさっき話した内容を確認した。

「魅音、汚れたらなんだって……」

「今日一日メイド服の刑。」

「をーっほっほっほ、相変わらず無様ですわね、圭一さん。」

「せんぱーい、大丈夫かー。」

勇人と沙都子は圭一を馬鹿にするように見下していた。

「ちくしょー。こうなったらやけだー！ー！！」

圭一はタッグのことを忘れて一人診療所に突っ込んだ。

「まっつてよ圭一君。」  
レナはその後ろを追いかけた。

結果、圭一は全身汚れまくり、レナはその後ろを通っただけなので無傷。

## 2番、梨花・魅音ペア

「さーて、部長の力を見せてあげようじゃない。」

「魅いは燃えているのですよ。」

すると入江があやしい目で梨花に近づいてきた。

「梨花ちゃん、たくさん汚れてきてくださいねー。メイド服は何でもありますから。」

「みー、絶対汚れないでかえってきてやるのです。」

そういつて魅音と梨花は診療所に入った。

「ふふふ、絶対に汚させてメイド服を着させて見せます。」

すると入江は後を追いかけていった。

途中、入江の叫び声が聞こえたが、ここにいる皆はスルーした。

勇人はメイド姿の圭一に聞いた。

「あの人はいったいどういうキャラなんだ?。」

「簡単にいえば、ロリコン、メイド萌えを極めたキャラだ・・・てか笑いをこらえながら聞くんじゃないか。」

「はははは、わりー・・・でもかっこよく突っ込んでこれって・・・ぷっはははははは。」

「笑いすぎだー。」

結果、魅音と梨花は無傷だが、なぜか入江が圭一なみにずたぼろで帰ってきた。

3番、勇人・羽入ペア

勇人は沙都子に聞いていた。

「なあ沙都子、最後だとトラップの量が減ってないか。」

「をーっほっほっほ、甘いですわね勇人さん。わたくしのトラップは無量大にありましてよ。」

「大した自信だな。んじゃ、行こうか羽入。」

「はいなのです。」

そういつて勇人・羽入ペアは診療所に足を踏み入れた。

「うわー、すさまじい光景だな。」

そこは客が待機するための広間だが、墨汁やペンキで汚れていた。あるところか、クレヨンが壁に刺さっている。

「あああう、沙都子のトラップはいつもすさまじいのです。」  
とりあえず二人は注意深く奥に行くことにした。  
すると・・・

ザッパーーー！！

上から泥水が降ってきた。

「おっと。」

勇人は難なくよけた。

「羽入、かかっついてないか?。」

「大丈夫なのです。後ろにいるから平気なのです。」

「こりゃ、沙都子の言ってた通り無量大にありそうだな。」

勇人は入ってきたときよりさらに集中して進んだ。

廊下

「やっば最後は一番奥の方だな。」  
来る途中、いろいろな扉が開けられており、引き出しが開いているなど探した後があった。

「あうあう、こちら辺はまだきれいなのです。」

「気をつけるよ羽入。後ろが安全とはかぎらねえからな。」

そう言つて進むと突然後ろから声が聞こえた。

「見つけましたよ、羽入ちゃん。」

振り返ると、入江が目を光らせて立っていた。

「あう？入江がなんでここにいますか？」

「全国のロリ萌えとメイド萌えのために犠牲になつても」ゴチン

「！！ふげー！」

入江は突如飛んできたスケボーを顔面で受け止めた。

「ふざけるな、そんな理由で羽入を犠牲にするか。そういうのは妄想だけにしとけ。」

「妄想……フフフフ」

「！？」

羽入と勇人は変な殺気を感じた。

「羽入ちゃんーん。」

急に入江は羽入に向かって飛びついてきた。

「妄想に取りつかれた！？。とりあえず羽入、逃げるぞ。」

「あうあう、入江のキャラが壊れていくのです。」

勇人と羽入は全力で走った。

しかし、その時勇人と羽入はトラップのことを忘れていた。

ヒューー

少し前の方から油が入った風船が落ちてきた。

しかし、風船というものの直径2メートルはある大きな風船だ。

「やべっ……このままじゃ……」

風船は落下したら落下の衝撃で破裂してこのあたりは油まみれになっ  
てしまう。

風船落下まであと3秒

勇人は考えた。ダッシュで通っても破裂した風船の餌食。後ろに引  
き返すと羽入が魔の手の餌食。

「こうなったら一か八か・・・」

風船落下まであと2秒

「羽入!!!」

「なんですかゆうて・・・あう!?!」

勇人は羽入を抱えた。

そして後ろを振り返る。

「ついに諦めて、羽入ちゃんを差し出してくれるのですね。」

風船落下まであと1秒

「あー!!!メイド服が燃えてるぞ!!!」

勇人は片手で羽入を抱えつつ、入江の後ろに指をさしながら叫んだ。

「なに!?!どこですか?。」

それにつられて入江がマツハで振り向く。

もちろん燃えてなどいない。

そして、勇人は振り向いた入江の肩に飛び乗り・・・

「わりーな先生。犠牲はあんただ。」

入江を踏み台にして、片手で羽入を抱えつつ、天井のダクトの穴に  
手をかけぶら下がった。

風船落下



ベシャー！！

「メイド帝国に栄光あれー！！！！」

そして、入江は油に埋もれた。

「なんとか助かったな。」

油の破裂が収まった所で、勇人は着地し、羽入を下ろしてやった。

「勇人、助かったのです。入江の魔の手から逃れつつトラップをか  
わす方法をあんな短時間で見つけるなんてすごいです。」

「どういたしまして。さて、行こうか。まだ部活は終わってないぜ。」

「

はいなのです。」

そしてトラップをくぐり抜け、奥の部屋へ到達した。

そこには、目と鼻の先にビー玉があった。

「あつたのです。ビー玉なのです。」

そう言つて羽入はビー玉に近づいた。

「おい羽入、油断するな。」

勇人が注意を促すも、遅かった。

「！？・羽入！！右だ。」

既に、羽入の右からパイが飛んできていた。

「！？？」

べちやつ！

「大丈夫か、羽入？」

「大丈夫なのです。けど勇人が・・・」

勇人は羽入の盾になって、パイが服にあたっていた。

「ちえ、とつさのことだからスケボーで防げなかったぜ。」

「・・・ごめんなさい。」

「？・・・羽入？」

「僕が調子に乗ってしまったから勇人の服が汚れてしまった。僕は勇人に迷惑かけっぱなしだった。勇人は僕と組まなければ無傷で行けたはずなのに僕がそれを邪魔してしまった。だからごめんなさい。」

羽入はいつもの口調とは違うまじめな口調で少し泣き顔で謝った。

「なにいつてんだよ。羽入が悪いんじゃないね。」

「でも僕g「実を言うと俺もあのトラップはあたっていたのかもしれない。」?。」

羽入はわからない顔をしながら聞いた。

「もしレナや魅音とかと組んでいたらあいつらはちゃんとしてるから俺は油断してあたってたかもしれない。でも羽入は違う。お前のおかげで俺は注意深くなくていいんだ。だから、お前じゃなくてもあたってかもしれないんだ。」

「……。」

「だから、羽入が悪くない。ただ沙都子のトラップがすごかっただけだ。」

「……ありがとうございます。」

「さて、戻るか。」

そして勇人と羽入は来た道に戻った。

途中、入江が転がっていたのでとりあえず持って帰った。

診療所：外

「おや、帰ってきたみたいだね。」

「あつ、勇人の奴、トラップをくらってるぜ。」

「をーっほっほっほ、わたくしのトラップから逃れられぬよう最後の方にはすさまじいトラップを仕掛けさせていただきましたのよ。」

「みく、これで勇人にもメイド服を着る日がやってきたのです。」

「はうく、勇人君のメイド服姿、かあいいだろうな。」

「チクショー、あんなの着たくないぜ。」

沙都子が勇人の姿を確認すると不思議そうに目を見開いた。

「あら？どうして油まみれじゃないのですか。」

「あうあう、あの油は入江が掛かったのです。油はよけたのですよ。」

「そんな、ならどうしてあんな初歩的なトラップにやられていますの？。」

「それは・・・。」

「僕のせいなのです。」

皆は申し訳なさそうに申し出た。

皆は羽入の方に注目する。

「僕が油断してしまって、勇人が僕の盾になってくれたのです。」

「そうだったんだ。じゃあ、メイド服は無しにしてあげる。」

魅音が大目に見て、勇人のメイド服の刑を取り消しにしてくれた。すると一人、納得がいけない人がいた。

「おい魅音、それは別にいいだろ。」

「なにが？。」

魅音はとぼけた顔で言った。

その顔に圭一もキレ始める。

「なにがじゃねえ、勇人もトラップにかかったからメイド服着させるよ。」

「まあ、勇ちゃんはまだ入ったばっかだし、今回は特別にこっちにしてあげようよ。」

すると魅音はどこからかマジックを取り出した。

「圭一君だって最初からメイド服じゃなかったんだから文句はないでしょ。」

「くっそー。」

「大丈夫だよ圭ちゃん、今度からはメイド服着せるから。」

「ところで、それで一体なにを・・・。」

ガシッ

羽入・魅音以外が瞬間的に勇人を捕えた。

勇人は身動き一つ取れない状況になってしまった。

「なっ・・・おいなんだよ。」

「逃がさないのですわよ。」

「おとなしく餌食になるのです、にぱ〜。」

「なんだよそのどす黒い”にぱ〜”は。なんかこえーよ。」

「フッフ・・・どうしようかなー。」

魅音が怖い笑みを浮かべながら、ゆっくりと近づいてくる。

「何をする気だ・・・おい・・・やめるー！ー！ー！ー！ー！」

『わはははははは』

勇人の顔は、目の周り、口周りが黒かった。

もちろん、魅音の落書きのせいである。

「たく、恥ずかしいぜ。」

「メイド服より、ましだろ。」

「んじゃ次行こうか。」

こうして、皆は次のスポットへ向かった。

「わたしの診療所、ほったらかしですか。一日貸し切りでもひどくありませんか。」

その後、入江はしづしづ診療所を掃除するのであった。

## 観光終了

次のスポットに行く途中の木陰

皆はレジャーシートの上でレナと魅音が作った五重箱を食べていた。

「まだまだあるからたくさん食べてね。」

「こつちには婆っちゃんの特製おはぎもあるよ。」

「いただきますわ、圭一さん。」

「あつ！こら沙都子、それは俺が狙ってたやつだぞ。」

「をーっほっほっほ、そんなのとったもの勝ちですわ。」

「み〜、圭一と沙都子の戦いがまた始まったのです。」

梨花が苦笑いしながらその光景を見ていた。

呆れながら勇人は梨花に聞いた。

「またつて・・・おんなじことあったのかよ。」

「み〜、圭一の雛見沢案内の時にあったのです。」

「あうあう、あの時はハンバーグの取り合いだったのです。」

ちなみに、今は大根の煮物だ。

昨日からつけていたのだろっ、中まで味が入っている。

ふと、魅音が羽入の言葉の矛盾に気がついた。

「あれ、羽入ちゃんって圭ちゃんの案内の時にいなかったよっな。」

「あう！！そ・・・それは・・・り・・・梨花に聞いたのです。」

「なーんだそうだったのだ。」

「・・・めっっちゃ慌てるぞ、羽入。」

勇人はあやしいと思いつつ、箸を動かしていた。

「こっとなったら・・・くらえ沙都子。」

圭一がかぼちゃに箸を突き刺し、すかさず沙都子の口の中に突っ込んだ。

その瞬間、沙都子の顔が青ざめていった。

「いやあああああ！口の中にかぼちゃがー！ー！ー！ー！」  
「だはははは、これで俺のもの……てあれ、大根はどこにいった？。」

圭一が目を戻した時には、もう大根の煮物の姿は消えていた。

「お前ら無意識に食いすぎて食い終わってるのに気付いてねーのだよ。」

「なにー！ー！まだ味わって食べてないのにー！ー！ー！」  
圭一が本気で落ち込んだ。

背景が沙都子の顔並みに青くなっていた。

すると、梨花が圭一に気付かれないように勇人に話しかけた。

「勇人、さすがに少し罪悪感を感じるのです。」

「こうしなきゃ、これは食えんぞ。」

そう言つて、隠してあつた大根の煮物を見せた。

実は大根の煮物は勇人が別の皿に避難させておいたのだ。

「圭一と沙都子にはばれないうちに食べときな。」

勇人は圭一と沙都子以外に大根の煮物を配った。

「勇ちゃんはちゃんと皆のこと考えてるんだねー。おじさん感心しちゃうな。」

「やっぱり勇人君はやさしいんだよ。」

二人のほめ言葉に、勇人は顔を赤くしながら、ぶっきらぼうに答えた。

「お・俺だつてこれが食いたかつたんだよ。そのついでだ。」

「み、勇人の顔が赤いのです。」

「あうあう、勇人、素直になつた方が楽なのですよ。」

「うるせー。」

こうして楽しい昼食は終わり、皆は次のスポットへ向かった。

## スポット到着

到着したのはいいが、勇人は少し疑っていた。

「なあ魅音、ここが本当に観光スポットか・・・」

「そうだよ。」

「うそだろ!!。ただのゴミの山じゃねーか。」

そう、次のスポットはダム建設のゴミ捨て場だった。

「はうゝ、ゴミの山じゃないよ。宝の山だよ。」

「宝つて・・・ほんとレナには普通が通用しないな。」

勇人はレナのこと大体わかっていたのでこれ以上は追及しなかった。

「さて、次の入部試験はこれだ!!!」

魅音が出したのは水鉄砲だった。

一つ一つ皆に配り、説明をした。

「今回こそ全員参加だよ。ルールは簡単。このゴミ捨て場でバトルロワイヤル。水はいま入っているのだけ。一回でも撃たれたらアウト。」

「よし、今度こそ先輩ぶりを見せてやる。」

「そう言っつて、しょっぱなからやられるなよ。」

「それじゃ、各自散らばって。私が5分後に打ち上げ花火をあげたら開始だよ。」

そして皆はゴミの山へ向かった。

## 契view

俺はあんまり奥へは行かず、あえて近くで待機してる。

水鉄砲を調べたところ、大体15発ぐらいしか撃てないだろう。



「それにしても、結構広いんだな。」

ゴミ捨て場なだけあって土地は広大のようだ。すると少し奥で火花が上がった。

「さーて、やってやりますかね。」

俺は周りを見渡した。いまのところ誰もいな……いや、一人おる。

「さっそく俺狙いか。」

まだ誰かはわからないが誰かに狙われている。俺は精神をとぎすました。

「……………」

カタ……

「そこか!!」

約左斜め前の山から音が聞こえた。俺はそこめがけて水を放った。

バシヤツ

「みー!!」

顔面に直撃した梨花の姿が見えた。

殺気が無くなったみたいだし、どうやら梨花が俺を狙っていたようだ。

「甘かったな。」

「み、悔しいのです。」

「堂々としすぎ……!!」

突然、別の殺気を感じた。

すぐさまその方向を見ると、沙都子がこちらに狙いを定めていた。

「もらいましたわ。」

しまった、梨花はおとりで本当は沙都子か。

「うわっと。」

間一髪、かわすことができた。しかし、身を投げ出した避け方で体勢が崩れた。

「やっべ・・・」

すぐそこには沙都子が狙っていた。

「これでおわりですわ。」

年下だからって完全に油断していた。

くっ、どうすれば・・・あっそうだ。

「おい沙都子。今日圭一に口の中に入れられたものはなーんだ。」

「それは・・・!!っいやあああああ。」

「もらい。」

バシヤッ

「きゃっ。」

ふー、沙都子がかぼちゃ嫌いのこと知ってよかったな。

「ずるいですわ勇人さん。」

「戦場にずるいなんてないんだよ。」

「くらえなのです。」

「なっ!!」

さらに羽入が山の上から狙ってきた。

三重構造だったのか。

距離は5メートル。

この距離と俺の反応速度なら、まだ避けれる。

「あう!?!」

「なに!!」

羽入が足を滑らせて、ゴミの山を転がり落ちた。

しかもその先には、釘やガラスの破片など鋭いものが散らばっていた。

やばい、あんなところに落ちたら重傷だ。

「あうーーーーー!!」

「羽入!!」

「羽入さん!!」

梨花と沙都子が心配そうに叫んでいる横を俺は走った。

しかし、こんな足場の悪いところではろくに本気で走れない。

「くっそー!」

このままでは間に合わず、羽入が大怪我してしまう。

ここは……

「とどけー!」

なりふり構わず、俺はダイブした。

ザクッ

レナview

「今の声は羽入ちゃんかな、かな。」

私は羽入ちゃんの叫び声がしたので心配で声が出たほうに向かっていた。

すると……

「レナ!!」

圭一君と合流した。

どうやら私と一緒に羽入ちゃんの叫び声が心配できたみたい。

「おいレナ、今の羽入の声は何なんだ?」

「わからない、とにかく行ってみよう。」

私は宝の山を一つ、二つ乗り越えやっとなり梨花ちゃんや沙都子ちゃんがいるところについた。

しかし、そこには誰かが血を出していた。

私はとても嫌な予感がしてあわてた。

「どうしたの!?! いったい何があったの?」

そこには、勇人君が血を出していた。

お腹に大量の切り傷があった。

「おい勇人、大丈夫か!?。」

「いっつつつ、俺より羽入はどうなんだ。」

「大丈夫なのです。羽入は気絶してるだけなのです。」

近くには羽入ちゃんが眠っていた。

「どうしたの一体!?。」

遅れて魅ちゃんがやってきた。

「これは・・・一体何があったの。」

「実は羽入が足を滑らせて転がっているのを勇人が助けたのです。

でも、勇人が飛び込んで助けたのでお腹がガラスなどで切れてしま

ったのです。」

「そんな・・・とりあえず、部活は中止。早く二人を診療所へ送ろう。」

魅いちゃんは部活中断を余儀なくされた。

仕方ないよね、こんな状態だもん。

すると、勇人君が申し訳なさそうに呟いた。

「わりー、楽しい観光を台無しにしてしまった。」

「何おっしやているのですか、勇人さん。今はそれどころじゃあり

ませんでしてよ。」

「勇人、ほら肩貸してやる。」

圭一君が勇人君を立たせた。

「わ・・・私は羽入ちゃんを。」

私はあわてて羽入ちゃんをおぶった。

ここからだ、診療所までは自転車なら10分ぐらいだけで歩いて行くと30分はかかる。

「どうしよう、診療所まで結構かかるよ。」

「それでも、行くしかねーだろ。」

圭一君がそういうと皆は進みだした。

すると目の前から車がやってきた。

それは私たちがよく知っている人物だった。

「おんや〜、皆さんお揃いで。」

『大石さん』

「一体どうしたのですか、そんなに慌てちゃって?。」

「大石さん、お願い。勇ちゃんと羽入ちゃんを診療所につれてって。」

「勇ちゃん?・・・。」

大石さんは勇人君が誰なのか知らないけど、状況を把握してくれた。

「とりあえず、車に乗せてください。」

私たちは車に勇人君と羽入ちゃんを乗せた。

「後は私に任せて皆さんは帰ってください。」

そういうと大石さんは車を発進させた。

私たちはただ、その後をじっと見つめていた。

すると、圭一君が動き出した。

「仲間をほつとくわけねーだろ。行くぞ皆。」

圭一君は自転車に乗り、大石さんの後を追った。

私たちはその後ろを着いて行った。

## 契view

「あの〜、お名前は何と言いますか?。」

俺はレナたちの知り合いの車に乗せられて、とりあえず名前を聞いてみた。

「大石蔵人と申します。あなたは契勇人さんですね。」

「えっ・・・どうして俺の名を?。」

「赤坂さんを倒したそうですね。」

「あ・・・赤坂さんの知り合いですか。」

「んふふふ〜、知り合いというか職仲間と言いますか。」

「へ〜、同じ職業ですか・・・うっ。」

やっべ、出血多量でめまいが襲って来やがった。

「大丈夫・・・すか・・・契・・・」

大石さんの声がろくに聞こえねえ。

もうだめだ・・・限界・・・

## 難見沢ガーディアン

「……んん……」

日差しによつて勇人は眠りから覚めた。

「俺は……」

ふと自分の腹を見た。

そこには包帯が巻かれていた。

「そつか、俺、気絶しちまったんだ。じゃあ、ここは診療所か。よく、あれからきれいに片付いたな。」

勇人はわずかな現在の状況を理解した。

時計を見たところ、午前10時を過ぎたところだ。確実に一日は過ぎていた。

ガチャ

「おや、起きたようですね。」

声が聞こえて来たのか、入江が入ってきた。

「あ・入江先生、今は何月何日ですか?。」

勇人は自分がどれくらい寝ていたのか知っておくために質問した。

「安心してください。あれから一日しか経っていません。」

「そうですね・羽入はどうなんですか。」

「それもご心配なく、昨日のうちに目を覚まして帰りました。一応、今日も診察に来るようには行っています。」

勇人は羽入の無事を知ると、自然と安堵の息を漏らした。

すると、入口が開く音が病室まで聞こえてきた。

「入江、いるのですか!。」

「診察に来たのです!。」

勇人はもう声で分かった。

梨花と羽入が来たのだ。

きつと、沙都子も一緒だろう。

すると入江は近くのクローゼットから、メイド服をとって梨花たちのところへ行った。

「待っていましたよー。さあ、このメイド服に着替えてください。ゴチン!!! へぼっ!。」

「だからそういうことすんなって。」

入江は後頭部でスケボーを受け止めた。

一体、死角からどうやってあてたのかはご想像で。

「み〜、勇人が起きているのです。」

「あうあう、勇人、大丈夫なのですか?。まだ傷は痛むのですか?。」

「

「心配ねーよ。明日には普通に学校行くから。」

「でも、無茶はしないでくださいまし。」

「ははは、でも羽入が助かったのなら無茶したかいがあつたな。」

「あうあう、なんか恥ずかしいのです。・・・」

そう言つて羽入は照れくさそうに顔を隠した。

「そういえば、俺って出血がひどくて気絶したんだっけ。誰が血を

分けてくれたんだ。」

「み〜、僕との相性がよかつたので僕のを分けてあげたのです。」

「そうか、ありがとな。おかげで助かつたよ。」

「み〜、おかげで貧血気味なのですよ。」

「それなら、わたくしが梨花のために鉄分豊富なご飯を作つてあげますわ。」

「沙都子、ありがとうなのです。」

「とりあえず、あのぶっ倒れている先生でも起こして、羽入を診察してもらおうか。」

そういつて勇人たちは入江を起こし、羽入を診察してもらつた。

途中、入江が変なことを企んでいたが勇人によって企るみは粉碎された。



診察が終わり、異常はなかったようだった。

それから、梨花たちは勇人の見舞いをすることにした。

「わざわざそんなことしなくていいのに。」

「あう、助けてくれたお礼がしたいのです。」

「僕だって家族を助けてくれたお礼がしたいのです。」

「わたくしだって、梨花と同じですよ。」

「なら好きにしてな。」

勇人は参ったとばかりの言葉を送った。

そして三人の見舞いが始まった。

「おいこら、そんなに剥くなつて。」

今、梨花たちは勇人に食べさせるためにリンゴを剥いていた。

しかし、梨花たちは誰がきれいに剥けるのか競い始めたのだった。

「み〜、このくらい朝飯前なのです。」

「わたくしも負けませんわ。」

「あうあう、二人とも早いのです。」

「こりゃ、昼飯はリンゴ三個だな・・・」

勇人は呆れながらその勝負を見届けた。

結果、沙都子WIN

「み〜、悔しいのです。」

「あうあう、練習してからリベンジするのです。」

「さあ、勇人さん、食べてくださいまし。」

「こりゃ、当分リンゴは見たくなくなるな。」

しづぶ勇人はリンゴを食べた。

さすがに入らなかったので少し梨花たちに分けた。

「もしも〜し、今度は何やってんだ。」

何を企んでいるのか、梨花たちは自分からメイド服を着てきたのだ。

「み〜、なんなりと命令を、ご主人様。」

「勇・・・ご主人様のために特別にきてあげてますのよ・・・」

「あうあう、これをきれば勇人が元気になるって梨花が言ったのであります。」

「とりあえず、普段着に着替えてくれ。扉の向こうに恐ろしいオーラを感じるから。」

勇人はあえて誰か言わなかった。

いや、言う必要がなかった。

「大丈夫なのです。鍵はちゃんと閉めて、スペアキーもマスターキーもありますのです。」

そう言いつつ、持っている鍵を勇人に見せつける梨花。

しかし、入江の執念は甘くはなかった。

ギューーーン

「なあ、向こうからドリルの音が聞こえるのは空耳か。」

ガガガガッポコッ

「さーて、梨花ちゃん沙都子ちゃん羽入ちゃん。調教の時間がきましたよー。」

「自分の診療所壊したよこいつ・・・」

「ど・・・どうするの梨花。このままじゃ、わたくしたちは調教されてしまいますわ。」

「み〜、スペアキーもマスターキーもちやんと取ったのに、壁まで壊すなんて計算してないのです。」

「あうあう、入江の目が怖いのです。」

入江はドリルを投げ捨て、だんだんと梨花たちに近づいてくる。

完全にヘブン状態の入江だ。

「とりあえず、後ろにいる。俺が何とかしてやるから。」

勇人は庇うように梨花たちの前に出た。

「患者だからって容赦しませんよ。」

「また、やられたいようだな。」

「あなたばかりに羨ましいことはさせません。」

「羨ましいって・・・あんなー!。」

とりあえず戦闘開始。

「あつ・・・メイド服が燃えてる。」

勇人が指をさして言った。

「同じ手に通用すると思いましたが。」

しかし、さすがに入江も学習しており、引つかかることはなかった。

さらに、入江は注射を投げてきた。

勇人は「ちえ」と舌打ちしながら難なくかわす。

それと同時に飛んできた注射の中身も確認した。

「・・・あの注射、麻酔薬が入ってるな。一発でもアウトだな。」

勇人はあえて攻撃にせず、隙を狙って動いている。

注射に気をつけているのだろう。

「甘いですね契さん。そう来ることは読んでましたよ。」

「!?!?」

パリーン

急に入江は注射を地面にたたき割り、ガスマスクを着けた。

すると割れた注射から異様な気体が出てきた。

「まさか・・・睡眠ガス!?!?。」

勇人はとっさに息をとめた。

「みく、眠い・・・の・・・です・・・」

「わたくしも・・・で・・・す・・・わ・・・」

「あ……うあ……う……」

梨花たちは息を止めるのが遅かったようで、睡眠ガスを吸いこんで眠ってしまった。

「ふふふ、いつまでも、もちませんよ。」

（こいつ、メイドのためにどこまで本気になれるんだよ。）

勇人は頭の中でツツコミながら接近した。

長期戦ができなくなってしまった今、すぐに終わらせなければならぬ。

（これでどうだ。）

勇人は純粹に走ったまま右ストレートをくりだした。

「甘いですね契さん。」

入江は簡単に避ける。

しかし、勇人は振り返りもせず、止まりもしない。

そのまま、突っ走りつづける。

「……しまった。」

入江は勇人が向かっている方向を見て、気付いた。

勇人が狙っていたのは入江の後ろにあるメイド服のクローゼットだ。

「させません……！」

入江は姿勢を低くし、かあいモードのレナにも対抗できるようなスピードで勇人を追いかけた。

（単純な人だ。）

「あなたにメイド服をさわらせはしま、ガタツ なっ……！」

勇人は急にクローゼットの扉を利用してバツ宇宙をした。

しかもかなり高いジャンプのため入江は手を伸ばしたが届かず

「あっ……！」

ドンガラガシャーン……！！

クローゼットの中に扉ごと突っ込んだ。

それから当然入江は起きてこなかった。

勇人はすぐさま窓を開け、空気の入れ替えをした。

「ぶはー！！ぎりぎりだったぜ。」

苦しくなった肺に空気を送り、梨花たちを起こした。

「おい、三人とも、しっかりしろ。」

「……み……僕は……調教されて……しまったので……  
すか……」

「安心しろ。守ってやったよ。」

「んん……わたくしは……一体……」

「あう……まぶたが……重い……です……」

数分後

梨花たちは完璧に目を覚まし、勇人にお礼を言っていた。

「ありがとうございます。おかげで調教されずにすんだのです。」

「助かりましたわ。このお礼はいつか必ずしましてよ。」

「あうあう、何度も助けてくれてありがとうございます。勇人は雛見沢のガーディアンなのです。」

「何がガーディアンだよ。」

「み……今から勇人の二つの名前は”雛見沢ガーディアン”なので……」

「ちなみに、圭一さんの二つの名前は”口先の魔術師”でしてよ。」

「おいおい、高く評価しすぎじゃねーか。」

そして、日が暮れてきたので勇人たちは家に帰った。

ちなみに、勇人は入江の許可を取らずに帰った。

「わたくしはあきらめませんよー！ー！ー！」

ひぐらしの声にかき消されながら入江は叫んだ。

契家 午後10:00

勇人は寝ようと寝室へ向かった。

「明日から学校か、なんか一日しか休んでないような感じだな。」  
そして部屋の中に入った。

いざ、ベットへ向かおうとしたが・・・

「!?!?羽入!?!?。」

「!?!?。」

なんと、羽入が勇人の部屋をあさくつていた。

羽入が驚いてこつちを見ている。

「あう!?!?見えるのですか!?!?。」

「見えるつて、何言つてんだ。それに体が透けてるぞ。」

「あうあう、僕が見えるのですか!?!?なんでですか!?!?梨花にしか  
見えないはずなのに・・・。」

「さつきから何言つてんだよ。俺は幻覚でも見ているのか!?!?。」

勇人も現在の状況を飲み込めないでいた。

すると羽入は何か気付いた。

「あ・・・きつと、梨花の血をもらったから見えるのですよ。」

「一人で納得しないでわかるように教えてくれ。」

「あう、多分信じないと思います・・・。」

羽入は勇人に自分が何ものなのか、梨花がどういう人なのか、今まで自分が梨花と昭和58年の6月を繰り返していたことを話した。

「おいおい、そんな冗談があるかよ。」

「冗談じゃないのです。本当にあつたのです。僕はこの雛見沢の神  
様でオヤシロ様つて呼ばれているのです。」

「そんなの信じるのがおかしーだろ。」

「ではなんで僕の体が透けているのですか?。」

「うん、これは夢だ。俺いろいろ疲れて知らないうちに寝てたんだ  
な。」

勇人は真面目に問う羽入の言葉を無視し、意味が分からなくて耐え  
きれなくなつたのか、変な解釈をしていた。

羽入はそんな勇人の態度に少し怒りを生じた。

「えい！」

羽入は手だけ実体化して勇人のほほをつねった。

「いててて、何するんだよ！！。」

「夢じゃないのです。」

「あ……。」

「僕が言ったことはすべて本当なのです。」

羽入は勇人を真剣なまなざしで見つめた。

「……本当のようだな。お前の目が嘘を言ってる目には見えないからな。」

「信じてくれるのですか？」

「でも、まだ完全に信じたわけじゃないからな。それで、一体何の用で来たんだ？。ここにくることは何か用事があるからだろ。」

「あうあう、それは……梨花が勇人の強い秘密を探って来いって言ったのです。」

「そんなために神を使うとは……梨花、恐るべし。」

「そうですね、梨花はタヌキなのですよ。あのにば〜に皆は騙されるのです。」

「なんか、俺の秘密より梨花の秘密が聞けたな。とりあえず、俺が強い秘密は……。」

勇人は顎に手を当てながら考えていた。

数秒で答えを見つけて、手のひらを叩きながら答えた。

「自然現象だ。」

もちろん、嘘である。

「自然現象……そうだったのですか。」

「おい羽入、お前マジだと思ってい」「勇人が強い秘密は自然現象だったのですか。」「もしも〜し、羽入さん？」

「ありがとうなのです。早速、梨花に知らせるのです。」

そうして羽入は壁をすり抜けて帰って行った。

「……これでもいいのかな……。」

少しだけ後悔している  
勇者だった。



## 成績

登校中

「別に一緒に行かないほうがいいんじゃないか?。」

「勇人はレナと登校していた。」

「大丈夫だよ。だってレナにはこれがあるもん。」

「なっ!?!。」

「勇人が驚くのも無理はない。」

「レナはどこからか鉈を取り出したのだから。」

「おいおい、過剰防衛でもするなよ。」

「大丈夫、峰打ちにするから。」

「すると前から後悔の種が二つほどやってきた。」

「おうおう、おめーら金出せよ。」

「勇人は念を押して、レナに言った。」

「……峰打ちにしろよ。」

「わかってる。レナだって、やる時はやるのだから。」

「なにいつて……。」

中略

「覚えてろー!!!。」

「勇人とレナはあっけなく不良を撃退した。」

「レナって結構強いんだな。」

「えへへ、すごいでしょ。」

「改めてレナは普通じゃないな。」

「勇人君の強さも普通じゃないよ。」

そして、勇人とレナは学校へ向かった。

学校

「それでは、テストを始めます。」

『ええ〜!〜!』

全員がブーイングをした。

「聞いてありませんよ、先生。」

「そうだよ。レナも聞いてありません。」

圭一とレナが文句を言っている。

それに釣られて、皆も「そーだそーだ」とか言っている。

「あら？、委員長に伝えておくように言っておいたのですが。」

全員が魅音のほうを向いた。

視線がいきなり集中された魅音は慌てふためいた。

「ああ・・・いや、その・・・ごめんっ!〜!。」

「ごめんじゃねーよ魅音。」

「落ち着け圭一。実力と思ってやればいいだろ。」

「しかたありませんね。それでは・・・」

皆期待に満ちた目で振り返って見ていたが・・・

「実力テストにしましょう。常に日ごろから勉強していれば出来る

問題にかえますから。園崎さんはもう忘れないように。」

「すみません。」

願いは叶わなかった。

「それでは、テストを変えてきますから皆さんは少しでも勉強して

いてください。」

そう言つて、知恵先生は職員室へ行つた。

「んじゃ、教科書でもめくるか。」

「圭一君、この問題教えて?。」

「ん・・・どれどれ。」

先生が帰ってくるわずかな時間を使って、皆は勉強を始めた。

10分後

先生が新しいテストを持ってきて、配り終えた。

「それでは、テスト始め。」

「よし、勇人、勝負だ。」

「大した自信だな。負けねーぜ。」

「ちなみに、今回のテストで欠点だった人は夏休みに補講に来てもらいます。」

「ええ〜」

本日二度目のブーイング。

しかもさっきより大きい。

カラン、カラン、カラン

「はい、では後ろの人集めてください。．．．それでは委員長号令。」

「きりーつ、礼。」

昼食になり、部活メンバーは集合した。

「ちくしょー、2問空白があった。」

「はう〜、私なんか7問だよ。」

「おじさん、受験が不安になったよ。」

「不安なら勉強しろ。それしか解決法がない。」

「み〜、僕らの方も難しかったのです。」

「それでも、梨花はいつも通り百点ですわよね?。」

「あうあう、沙都子は梨花が天才だと思っているけどちが．．．あ

う!?!。」

「キムチがおいしいのです。にぱ〜。」

羽入は口元を赤くして倒れた。

そのまま、もがき苦しんでいた。

勇人はその光景を横目で見ていた。

「昨日言ってたキムチの刑だな。感覚が繋がってるのも大変だな。」

勇人は小声で言った。

「羽入ちゃん、どうしたのかな、かな?。」

「なにか悪いものでも食べた?。」

「失礼ですわ魅音さん。わたくしが作ったのだからそんなはずはありませんわ。」

「み〜、心配ないのです。羽入は眠くなっているだけなのです。」

「ほんとう梨花ちゃん?。レナにはそうは見えないけど。」

「羽入は頭に角をつけているのだから少し変わってもおかしくないのです、にぱ〜。」

「言い訳が上手いことだ。・・・いや、上手くないか」

勇人だけがこの状況を理解していた。

ホームルーム

「それでは、テストの答えを返します。今回は50点未満の人が補講対象です。」

知恵先生はそれぞれ答えを返した。

「へっ、ざっとこんなもんだぜ。」(90点)

「圭一君に教えてもらったところできたよ。でも、少し駄目かな。」(68点)

「さすがですわ梨花。わたくしの完敗ですわ。」(75点)

「僕にとって朝飯前なのです、にぱ〜。」(100点)

「あうあう、梨花はこの先後悔するのですよ。」(なにげに100

点)

ちなみに、何故、この二人が100点だと言うと、何百年も同じところを勉強しているため、完璧にマスターしているのであるからだ。「それにしても、魅音と勇人はどうなんだ。」

「圭一と同じだ。」(90点)

「くっそー、同点か。」

「魅ちゃんは?。」

「ぎくっ・・・あたしは・・・うん、よかつてひよいつと。」  
「ちよ・・・勇ちゃん。」

勇人は魅音の隙をついて、隠してあったテストを取りあげて見た。

「・・・。」

その結果に、勇人は罵った。

「どうした勇人?。」

そういつて、圭一は魅音の答案をとった。

圭一も勇人と同じような顔をしてしまった。

「これは・・・魅音、お前まじめに勉強した方がいいぞ。」

そういつて、圭一は皆に見えるよう見せた。そこには・・・

「魅ちゃん・・・40点つて・・・。」

「うっ・・・ひどいよ圭ちゃん。皆に見せるなんて。」

すると勇人は一つ提案を思いついた。

「なあ、今日の部活は勉強会にしないか?。でも、勉強会といっても魅音が勉強になれるための宿題をするだけだけだ。」

「レナはいいんじゃないかな。魅ちゃんのためになるし。」

「わたくしは別にかまいませんわ。」

「みく、僕もいいのです。」

「僕だつて、魅音のために手伝うのです。」

「わからないところは教えてやるから。魅音、勉強しようぜ。」

「う・・・うん・・・。」

そして、魅音のための部活は始まった。

「とりあえず、俺と圭一で高学年組か低学年組を教えるか分かれるか。」

「そうだな。じゃあ、くじで決めるか。」

「適当に簡単なくじを作り、二人でどっちを教えるか決めた。」

結果 高：圭一 低：勇人

「さあ、まじめにやれよ魅音。」

「わかってるよ。」

「圭一君、レナにも教えてね。」

圭一たちは早速宿題に取りかかり始めた。

「よし、こっちも始めるぞ。」

「わかりましたわ。」

「みく、わからなかったら僕に聞くといいですよ。」

「梨花、この宿題は始めてなのです。だから、梨花にもわからないかもしれないのです。」

そう言っつて、勇人たちも取りかかった。

### 宿題始め

「圭一君ここどうすればいいのかな、かな?。」

「これな・・・やって2で割るんだよ。」

「圭ちゃんこれは?。」

「ここは・・・で、この式に当てはめるんだよ。」

「勇人さん、ここはどうすればよろしくて?。」

「ああ、これは・・・であとは公式に当てはめるだけ。」

「ありがとうございましてよ。」

「どういたしまして、それより・・・」

勇人はちらりと梨花の方を見た。

梨花は紙を睨みつけて手が止まっていた。

「梨花は手が進んでないな。」

勇人が嫌みたらしく言う。

「み・・み・・この問題がわからないのです。」

梨花はあきらめて勇人に聞いた。

「最初からそう言えよ。ここは・・・。」

「勇人、僕にもそこ教えてほしいのです。」

「いいぜ。いいか二人とも、ここは・・・。」

そして、30分が経過

宿題の量はそこまで多くないので、時間はそこまでかからなかった。皆は帰宅の準備をしながら話していた。

「ふ・・・どうだ魅音。少しは勉強する気になったか?。」

「う・ん、皆がいればする気になるんだけどな。」

「なら皆でまたすればいいさ。」

「そうですね。また皆さんですればいいのですわ。」

「み・、皆でまた勉強するのです。」

「あうあう、皆となら楽しいのです。」

「はう・、皆で勉強するならレナも楽しいかな、かな。」

「きまりだな。またいつかやるか。」

「う・・やぶ蛇だった・・。」

「そう言うなって、受験生だろ。」

そして、準備が終えたところで皆は帰り始めた。

すると勇人が

「あっそう言えば、今日興宮に買い出しにいかなきゃならないから俺こっちから帰るわ。」

「そうなんだ、それじゃあね勇人君。」

「じゃあなー勇人。」

「またね、勇ちゃん。」

「ああ、またな。」  
圭一、レナ、魅音と別れを告げると、梨花が嬉しそうに言った。  
「み〜、今日は勇人と帰れるのです。」  
「少しだけどな。」  
「それでも、勇人さんと帰れるのは初めてですから。」  
「あああう、勇人たちとはいつも一緒に帰れないから少しさびしかつたのです。」  
「そんな大げさな。」  
そういつて勇人は沙都子、梨花、羽入と一緒に下校した。

下校途中

梨花は勇人のスケボーを見つめていた。  
「勇人、そのスケボーに乗せてほしいのです。」  
「どした梨花、急に?。」  
「それを調べれば勇人が強い秘密がわかるかもしれないのです。」  
「別にわからんとは思うが。ほら。」  
勇人は梨花にスケボーを渡した。  
「み〜、普通のチタン製なのです。」  
「まあ、護身用に少しレアな素材使ってるだけだぞ。」  
すると梨花はスケボーに乗って蹴り始めた。  
「おい梨花、あまり慣れないうちとはばすなよ。」  
「梨花、あぶないからそのくらいにした方がよろしくてよ。」  
「あああう、なんだか嫌な予感がするのです。」  
すると梨花の様子がおかしくなった。梨花が慌てふためいている。  
「みみみみ〜、どうやって止まるのかわからないのです。」  
「なっ!〜!」  
「梨花、目の前は坂ですわよ!〜!。」  
梨花の前に長い坂が待ち受けていた。  
「み〜!〜!止まらないのです〜!〜!。」



スケーボーが坂にさしかかったその瞬間

ガシッ

「み?。」

「大丈夫か、梨花。」

間一髪、勇人が梨花を抱えていた。

「みく、ありがとうございます。やっぱり勇人は雛見沢ガーディアン  
なのです。」

「……………」

勇人は黙っていた。

そして口を開いた。

「なあ、梨花。最近調子に乗ってないか?。」

「!?。」

「テストの時も勉強のときや、ましてや今だって調子に乗ってない  
か。」

「僕はいつもどおりなのですよ。にば〜」

「……………お前はもう魔女なんかじゃない。」

「!?, な・・なにをいつているのですか勇人は?。」

「昨日、羽入から全部聞いた。お前が6月を繰り返していたことな  
どな。」

「……………そう、すべて知っているのね。」

梨花は急に大人びた口調で言い始めた。

「そうやって、お前が黒い部分を持っているのな。」

「黒いとは失礼ね。なら、私が調子に乗っている理由を教えてもら  
いたいものだわ。」

「簡単な話だ。6月を繰り返しているせいでお前は普通を忘れてし  
まっているんだ。」

「ふふふ、何を言い出すかと思えばそのくらいのことなの。」

「そのくらいのごとが今のお前には大切なんじゃないか?。」

「……………」

梨花は何も答えなかった。

「梨花！！怪我はありませんか？」

沙都子と羽入が近づいて来た。

「みく、ガーディアンのおかげで大丈夫なのです。」

梨花はいつもの口調に戻した。

「梨花、もう慣れないことをしてはダメなのです。」

「なによ、羽入のくせに偉そうね。」

沙都子に聞こえないように話していたが勇人は聞いていた。

ゴツンッ！！

勇人は梨花の頭に拳を一つ振り落とした。

「おい梨花、人に心配かけてそれはないんじゃないのか？」

「みく、痛いのです。」

「んで、羽入に言う言葉は？」

「……心配かけてごめんなさいなのです。」

「よろしい、それが普通だ。」

勇人は梨花の頭をなでてやった。

「お前はまだ子供だ。だからわからないことが沢山ありすぎるから

な。もう調子に乗るなよ。」

「わかつたのです。勇人はこわいのです。」

「厳しく子供をしつけるのが年上の役目だからな。」

「あああう、これでもう梨花はキムチを食べてはダメなのです。」

「なにいつてるのよ、それとこれとは別よ。」

「あうく、勇人、梨花が僕をいじめ」「今のはお前が調子に乗って

たから守らんぞ。」「あう！！」

羽入は口をふさぎ、ジタバタと苦しみ始めた。

「梨花、それはどこから出したのですか？」

「みく、このキムチはどこからでも出せるのです。にぱく。」

梨花は満面の笑みを浮かべていた。

そんな光景に勇人は苦笑いで見守っていた。

こうして、低学年組との下校は幕を閉じ、勇人は買い物をしてから家に帰った。

## 動き出す影

影 view

「こんな奴らに三四は負けたんだ・・・」  
写真を見ながらため息をついた。

「まあ、僕がやらなきゃね。この新しい薬で・・・」  
この薬を作るために三四をおとりにしたからな。

「ふふふ、雛見沢はどれくらいでなくなるかな。」  
楽しみだな。もたえ苦しむ姿が目に見えかぶな。

「おっと、その前にこいつらを！！！！」  
近くにあつた鉄で写真を貫いた。

「・・・殺らなきゃな・・・おいお前ら、学校に行け。今日は終業式だし終業だけに終わらせてやれ。」

近くにいた玩具達に命令した。しかし・・・  
「うあああああああああ。」

一人が持っていた包丁で刺しに来た。  
我ながらいいできたが、狙ってもらう相手が違う。

「ふんっ！！」

ガッ！！

神経を攻撃した。

あつけなく倒れこんだ。  
身体能力はそこまで上がってないのか。

「お前は・・・」  
もう一人座っていた方に聞いたが、  
「ひいいいいいい、来るなああああ。」

ああら、こっちは別の狂乱してるな。失敗だな。

「よーしよし、楽にしてやるよ……」  
僕は鋏を持って近づいた。

グチャツ!!

「あつはははは、やっぱり血はいつ見てもいいな。」  
使えない失敗作の首を刺殺した。

いつ殺つてもきもちいな。

「さてと、こいつを学校に置いてくか。」

近くに転がっていた玩具を引きずり、連れて行った。

さあ、どうなるかな。

学校、グラウンド終業式中

「……えー、夏休みだからといって不規則な生活はせずに……  
校長の長い話と太陽のダブルパンチが生徒全員を苦しめていた。

「あちー、勇人、お前の才能で何とかしろよ。」

「何めちやくちやいつてるんだよ。暑さで頭いかれたか?。」

「はう〜、レナもこの暑さには少しきついよ。」

「おじさん、とけちやいそうだよ。」

「わたくしも少しつらいですわ。」

「み〜、これが夏休み前の地獄の校長スピーチなのです。」

「あああう、僕にとっては初々しいのです。」

部活メンバーほとんどが暑さで参っていた。

すると、勇人が校門に人影を見つけた。

「ん……あいつは……」

そこには、不良が立っていた。

「……殺す……殺す……殺す!!!!!!……」

「!?!?!おい皆、逃げる!!!」

皆は勇人の言葉の意味がわからなかったが、すぐに理解することができた。

誰かが包丁を持って走って来るのが見えたからだ。

『わあああああああ。』

ほとんどの生徒たちが恐怖し、混乱した。

「何ですかあなたは?。」

知恵先生は立ちふさがった。

しかし、不良は足を止めず、包丁を振り回す。

「うあああああああああ。あ。あ。あ。あ。」

包丁を振り回しながら知恵先生に向かった。

「先生、危ない!!!」

「くっ……。」

知恵先生は危険を察しかわした。

しかし、なぜか知恵先生を追わずに、逃げている生徒の方へ向かった。。

「!?!? 狙いが決まってるのか!?!。」

勇人はまだはつきりつとわからなかった。

だが、不良を見ると驚くことが分かった。

「あいつ……この前の不良三匹のリーダーだ。」

「勇ちゃん、何やってるの。逃げるよ。」

「しねえええええええええええええええええええええええええ。」

すると不良が包丁を投げてきた。狙いは魅音だ。

「危ねえ。」

勇人は魅音を突き飛ばした。

勇人も魅音を庇うようにそのまま地面に伏せた。

包丁は空を切つてどこかに落ちた。

「大丈夫か、魅音。」

「うん……ありがとう。」

魅音の無事を確認すると勇人は不良に向き合った。

「魅音は皆と逃げてる。こいつは俺が止める。」

「で・・・でも危ないじゃ・・・」

「俺は大丈夫だ。それよりも今は混乱している生徒達の方が心配だ。」  
部活メンバーは混乱していないが、ほかの生徒が皆混乱していた。校長やレナたちは混乱している生徒達を落ちつけようとしているが、一向におさまらない。

「こういうときは先生よりも生徒のリーダーがビシツという方がいいんだよ。だから頼む。」

「・・・わかったよ勇ちゃん。無茶はもうしちゃだめだからね。」  
魅音は皆がいるところへ行った。

「へ・・・威圧でこんなにひるむとは、よっぽどヘタレしているんだな。」

勇人は魅音との会話中、ずっと不良を威圧していた。

そのおかげで、不良は勇人と魅音が会話しているときに襲ってこなかったのだ。

「うああああああああああ。」

不良は背中にあつた金属バットを持って接近してきた。

「！！今度は金属バットかよ。どれだけ武装してるんだよ。」

「しね死ねシネしね死ねシネしね死ねシネ・・・」  
がむしゃらに勇人に振り回している。

勇人はそれを難なくかわす。

ところどころ地面にあつたついていたが、その地面はかなりえぐれていた。

「なんてバカ力だ。当たれば複雑骨折ぐらいするぞ。」

すると不良は急に勇人を無視して生徒達の方へ行こうとした。しかし、勇人はそれを見逃すわけがない。

「行かせるか！！お前が俺狙いじゃないのはわかってるんだよ。」  
勇人は足払いをした。

不良は地面に倒れ、勇人は倒れた不良の手を足で踏みつけた。

「これで、何もできないだろ。」

そう言って、勝ちを確信していた。

しかし勇人の思うどおりにはいかなかった。

「ぐぎゃああああああああああああああ。」

「っ！！、なんて力だよ。この・・・おさえきれね。」

「しねええええええええええええええええええええええええ。」

一体どこにそんな力があるのだろうか。

不良は勇人を吹き飛ばした。

吹き飛んだ勇人は近くの木に背中をぶつけた。

「がっ・・・痛・・・このやろ「じゃぎゃあああああああ。」！！。

┌

勇人を無視して皆の方を追いかけると思っていたが勇人だったが、

不良は急に勇人を狙い始めた。

そして勇人に向かってバットを振り下ろした。

勇人はまだ倒れたままだ。

勇人はすぐに身をひるがえし、その場から離れた。

トスツ

「何っ！！。」

攻撃をかわしたがそれはフェイントだった。

狂ったように見せかけ、実はちゃんと脳が働いていたのだった。

「しねええええええええええ。」

すぐさま不良は次の攻撃の準備をしていた。

「くっそ。」

勇人は食らう覚悟で顔面をかばった。

ガシツ

「そうはさせません。」

知恵先生が不良をおさえた。



勇人はその隙を逃さない。

「おらっ!!。」

勇人はすぐさま立ち上がり

バゴツ!!

あご蹴りをくらわした。

勇人の足はまだ180°に開いている。

「先生、手を離して。」

知恵先生は手を離した。

「とどめっ!!。」

ゴチャ!!

あげていた顔面にそのままかかと落としをくらわした。

不良は完全にのびた。

「ふうう、何とかなっ たな。」

「そうですね、ですg「皆のとこ行ってきます。」「あっこら。」

知恵先生の言葉を無視して勇人は皆のとこへ行った。

皆は魅音のおかげで落ち着きを取り戻し、教室へ避難していた。

「やつほー、もう大丈夫だぜー。」

勇人は軽々しく入ってきた。

「ほんとに?。」

「こわいお兄ちゃん、もういない?。」

「もうトイレ行っていいの?。」

かなり怖がっていた低学年組が勇人に聞いてきた。

勇人は視線を合わせながらやさしい声で答えてあげた。

「ああ、お兄ちゃんがやつつけてやったよ。」

「すごい、契さんはすごいですよ。」

中にはほめる生徒もいた。

「勇人君、怪我はないかな、かな?。」

「無傷だよ。」

「勇人がここにきてくれなかったら俺らは一体どうなったことか。」

「ははっ。その時はレナがどうにかしてくれてたんじゃね。」

「勇ちゃん、本当に怪我はないんだね?。」

「ああ。魅音も皆を落ちつけてくれてありがとな。」

「はう〜、魅ちゃんのおかげですぐにおさまったんだよ。」

「さすがは委員長だな。」

レナと圭一の褒め言葉に魅音は照れながら頭を掻いていた。

すると、梨花と羽入が勇人に近づいてきた。

「勇人、ちよつと来てほしいのです。」

「ん?別にかまわんぞ。」

「なになに、なんかあるの?。」

「魅いは来ちゃだめなのです。」

「僕たち古手家が村の代表として勇人に感謝するのです。」

「だから魅いは来ちゃだめなのです。もちろん、他の皆もだめなの

です。」

「ちえ〜、わかったよ。」

魅音が納得すると梨花と羽入が勇人を連れて廊下へ行つた。

誰かに盗み聞きされないように少し離れた所へ行つた。

「んで、要は何だ。感謝だけじゃないんだろ。」

「み〜、勇人はなんでもお見通しなのです。」

「あうあう、勇人は鋭いのです。」

「お前ら巫女ペアに話があるって言うなら何かあるに決まってる。」「

「………実は。」

梨花が話し始めた。

「あの不良はまるで雛見沢症候群みたいに狂っていたのです。」

「雛見沢症候群?。」

「あれ、羽入に聞いてないのですか?。」

「いや、全然。」

「雛見沢症候群は簡単に言うとか疑心暗鬼になると殺人や自殺など、なかには首をかきむしって死んだりするのです。」

「そ・そんな恐ろしい症候群があるのかよ。」

「でも、ただ似ているだけで雛見沢症候群にしては狂いすぎなのです。」

「そんなこと言われても実物見たことないから、わからんな。」

「あう、ただ知っておいてほしかっただけなのです。」

「・・・本当か?。」

「あう、勇人の目が嘘だつていつているのです。」

「羽入の顔が嘘ですつていつてるぞ。」

「勇人は本当にお見通しなのです。」

「で、本題は?。」

「本題はさっきの続き。勇人が来る前に雛見沢症候群を利用してこの村を滅ぼそうとした人がいたのです。」

「ループの原因だったな。」

「そして、その人の野望は僕達部活メンバーが打ち砕いたのです。」

「それは聞いたんだが一体それが何なんだ。」

「雛見沢症候群は普通に生活していれば発症しないのです。」

「ということは、あれは新しい症候群と言いたいのか?。」

「それはないと思うのです。いろんな地域に症候群があるとは限らないのです。」

「じゃあ、一体あの狂い方は何なんだ?。」

「わからないのです。ただ、何か裏があると思うのです。」

「裏か・・・なら、この先気をつけないと。それに、あいつ誰か狙いがあったみたいだし。」

「!??それは本当なのですか勇人?。」  
「ああ。だって、俺を無視して皆のとこへ行こうとしてたな。それに、魅音を狙ったりしたし。」  
「……これは、本当に裏があるかもしれないのです。」  
「えっ!!まじ!?!。」  
「あああう、第二の鷹野がいるのですか、梨花?。」  
「わからない。ただそんな気がするだけ。」  
「まあ、わからないのならしょうがない。とりあえず戻るか。」  
勇人たちは皆がいるところへ戻った。

## 影view

薬の効果は少しイメージと違うな。  
それに、あのやたら強い奴は誰なんだ。  
「まあ、どっちみち殺すから関係ないか。」  
「こんどはどの玩具で相手しようかな?。」

## 繁殖

夏休みに入った部活メンバーは勇人の家で宿題会を開いていた。

「はー、宿題はだるいよー。」

「魅音、受験生らしくないな。」

「みー、受験生はあんまり宿題が出なかったのじゃないのですか？」

「そんなことない。全っ然かわらない。」

「勉強しない魅音にはぴったりだな。」

「ひどいよ勇ちゃん。」

完全に魅音はやる気がなかった。

それを少しでも起こさせるため、こつやってメンバーが集まって宿題を行っているが、効果は薄かった。

その時

ピンポーン

インターホンが鳴った。

「ん？誰だ・・・」

勇人は玄関へ向かった。

玄関の扉を開けると、そこには

「どーも、ごぶさたしております。」

変わらぬ笑顔の大石さんが立っていた。

「えっと、確か大石さんでしたっけ。」

「いやはや、覚えてくれてるとはうれしいですね。」

「助けてくれた人を忘れるようなことはしませんよ。んで、何の用ですか。」

すると、大石の目つきが突然、真面目な目つきに変わった。

「実は、この前の学校に来た不良は行方不明の人だったのですよ。」  
「へー、それで何か関係でも?。」  
「いやー、契さんは前にもあったことがあるそうじゃないですか。」  
「まあ・・・形はどうであれ一応。それがどうか。」  
「それは7月3日ではありませんか?。」  
「えーと・・・そうですね。」  
勇人は少し考えて答えた。  
「その時から彼は行方不明だったのですよ。」  
勇人は少し驚いたが、顔に出さず、すぐに大石の考えを読み取った。  
「なるほど、俺が怪しいというわけか。でも、証人がいるぜ。」  
もちろん、証人と言うのはレナのことだ。  
あの時、レナも一緒にいたので、自分の誤解をすぐに消すことはできると考えていた。  
「そうあせんなさんな。あなたが犯人とは言っておりませんよ。」  
「ん?じゃあ何が用なん。」  
「あなたが倒した不良はその後、首をかきむしって死にました。」  
「!?!。」  
これは、顔に出して驚いてしまった。  
その表情はすぐに読み取られてしまう。  
「おんや、その反応は雛見沢症候群をしていますがね。」  
「・・・まあね。」  
「そうですか・・・。用はそれだけです。」  
「へっ!?それだけ!?!。」  
「はい、それだけです。それでは。」  
勇人は啞然としていたが、大石はいつものおじさんの顔だった。  
大石さんは帰って行き、勇人は部屋に戻った。  
「誰だったの。」  
レナが聞いてきた。  
「大石さんだよ。なんか、昨日のこと聞いてきたんだ。」  
「昨日のことか。なんか感謝でもされたのか?。」

「ちげーよ。その不良が自殺したんだ。」  
「自殺ねー。警察にでも捕まりたくなかったのかね。」  
「しらねーよ。こんな話はさておき、冷蔵庫にプリンがあるから  
休みにでもしようぜ。」  
「あうあう、プリンを早く食べるのです。」  
羽入は急にはしやぎだした。  
勇人は「はいはい。」と言いながら冷蔵庫がある台所に向かった。  
「僕も手伝うのです。人数が結構いるので一人じゃ大変なのです。」  
「ありがとよ。」  
勇人と梨花は冷蔵庫がある台所へ向かった。

契view

俺は梨花に聞いてみた。  
「なあ、大石さんの職業って。」  
「勇人が思った通りなのです。」  
「やっぱ・・・警察か。」  
俺はちよつと顔をひきづつた。  
「大丈夫なのです。僕たちは勇人の仲間なのです。」  
「そうだな、その引き出しにあるスプーンを取ってくれ。」  
「みー。」  
ほんと、こいつらのお人よしには助けられるな。  
いつか、恩返しでも考えておくか。

ピンポーン

再びインターホンが鳴った。  
今度は誰だか・・・  
「今度は誰だ。」  
玄関に足を運ぶとそこには

「やあ・・・ここに皆は・・・いるかな?。」  
少し筋肉があつて、体つきがいい人が立っていた。  
そして、手にはカメラを持っていた。  
「あの、どちらさま?」みー、富竹なのです。「ん、知り合いか?。」  
梨花がこつちにやってきたようだ。  
梨花の反応からすると、知り合いかな。  
「!.....」  
すると富竹という人の雰囲気が変わった。  
「.....まずは現神人。.....うがあああああああ。」

ドガツ!!

「うがっ!!。」  
突然、土足のまま家に入り込み、俺は吹き飛ばされて壁にたたきつけられた。

「殺すころすコロス.....」

「みっ!!。」

「いつて.....!?、梨花!!。」

梨花をみるとあのカメラ野郎に首を持ち上げられ、絞められていた。

あの野郎.....

「あ.....が.....」

「シネ死ねしね.....」

「こいつ、いい加減にしやがれ!!。」

人の家に土足で踏み込みやがったあげく、人を殺すだど!??。

そんなこと、許すはずがねえよ!!

俺は容赦なく

ドゴッ!!

隙だらけの横腹を蹴りとばし、梨花をどうにか救い出した。



軽く家が散らかってしまっただが今はどうだっていい。  
梨花の様態が心配だ。

「大丈夫か、梨花?。」

「がは・・・ごほ・・・だ・・・大丈夫なのです。  
どうやら、喉は潰されてなかったみたいだ。

よかった・・・」

「どうしたの、一体。」

騒ぎに気づいて皆が来た。

「あれは・・・富竹のおじさん!?。」

「どうして富竹さんがここにいるんだ?。」

「どうやらここにいる皆、この人と面識があつたようだ。

「気をつける。こいつあの時の不良みたいに狂ってやがる。」

「そんな・・・富竹さんもなの。」

「死ねえええええええええ。」

富竹は近くにあつた物を手当たり次第に投げ出した。

「あの野郎、人の家めちやくちやしやがって。」

「どうするの、勇ちゃん?。」

「ここは狭いから逃げよう。狙いはお前らのようだし。」

「お・・・俺らが狙われているのか?。」

ビビり腰の圭一が聞いてきた。

「ああ。あいつ、最初に皆のこと聞いてきたからな。」

今は、戦うよりも安全確保の方が先決だな。

すると玄関の方から

「皆、こつちだ。」

赤坂さんがいた。

これはちよつどいい。

あの暴走機関車を止めてもらつての手伝ってもらおう。

「赤坂、来てくれたのですか。」

「早く!!。」

皆は赤坂がいる方へ走った。

しかし、ふとおかしいと思った。  
呼んでもないのに警察が来るなんて都合がよすぎる。

・・・まさか!?

「!?!。待て皆!?!。」

俺は皆を呼び止めた。

その瞬間

ガンッ!!

大石が玄関の死角から金属棒を振り下ろした。

あとちよつと遅かったら完全に梨花の頭が砕けていた。

「ちえ、なにしてる大石。」

「んっふふふ、な〜に殺せばいいのですから。」

赤坂の雰囲気が変わった。

大石もさっきのとは全く別人のようだ。

そんな、こいつらも症候群に・・・

いや、それだけじゃない。

外には軽く村人100人ぐらいが待ち受けていた。

「こいつらみんな症候群かよ。」

絶望的光景だった。

どうやってここから逃げればいいんだ。

「ああああ、僕たちどうなるのですか。」

「な〜に、ただのオヤシ口様の祟りですよ。」

大石がいつもの口調で言った。

ただ、おっとりとした雰囲気は0だが。

「あなた達はここで死んでもらいます。」

「うがああああああああ。」

後ろにはカメラ野郎、前には警察、さらに奥には村人1000人。  
希望はもうなかった。

だけど・・・

「最後まであがいてやるぜ!!。皆!!、俺から離れるなよ!!。」  
そう言つて、警察2頭をスケーボーで斬り抜けた。  
過剰防衛ぎりぎりぐらいの傷を、足につけ、動けなくした。  
次は100人バトル。  
はつきり言つて勝ち目0。  
「どけどけどけ!!。」  
とにかく振り回し続け、近づけないようにした。  
すると・・・  
「うがあああああああああ。」

ガンツ!!

一人が鋏くわをスケーボーにぶつけてきた。

「やべつ!!。」

かなりの振動で利き手が使えなくなった。  
左手じやろくに力が入らねえ。

「大丈夫、勇者君。」

「く・・・手がだめだ。」

「うがあああああああああ。」

「しねええええええええええ。」

次々と村人が襲いかかってきた。

「くっそ、万事休すか。」

もう、諦めるしかねえのか・・・

すると車の音が聞こえてきた。

かなりぶつきらぼうに運転している。

「な・・・ひき殺すつもりか。」

もう完全に希望が絶えた。

しかし、その車は村人を蹴散らし、かつ引かないように運転している。

「あれは・・・。」

魅音が何か知ってそうに見ていた。

すると車がすぐそこで止まった。

窓が開き、お茶らけな顔を出してきた。

そして……

「はろろくん。お姉、一体何の騒ぎなのですか?。」

「し……詩音!??どこから湧いて出てきたの?。」

「そんなことより、今は逃げないといけないんじゃないんですか?。」

「

質問を質問でやり取りしていた。

はつきり言ってその光景は

「魅音が二人!?!。」

「あ、勇人君知らなかったっけ?。」

「そんなことより、車に乗って乗って。」

魅音は入りきるわけのない人数を車の後ろに押し込めた。

そして、何とかその絶望から抜け出した。

「きゃっ、圭一君。レナの胸に触ってるよ!?!。」

「すまんレナ。」

「ちよつと圭ちゃん、それじゃ私の胸に当たってる!?!。」

「じゃあどうすればいいんだよ。」

「いててて、羽入!!角が俺の足引つ搔いてるぞ!?!。」

「あう、首が動かないのです。」

「ちよつと梨花、わたくしのお尻を枕にししないでください。」

「みー、ふわふわ楽チンなのです。」

ある意味、絶望は続いていた。

後ろの席に7人が押し込んでいるため、当然と言えば当然の光景。

詩音は助席に座って、その光景を笑っていた。

「あなたは誰なのです?。」

詩音は勇人に向かって率直に聞いてきた。

「あ……契勇……いてててて。羽入！！角が食い込んできてるって！！。」  
「あうあう、ごめんなさいなのです。」  
「はー、まるで圭ちゃんか二人見たいですね。」  
詩音はあきれていた。  
「で、これからどこに向かいます、詩音さん？」  
「とりあえず、本家でいいんじゃないですか。お姉もいますし。」  
「わかりました。」  
皆は園崎家へ向かった。

## 影view

おやおや、感染が速いこと。  
この季節はほんとがんばってるな。  
もう、この村は終わるだろう。  
わざわざガスなんて使わなくてもこうすればいいんだよ。  
「逃げられると思うなよ。お前ら皆死んでもらうから。」  
「さあ、賽を投げた。」  
次はあいつらの番だ。  
最も、何が出てても逃れられるわけがないが。

## 六一現る

皆は園崎家の門前にいた。

「へー、魅音の家って結構でかいんだな。」

勇人はあたりを見渡しながら純粹な感想を述べていた。

「とりあえずお姉、この人は誰で一体何があったのか教えてください。」

「あ・・そうだった。この人は契勇人。最近引っ越してきた新しい部活メンバーだよ。」

「よろしくな。」

「園崎詩音です。よろしく。」

二人とも握手をし、簡単な挨拶は終了した。

「それと私たちはなぜか狙われてるんだよね。」

「誰にですか?。」

「それがわかれば楽なんだけどね!。」

狙われているにもかかわらず、魅音はいつも通りだった。

ほかの皆も変わった様子はない。

すると門が開き、中から人が出てきた。

「おや、帰ってきたのかい魅音。宿題は進んだのかい?。」

それは、茜だった。

「今はそれどころじゃなくて。あれ見て。」

魅音が指をさす方を見ると村人がうじゃうじゃ追いかけてた。

「ふ〜ん、とりあえず入りな。ここはあたいに任せな。」

茜がゆっくりと村人たちに近づいて行く。

勇人は見た瞬間、只者ではないのを感じ取ったが、呼びとめた。

「いくらなんでも一人は危険だろ。俺も手伝います。」

「ガキは黙って大人の言うことを聞いてな。それと詩音も入りな。

葛西はあたいと来るんだよ。」

「わかりました。」

「行くよ勇ちゃん。ここは母さん達に任せようよ。」

「・・・わかった。」

皆は家に入った。

「あんたらの相手はあたしがやってやるよ。」

茜と葛西は村人へ突っ込んだ。

皆は魅音の部屋にいた。

「なあ、本当に大丈夫なのか?。」

「心配ないよ勇ちゃん。こう見えてもうちの母さんは強いよ。」

「そっか、とりあえずこれから先どうする?。」

皆は考え込んだ。

そして魅音が出した答えは

「ここに皆で泊まる。外に出るのは危険だし。」

「まあ、それが妥当だと思っけど、こんな多人数大丈夫なのか?。」

「大丈夫だよ。私が何とかするから。」

「じゃあ、話題を変えて俺が気づいた点を言うよ。」

「何に気づいたの勇人君?。」

「皆、大石さんと富竹さんの違いはなーんだ?。」

勇人は問題気味に言った。

「みー、簡単なのです。」

「うっ、一体何なのですか?。」

「それは・・・状態だよ。」

「へ、なんでかな、かな?。」

「大石さんはあんまり狂ってだったたる。それに比べて富竹さんはめっちゃ狂ってた。」

「そういえばそうだな。」

「つまり、これは何か薬かなんかが使われてんだよ。」

「!?!? 難見沢症候群の薬なのですか?。」

梨花が立ち上がり、驚いた表情で勇人を見た。

「わからない。だけど個人差があるとすればその可能性が高いだろ。」  
「あう、一体だれがそんなことをしているのですか?。」  
「わからない。これ以上はお手上げだ。だが、人の手が施されているのは確かだろ。」  
「……………」  
「どうしましたの梨花。うつむいたりして?。」  
「みー、なんでもないのでよ。」  
気を落ち着けた梨花はゆっくりと座り、考え込んだ。

ぐ

不意になつた情けない音で、全員が勇人の方を見た。

「…………わり、腹減つた。」

「勇ちゃん、空気読もうよ。」

「…………そうだ。ねえ魅ちゃん、部活しようよ。」

「…………急にどうしたのレナ?。」

「部活だよ魅ちゃん。」

「…………なるほど。よし、部活しようか。」

「おいおい、命狙われてるのにのんきだな。」

「あまいよ勇ちゃん。我が部活メンバーはいかなる時でも部活をするもんだよ。」

「そうかい。なら、何をするんだ。」

「それは…………炊事だ!。」

魅音がビシッと指を立てて言った。

すると圭一が反論した。

「おい…………ご飯ぐらい…………競わなくても…………いいんじゃないか。」

「なんだ圭一。お前炊事できないのか。」

「な…………勇人、俺が本当にできないと思ってるのか。」



「圭ちゃん、無理はしないほうさ」魅音、ルールは何だ。「・・・もう知らない。」

そう言つて、魅音は説明した。

「ルールは簡単。くじを引いて、その書いてある人に昼ごはんを作る。材料はこつちで用意してるから。」

「よし、俺の実力を見せてやる。」

圭一は燃えていた。

クイクイ

羽入が勇人の袖を引つ張った。

「ん、どうした羽入?。」

「圭一の料理は放火と同じだから気をつけるのです。」

「・・・まじかよ。」

「皆、このくじを引いて。」

皆はくじを引いた。

結果

レナ	梨花
魅音	圭一
勇人	沙都子
羽入	魅音
圭一	詩音
梨花	勇人
沙都子	レナ
詩音	羽入

話し合った結果、最初は魅音とレナが作るらしい。

あと、魅音の家の台所は広いため、二人まとめて作るということだ。

「んじゃ、ちよつと作ってくるねー。」

「梨花ちゃん、何がいいかな、かな?。」

「レナが好きなの作ってくるのです。レナが作るのは何でもおいしいのです、にぱ。」

「はう、かあいよいよ。おもちかえりい。」

レナは梨花を抱きかかえ、そのまま台所へ向かおうとした。

「レナ、間違つても梨花を料理するなよ。」

勇人の制止の言葉で、レナは梨花を置いて魅音と台所へ向かった。

すると、詩音が魅音に誰にも聞こえないように告げ口をした。

「お姉、圭ちゃんに近づくとチャンスですよ。」

「し・詩音、あんたはまた空気にもなつてなさい。」

「ふふふ、もう空気なんてこりこりですわ。」

詩音都の会話が終わった魅音は顔を赤くしながら、圭一の方を見た。それを見て、勇人は悟つて理解した。

「・・・そういうことか。」

「へ、どうということだよ勇人?。」

「お前が鈍感つてことだよ。」

「は?。」

勇人はあきれたため息を一つこぼした。

15分後

レナと魅音が帰ってきた。

どうやらレナはオムライス、魅音はしょうが焼きを作ってきた。

「じゃーん、レナ特製オムライスだよ。食べて食べて。」

「はい・・・圭ちゃん・・・どうぞ。」

「なんだよ魅音。ずいぶんとおとなしいじゃねーか。」

「そ・そんなことないよ。いつも通りのおじさんだよ。」

「そうか。」

そう言つて圭一は魅音のしょうが焼きを一口食べた。

「……うめー……。魅音、一体何を使えばこんなにつま  
くなるんだよ。」

「そ……そんなにおいしい?。」

「ああ、うますぎるぜ。店に出してもいいぐらいにな。」

「そう……よかった……。」

魅音はどこか嬉しそうにしていた。

「圭一は幸せ者だな。」

「みく、この半熟具合がとていいのです。」

「はうく、梨花ちゃんのおもちゃの食べている姿、おもちゃえりい。」

「み……レナ……首が……しまつて……。」

ベシッ

勇人はレナの頭を叩いて気付かせた。

「おいレナ、お前は梨花を殺す気か。」

「がは……ごほ……また助けられたのです。」

「ご……ゴメンね梨花ちゃん、大丈夫かな、かな?。」

「み……みー、大丈夫なのです。」

「おい羽入、お前も大丈夫か?。」

「あ……う……い……生きてるのです。感覚がつかっているの  
は辛いのです。」

ちよつと波乱があつたが、レナと魅音の料理はかなりの高評価だっ  
た。

「さて、次は俺が行こうか。」

「勇人が行くなら俺もいけ。」「じゃあやめる。」「なんでだよ。」

「ああ、僕が勇人と行くのです。」

「じゃあ、行くか羽入。」

「なんだよ、差別かよ。ひどすぎるぜ勇人。」

「悪いな。お前と一緒にやるなとオヤシロ様のお告げが聞こえたも  
んで。」

勇人は羽入と台所へ向かった。

契view

「へー、結構そろってんだな。」

「あうあう、見たことないのばかりなのです。」

材料確認をしていたがこれほどそろっているとは思ってなかった。

こんな山奥の村なのに魚もちゃんとある。

「さて、俺はハンバーグでも作るかな。羽入は何にするんだ?。」

「あう……。」

「なんだ、何も思い浮かばないのか?。」

「あう……そうじゃないのです。僕は一人では作ったことがないので。いつも梨花や沙都子と一緒に作ったのです。」

「だから不安なのか。じゃあ、簡単なものでも作ればいいと思うぜ。」

俺はそういいながら材料と向き合った。

「こんなにあるなら、デザートでも作れるな。」

「!!!何をやるのですか!!!。」

羽入が目を輝かせながら顔をグイッと勇人に近づけた。

あの俊敏な速さ、驚いたな。

「え……あー……シユーク「今すぐ作るのです!!!。」……お前、

甘いもの好きなんだな。」

「これは神の命令なのです。」

「んなことで神の権限使うな。」

とりあえず、早く始めるか。」

10分経過

「順調だな。形も悪くない。」

俺は高速でハンバーグを作り、さらに同時進行でシュウクリームもオーブンで焼いている。

「んーでもレナや魅音には勝てないかな。」

あの二人の出来はとてつもなくレベルが高かった。見るだけでがわかるほどだ。

「羽入、お前はどうか？」

俺は羽入の方を見てみた。

どうやら羽入は卵焼きやみそ汁など朝食染みたのを作っている。

「あうあう、こっちも順調なのです。」

「そうか。なあ、みそ汁にこれ入れてみな。」

「あう・・・これは魚なのですか。」

「ぶぐつていって、結構うまいんだぜ。もうさばいてやってるから入れてみる。」

「わかったのです。」

こうして、俺と羽入の料理は終了した。

「よっ、お待たせ。」

「できたのです。」

勇人と羽入は二人そろって出て来た。

「ほい沙都子。俺の特製ハンバーグだ。」

「まあ、とても美味しそうでございますわ。」

「どうぞなのです魅音。あんまりうまくないかもしれないけど食べてくださいです。」

「こういうシンプルなもの、おじさん好きだよ。」

二人の料理を目で楽しんだ魅音と沙都子は食べ始めた。

「・・・！？とてもおいしいですね。焼き加減や中の具の大きさもばっちりですよ。」

「お、なかなかいいじゃない羽入。あんた、卵焼き結構上手なんだ

ね。このみそ汁の中の魚もおいしいよ。」

「へへ、やったな羽入。」

「はいなのです。」

「そういえば、皆、デザートにシュークリーム作ってやったぞ。」

「まじかよ勇人。お前シュークリームも作れるのか?。」

「まあな。そんじゃあ、そろそろ圭一が行ったらどうなんだ。」

「よし、行くぞ沙都子。」

「なんでわたくしと行くのですか?。」

「いいから来い。」

圭一は沙都子を引つ張っていった。

沙都子は必死にもがいたが、むなしく連れて行かれた。

「あう・・・沙都子が危ないのです。」

「無事を祈ろう。」

20分後

「で・・・できたぞ。さあ、食べる詩音。」

「圭ちゃん、これは食べ物なんですか。」

「あたりまえだ。俺の特製ステーキだ。」

圭一の皿には、ステーキと言いつつ黒い塊があった。

「圭一さんはとても危なっかしいですね。もう少しで火事でしたの

よ。少しは反省してくださいまし。」

沙都子は野菜炒めを作っていた。

「はいレナさん。わたくしの野菜炒めを食べてくださいまし。」

「はうー、いただきます。」

「いただきます・・・。」

一口後

ドサッ

詩音が倒れた。

「！！っ詩音！！、どうした。誰にやられた？。」

「ぶ……ぶち……」

「何だ、言ってみる。」

「ぶちられまけてーか！！！」

詩音はスタンガンを取り出し出力最大にして圭一に向けいていた。

「ま……待て詩音。落ち着け、落ち着けばわかる。」

「圭一、ご愁傷さま。」

「おい、待ってくれ　！！。」

ドサツ！！

「ん……何だ？。」

突然、ドアが倒れた。

「見つけたよ、皆さん。」

そこには黒いフードをかぶった人がいた。

「誰かの知り合いか？。」

勇人は皆に向けて聞いてみた。

「いや、知らないよ。」

「私も知らない。」

「わたくしも知りませんわ。」

「僕も知らないのです。」

「私も知りません。」

「あう、僕にも分かりませんです。」

「じゃあ、お前は何もん……」

勇人が振り向いてさっきの人に振り向いた瞬間

バゴツ！！

「がはっ！！！」

「よそ見していると危ないよ。」

黒いフードの人が勇人の腹を殴った。

「く……お前は一体……」

「僕は鷹野たかの六ろい一。」

「鷹野……六……一……」

勇人は気絶した。

「た……鷹野つて、お前は……」

「僕は三四の従弟さ。お前たちの敵討つてところかな。」

「ところつて、他に目的でもあるのか?。」

「質問はそこまでだよ。」

すると六一の後ろから村人がうじゃうじゃやってきた。

村人全員の目は意識がない、うつろうな状態だった。

「バイバイ。」

「うがあああああああああああ。」

六一の合図で、村人達が襲いかかってきた。

役目を終えた六一はどこかへ行つた。

「羽入、あんたは逃げなさい。」

「梨花、僕も闘うのです。」

「無理に決まつてるでしょ。早く逃げなs ガシッ うぐ……」

村人が梨花の首を掴んだ。

いや梨花だけではない。

全員が捕まっている。

「しねえええええええええええ。」

「う……が……また……惨劇……に……逆戻り……な……」

の……」

皆の意識が薄れていった。



## 化身

梨花 view

どうすればいいの。こんな状況に置かれたことある人がいたら教えてほしいものだわ。

「う……あ……」

嫌だ。また繰り返さなければならぬなんてもうたくさん。

「だ……だ……れ……か……」

もう意識は持たない。ここで朽ちるのか……

”ソノ手ヲ離セ鬼ドモ。”

「しねえええ……えええ……」

え？何、急に手が緩まっっていく。何があつたの一体？。私だけじゃない。首を絞めていた村人全員離していく。

”誰ニ断リ、人殺シヲシテイル？。”

「う……」

狂つてた村人が全員怯えながらある方向を見ている。

そこには……

「勇……人……？」

勇人が立っていた。しかし、勇人からは何か神々しい感じがする。まるで、別人かのように。

”我トノ契ヲ忘レタノカ、鬼ドモ。”

「う……申し訳ありません、契様。」

契様!?!。一体何なのかわからない。神なら何か知っているかも。羽入に聞いてみましょう。

「どうなってるの羽入!?!。」

「あう・・・勇人から僕と同じ何かを感じるのです。」

「何かって何よ?。」

「あう・・・それはわからないのです。」

「肝心なところがわからないってホントだめ神ね。」

「あうあうあうあう・・・。」

こんなことで泣くなんてほんつとだめ神ね。

” 誰ダ!!!。我ガ守ルベキ神ヲナカスモノハ!!!!!!!。 ”

バリバリバリバリリン!!

『ひーーーーー!!!』

「え・・・な・・・何なの・・・」

声だけでガラスが割れていったっていうの?。これはレナの嘘だより恐ろしい。

” 気分が悪クナッタ。今スグ消工口。サモナクバ沼ニ沈メル ”

『うわああああああああ』

村人全員一目散に逃げ出した。でも、私たち部活メンバーは残っている。

「お・・・おい勇人。何言ってるんだよ。」

圭一が勇人?に近づいた。

” 忠告ニ従ワナイノカ。愚力者。 ”

「な・・・おい勇人。もう脅さなくても村人は全員帰って行ったぞ。」

「  
”・・・死ネ。”

「え!?!」

どこからか勇人?は剣を取り出し、圭一に振りかざした。

「危ない、圭一君!?!」

「やめなさい!?!」

ピタッ

「羽入!?!」

羽入がまるで子供を叱るように怒鳴った。勇人?は圭一に振りかざした剣を止めた。

「今すぐに静まりなさい。」

”神ヨ、ナゼ止メル。”

「命令です。今すぐその体を契勇人に返しなさい。」

”・・・仰セノトオリニ・・・”

バタッ

勇人が倒れた。私は羽入に問い詰めた。

「あんた、やっぱり何か知っているの?。」

「あう・・・本当にわからないのです。ただ、僕がどうにかすればいいのかなって思っただけなのです。」

「勇人!?!」

「勇人君!?!」

圭一とレナが勇人の元へ近寄った。それに続いて魅音や沙都子、詩音も駆け寄った。

「う……いつてつて……!? つあいつは?。」

「勇人君は何も覚えてないのかな、かな?。」

「覚えてるつて、何をだ?。」

「お前、俺を殺そうとしてただろ。」

「はあ!? 俺はずっと倒れてたんじゃないのか?。」

「勇ちゃん、本当に覚えてないの?。」

「だから何をだよ?。」

皆わからない顔をしていた。すると

「なんじゃい、このさわぎゃあ?。」

「婆っちゃん!? いや……その……」

魅音は何からいえばいいのか分からなかった。それは無理もないわ。散らかった食器、割れたガラス、狂気に満ちた叫び声もあった。説明の落とし前がつかない。

もしかしたらお魍は何か知ってるのかもしれない。

「お魍、契家を知っているのですか?。」

「!!! 梨花ちゃん、それをどこで聞いたんかいな!?!。」

「!?!? 知っているのですか、お魍?。」

「なあ梨花、俺がどうかしたつて?。」

勇人が話に首を突っ込んできた。ちようどいい。

「お魍、この人が契家の人なのです。」

「へ、なんの話?。」

これで勇人が何者かわかるはず。

「……梨花ちゃん、嘘はいかんよ。契家はわしが子供の時に消えたんだよ。」

「は!?!? ……おい婆ちゃん。詳しく教えてくれ。」

「なんじゃお主は。偉そうにしおいて、名をなおらんかい。」

「契勇人。あんたが消えたつていう契家のものだ。」

「ふん、でたらめを。なら……証拠を見せてみよ。」

「証拠?。」

「契家には左手の薬指に三つの渦巻き状の指紋があるはずじゃ。」  
「これか。」

勇人は左手の薬指を見せた。そこには、三つの渦巻き状の指紋があった。

「!?!つ…お主は本当に…。」

「契家の者だ。」

「お魍、契家のことを知っている限り教えてほしいのです。」

「…まさか、本当に契家の物があるとな…ついてきなさい。」

「わたくし達もよろしくて?。」

「いいんじゃないのか。別に知られて困るものでもなさそうだし。」

「でも、本当にそうとは限らないよ。」

「いいよしナ。てか、仲間に隠し事はなしだろ。なあ、圭一。」

「おう。」

勇人の了承を得たところで、皆はお魍について行った。

着いたのはお魍の部屋である。近くにはガードマンらしき人物もたくさんいる。

するとお魍は

「契様、先ほどの無礼を許してくださいませ。」

勇人に対して土下座をした。

「え…急に言われてもなんか困るぞ。」

「勇人、とにかく許しますって言えばいいのですよ。」

「う…うん。」

「ちよつと偉そうにですよ。」

「なんか、やだなそういうの。」

「しかたがないですよ。そうしないと話が進まないのです。」

勇人は少し躊躇しながら言った。

「お前の行いを許そう。」

「ありがたき幸せじゃ。」

「そしてお前が持っている契家の情報をどんな些細なことでもいい、俺に教えよ。」

「仰せのままに。」

お魘は話始めた。

「契家は、神の化身と言われていたものです。」

『え！？』

皆驚いた。

「契家は、鬼どもの監視役として神が作られたものです。」

「いやー、婆つちやがこんなに丁寧に話す日が来るとはね。」

「みー、新鮮な感じなのです。」

「だ・・・ダホマ！お主らも契様になおらんかい。」

「そんなことはどうでもいいから、早く教えてください。それと、敬語は使わなくていいですから。」

「ち・・・契様が言うなら。」

「様もいいですから・・・。」

再び話が進んだ。

「もともと、鬼どもの中には神に逆らう者もおったそうじゃ。神は自分の身を守るために契という化身を作られたのじゃ。」

「じゃあ、俺ってある意味神ってこと?。」

「そういうことじゃ・・・そうじゃ、契家は神が見えるはずじゃが見たことあるか?。」

「え・・・それは・・・。」

勇人はチラッと羽入の方を見た。羽入は『言つちやだめです』と言わんばかりに首を横に振った。

「いえ・・・見たことはありません。」

「そうか・・・わしの知っていることはこれぐらいじゃ。」

「あれ、契家が消えたって言う話は?。」

「それはよくわからんのじゃ。ところでじゃが、なぜ詩音がいるのじゃ?。」

「ああ、母さんに一緒に入れて言われたのです。」

「何をいつとる。茜は今日はこんはずじゃ。」

『え!?!』

明らかな矛盾に皆は驚いた。

今日見たその人は紛れもない茜だったからだ。

「そんな。婆つちゃ、嘘でしょ。だって、帰ってきたときに家から出てきたんだよ。」

「そんなはずあるわけないじゃろうが。」

その瞬間

ドンツ!!

突然、ガードマンが壁を破って飛ばされてきた。そのガードマンは心臓を貫かれていた。

「な・・なんだ!?!。」

そこには・・・

「か・・母さん!?!。」

茜がいた。しかし、その目は・・・

「魅音、殺してあげる。皆仲良く殺してあげるよ!?!。」

凶器に満ちていた。

茜は日本刀を振りかざした。

「皆、下がれ!?!。」

勇人はそれをスケボーで受け止めた。

「ここは俺に任せて、早く婆ちゃん連れて、窓から外に逃げろ!?!。」

「

「わかった。」

皆は勇人を置いて行くことに躊躇ためらいながらも窓から外へ出た。

「あら、外が安全とは限らないよ。」

「きゃあ!!。」

「何!?!。」

羽入が村人に捕まった。窓の外から村人が大量に待ち構えていた。

「あああう、離すのです。この・・・この・・・。」

羽入はあがいているが、あまりにも無力だった。

「すぐに羽入を離させる!!。」

「どうしようかね。あなたの首をくれるって言うなら考えてあげてもいいよ。」

「ふざけるな!!。今すぐに羽入をはな・・・ぐっ!?!。」

急に勇人がうずくまった。誰かにやられたわけではない。急にうずくまらだしたのだ。そして

「どうしたんだい、さっきの威勢は?。おじけついちゃまったのk

ドゴツ!!。が・・・。」

茜が一撃で倒れた。

”愚カナル鬼ドモ、生きテ返レルト思ウナ!!!!!!”

再び化身が舞い降りた。



## 汚れゆく化身

” 朽チヨ、愚カナル鬼ドモメ!!!。 ”

ドガツ!!!バギツ!!!ゴギヤ!!!ザシユ!!!

化身となった勇人が村人を容赦なく殺していく。

その姿はあまりにも残虐だった。

「勇ちゃん、もうやめてよ!!!。いくらなんでもやりすぎだよ!!!。」

「

” 我ニ逆ラウノ八園崎ノ者カ。我ニ作ラレタ分際デ!!!。 ”

勇人は魅音に向かって剣を振りかざした。

「危ない、魅音。」

圭一が間一髪魅音を助けた。

「大丈夫か、魅音。」

「あ・・・ありがとう、圭ちゃん。」

魅音は少し赤くなっていたが圭一は気づかなかった。

「おやおや、賑やかなことだな。」

「!!!っお前は・・・」

圭一が見た先にはあの黒いフードをかぶった鷹野六一がいた。

「やあ圭一、今回は目的があるからまだ殺さないよ。」

「お前、何か知っているのか?。」

「言っただろ、質問はもう終わりって。」

すると六一はあやしい缶を地面に落とした。

プシューー

中からあやしい煙が出てきた。

すると、圭一達の体が自由を奪い、地面に倒れていった。

「お・・・お前・・・何を・・・」

六一はガスマスクを着けて言った。

「安心しろ、症候群の人以外のための麻痺薬の気体だから。・・・

おい、早く持つてこい。」

六一が命令すると羽入をとらえていた村人が来た。

六一は羽入に話しかけた。

「マスク越しですみません、神様。」

「!?!?・・・どうしてそれを?。」

「僕はなんでも知ってますから。この雛見沢に関して、知らないことと言えばあれだけ。」

六一が指をさした方には勇人が暴れていた。

勇人には謎のガスなど通用していなかった。

” 神ヲ離セ!!!。 ”

化身の勇人は残っていた村人全員殺して六一に向かった。

「わかったわかった。すぐに済まして離してやるよ。」

「な・・・何をする気なのですか?。」

「大丈夫、ちよっと痛いだけだから。」

グシュ!!!

「う!!!・・・」

六一は片手の指で羽入の腹を刺した。

「目的達成。」

” 貴様、神二何ヲ!!!。 死ンデワビロ!!!!!!!!! ”

化身の勇人は剣を六一に投げた。六一はそれを紙一重でかわす。

「おっと、まだ死にたくないよ。それじゃ、目的は達成したしバイバイ。」

六一は羽入を置いて逃げた

” 逃ガスk・・・グ!?・・・何ダ・・・体ガ・・・動力ナイ”

「そりゃ、麻痺毒の気体を吸いまくれば普通動かなくなるよ。強力だったのによく今まで動けたね。ほめてあげるよ。」

そう言つて六一は勇人に拍手を送った。  
完全に人を見下しながら。

” コノ・・・愚力者・・・”

気付いた時には、六一の姿はもう見えなくなった。

数分後、ある人が現れた。それは

「か・・・葛西・・・」

詩音はいち早く葛西に気づいた。

「とにかく・・・解毒・・・薬・・・を・・・」

詩音はそう懇願すると、葛西はポケットから瓶を取り出した。

それは、解毒薬だろう。

葛西は知っていたかのように詩音に解毒薬を飲ませようとした。  
すると勇人が

「ちよつと・・・待て・・・。」

勇人は躊躇することなく聞いた。

「お前・・・離見沢症候群・・・」

葛西は何も言わず、首を横に振った。

「ほら・・・大丈夫・・・だって・・・」

詩音はこう言っているが勇人はまるで疑っている。

「じゃあ・・・後ろにいる・・・人は・・・誰だ・・・」

「!?!」

葛西は後ろを向いた。その瞬間

バンツ!!

「う・・・ぐ・・・」

葛西が撃たれた。足に弾が貫通している。

「大丈夫ですか、皆さん?。」

後ろから現れたのは

「え・・・葛西?・・・」

もう一人の葛西だった。

「すみません、詩音さん。少々手間取ってしまった。」

「じゃあ・・・この人は・・・」

「偽物です。さあ、これを。」

葛西は皆に薬を飲ませた。

勇人は何の疑わなかった。

正真正銘の解毒薬だ。

少し経って薬の効果があらわれ、皆の麻痺は治った。

「羽入!!。」

梨花は真っ先に羽入の元へ駆け寄った。

幸い、出血はひどくない。

「羽入、しっかりしてよ羽入!!。」

「梨花・・・大丈夫なですか?・・・」

「バカ、こういうときに何相手の心配をしてるのよ。」

「僕は・・・梨花が笑うのならそれでいいのです。」

「おい、勝手に死ぬようなことを言うな。殺させはしない。」

勇人は羽入の服を捲り、傷口を見た。

「……このくらいならすぐによくなくなる。とりあえず安静にするんだ。」

「わかったのです。」

「皆、羽入を運んでくれ。」

「勇ちゃんはどうするの?。」

「ちょっと気持ちの整理してくる。なんか化身やら黒フードやら「ちやごちや」してるから。」

「そう……わかった。」

そういつて、勇人はこの場を離れた。

「あのお方はすごいですね。」

「一体なにがすごいのかよ。あんた勇ちゃんのこと見てなかったじゃない。」

「彼は私が後ろに隠れていることを知っていたのです。そして、最善の方法を選んだのですよ詩音さん。」

「え……まつさか。」

「これが証拠です。」

葛西は自分に化けていた村人の腰からピストルを取り出した。

「これがある限り私はうまく狙えなかったのです。失敗すれば詩音さんや皆さんが殺されてしまう。そのチャンスを彼は私にくれたのです。」

そう、葛西が後ろから狙っているときにもし気づかれたら詩音や皆の命が危ない。

ましてや、素早く打つとなると誤射してしまうかもしれない。

そのことを踏まえて、勇人は偽葛西を後ろに向かせ、葛西にチャンスを与えたのだ。

「ふふ、葛西がこんなに褒めるなんて勇ちゃんはほんと神の化身ですね。」

「ははは、神の化身とはよいお例えでしょう。」

そして、葛西と詩音は皆の後について行った。

契view

俺は庭にあつた池の前に立ち止まった。

水面には自分が映っている。

「……一体……俺は……」

自分に絶望していた。

そりゃ、仲間を守るためだって言っても村人を3、40人は殺したから。

完全なる残虐者だ。

「こんな汚れた自分が憎い……」

くそ、胸糞悪い。

ガリガリガリ

首がかゆい。

自分に腹立たしい。

「あー……いらだつ……」

ガリガリガリ……ドンッ

「ん？…なんだ…」

急に後ろから押された。でも、押す力は弱かった。

振り向くとそこには梨花が涙目で見ていた。

「なんだ梨花か。俺を池にでも落としたいん」「勇人、手を見てくだ

さい。」「へ……」

俺は言われるがままに手を見た。

すると片方だけが血まみれだった。

「な……血が……」

首から血が出ていることに今気づいた。

梨花が気づかせるのが遅かったら死んでたかもしれない。

「勇人……一人で何を悩んでいるのですか？」

「悩んで……ない……」

俺は全然ありますと言ってるように答えてしまった。

動揺するとは、俺もまだまだだ。

「僕は誰かがいない世界なんていらななのです。例え最近来た仲間でも。」

「梨花……」

「勇人は僕が守りますから安心してください。」

……何やってんだ俺は。一人で悩んで首かきむしって、あるところか仲間心配かけさせている。

「……弱いな俺……」

「勇人？。」

「心配かけたな、お前のおかげで気づくことができた。」

俺は血を拭いてこう言った。

「この雛見沢を守る。俺は雛見沢ガーディアンだからな。」

「みー。」

そして、俺は梨花とともに魅音の家に戻った。

## 圭一の決心

「お待たせなのです。」

梨花と勇人が皆のところに戻ってきた。

羽入はもう起きていた。

「どうだ羽入、具合は？」

「あああう、もう大丈夫なのです。」

「ところで、首にある怪我はどうしたのかな、かな？」

「これか？。これはたぶん化身状態の時にでも怪我してて、そんなもって梨花に軽く治してもらった。」

当然、梨花と戻っている時に考えた嘘である。

「皆がそろったことだし、話を始めるんだろ、魅音。」

「そうだね圭ちゃん。」

「話ってなんだ？」

「羽入ちゃんのことだよ。」

「あう？僕なのですか？」

レナが聞き出した。

「あの人が言っただけ、神ってどういうことかな、かな？」

「あう・・・それは・・・聞いた通りだ。」ゆ・・・勇人。」

「もう隠す必要がないだろ。なあ梨花？」

「にば。」

梨花は「いいです」という笑顔を勇人に向けた。

「ほら、お前から言え羽入。」

「あう・・・わかったのです。実は・・・」

かくかくしかじか

「うーん、なんか不思議だね。神様がこんな近くにいたなんて。」

「まあ、確かにな。」



「あう……今まで言わないでごめんなさい。」  
「いいよ。そんなことで私たちの絆は消えないよ。それより、おじさんはも一つ気なることがあるんだけど?。」  
「なんだ魅音?。」  
「化身状態の勇ちゃんが言ってたんだけど、園崎家が作られたって言ってたんだけど。」  
「まじかよ魅音。俺の先祖は一体何やってんだ?。」  
「さあー、おじさんに聞かれてもわかんないよ。」  
「それもそうか。」

ぐ

完全場違いな音が響いた。

皆は一斉に勇人の方を向いた。

「わり、腹減った。」

「勇ちゃん、空気読もうよ。」

「み、デジャブが起こってるのです。」

ぐ

今度は羽入の方から聞こえた。

「あ……あう……。」

羽入はうつむきながら顔を真っ赤にしていた。

「そういえば勇人と羽入は食べてなかったな。」

「……あつ、そういえば台所が荒らされてないならシュークリームがあ」「勇人、レッツゴーなのです!!。「うわ、引っ張るな羽入。」

羽入が勇人の袖を引っ張って音速で台所へ向かった。

台所

「いててて・・・どうやら荒らされてないようだな。」

「シュークリームはどこですかー！ー！！。」

「落ちつけ羽入。大体、シュークリームを昼飯にしようとする気が！?。」

「どこですかー！ー！！。」

「ダメだこりゃ。完全に壊れてる。」

何を話しても聞かない羽入に対し、勇人が取った行動は・・・

ガッ

「うつ・・・」

なんと勇人は羽入を気絶させた。

「これでおとなしくなったな。さすがに神だからって昼飯をシュークリームだけにするわけいかねえからな。」

そういつて勇人は料理を始めた。

「そうえば、材料使うつて断つてないけど・・・ま、いつか。」

羽入起床

「うつ・・・シュークリームは・・・」

「その前に、これを食べてからだ。」

勇人は羽入が寝ている間に昼飯を一通り作っておいた。

一通りといつても、ハンバーグ・サラダ・コロッケ・みそ汁・ご飯といろいろ作っていた。

「あう、僕は何時間気絶していたのですか?。」

「安心しろ、たった15分だ。」

「じゅ・・15分なのですか。・・それだけでこんなに・・・」

「まあ、食おうぜ。シュークリームはその後だ。」

勇人と羽入は食べ始めた。

食べている途中

「勇人は何でもできるのですか?。」

「何でも・・とはわからんがほとんどできるぞ。」

「じゃあ、けん玉」できる。「シャボン玉」できる。てか、シャボン玉って・・「僕はうまく飛ばせないのです。」

羽入は少しふくれっ面で言った。

「はは、悪かった。そう怒るなつて。」

そういつて、羽入の頭をなでた。

「あう・・・」

「どうしたんだ?。」

「僕、あんまり頭なでられたことがないのです。だから・・・何だか恥ずかしいのです。」

「でも、どこか安心するだろ?。」

「はいなのです。」

「そういうことだよ。」

「あう?。」

羽入は理解できていなかった。それを勇人は鼻で笑いながら昼食を食べ始めた。

「」馳走さま。」

「」さつそくシュークリーム め ゴンツ い・・痛いのです。」

「」馳走さまを言え。ちゃんと俺らに命をくれた肉や野菜にお礼を言え。」

「」馳走さまです。」

「よろしい、ほい。」

そう言つて、勇人は羽入にシュークリームを渡した。

「あむ・・・」

羽入はすぐさま一口。

「どうだ?。」

「とつつつてもおいしいのです。」

羽入は幸せな笑みを勇人に向けた。

「んじゃ、皆にも食べさせるか。戻るぞ羽入。」

勇人はシュークリームを持って羽入と皆のところへ戻つた。

勇人と羽入は皆のところに戻り、シュークリームを食べながらこの先どうするか検討し始めた。

「どうしよつか、皆?。」

「お姉は人任せですね。」

「だってー、何も思い浮かばないんだもん。」

「お前だけが知らないってわけじゃないぞ。」

すると梨花が

「入江のところに行つてみるのです。入江は雛見沢症候群について研究してるからそれを治す薬が完成すれば・・・」

「村人、皆助けられるってわけだね。」

「さすがですわ梨花。さえてますことよ。」

「にぱ。」

「はうく、おもちかえりい。」

レナ覚醒。

「おいレナ、落ち着k「ささ」と。「うわつ。」

勇人は圭一を瞬間的にメイド服に着替えさせた。

「勇人、お前どっから持ってきた。」

「突っ込むところはそっちか。ほら来るぞ。」

するとレナの目が圭一に向いた。

「待てレナ、早まるな。」

「圭一、梨花を助けるためだと思え。そしてご愁傷様。」

「圭一君かぁいいよ、おもちかえりい。」

「うあああああああああああ……。」

さつきまでのことが嘘のように、にぎやかになったこのときであった。

ひと時の時間が流れ、ちょっとおちゃらけがあつたが考えた結果出た答えが

「今日はもう遅いから、ここに泊まって明日監督のところへ行くことにしよう。」

「監督つて誰だ?。」

「そういえば勇人君は言つてなかったね。」

「監督は入江先生のことだ。雛見沢ファイターズの監督なんです。」

「ああ……あのメイド先生か。」

「その雛見沢ファイターズには詩音の好きな人がいたんだけどね。」

「お・お姉、その話h「何だ、聞かせてk」それ以上言つとどうなるかわかりますね?。」

詩音は勇人にスタンガンを向けた。

「はい、わかつております。」

「ならよろしい。」

「とりあえず、飯を食おうぜ。腹減ったぜ。」

「ああああ、圭一さんは大食いですこと。」

「違う、成長期だからだ。」

「じゃあ、私ご飯作ってくるよ。」

「私も手伝うよ魅ちゃん。」

そう言つて魅音とレナは台所へ向かった。

「僕は散歩してきます。」

「わたくしも少し外の風にあたってますわ。」

「僕も行くのです。」

低学年組もこの場から出た。

「私もちよつとトイレに行ってきますね。．．．のぞいたらわかつてますね。」

詩音は男二人に忠告して出て行った。

「暇だな圭一。この時間がずっと続けばいいのにな。」

「そうだな．．．なあ勇人。」

「何だ?。」

「今日の夜、ちよつと付き合ってくれないか。」

「は!?!?．．．お前ホモだったのか。」

「違う!?!?．．．なんか物騒になってきたから鍛えてほしいんだ。」

「ふくん、別にいいけど何で急に?。」

「やっぱり俺も仲間として守りたいんだ。レナや魅音、皆を。」

「そうか、なら夜にな。間違って寝るなよ。」

「俺は本気だ。」

「そうか、バカにして悪いな。」

数分後、低学年組と詩音が戻り、レナたちがちよつど作り終えていたので皆で夕食を食べた。

食べ終わった勇人が口をあけた。

「さーて、ちよつくら食後の運動してくる。圭一、ちよつと付き合え。」

「ああ、わかった。」

勇人と圭一が出ようとした。勇人が出る際に

「お前らはもう寝ていいぜ。」

そういつて勇人と圭一は出て行った。

外：庭

「お前は何か武器になりそうなものを使ってないのか？」

「バットを少し使えるぐらいだな。」

「じゃあ、これを持ちな。」

勇人は圭一に長ほうきを渡した。勇人も長ほうきを持っている。

「いくぜ圭一。ルールは大怪我させないだけ。」

「おい、ちよつとタンマ・・・」

圭一の言葉を見無視して勇人は早速突っ込んだ。

勇人の容赦ない訓練が始まった。

## 意味

「おらおらおら。」

圭一は振り回しながら勇人に向かった。

しかし、勇人は簡単にあしらい、つまらなそうな顔をしていた。

「甘いつ!!。」

ベシッ!!

勇人は一瞬の一太刀で圭一の横腹を突いた。

「ぐは・・・」

「どうした、その程度でくたばるのか?。」

「お・・・おい勇人、何かコツでも教えてくれよ。」

実は勇人は圭一に何一つ教えていない。

圭一は何度も理由を尋ねるが、全くもって答えてくれなかった。

「ダメだ。ほらいくぞ。」

そう言つて勇人はまた圭一に突っ込んだ。

「く・・・くっそー。」

圭一は勇人の攻撃を防ぐが、勇人は笑っていた。

「隙だらけだぜ。」

ボゴッ!!

腹蹴りヒット。

ずっと筈に目が言っていたため、完全な不意打ちだった。

「が・・・」

「もういつちよ。」

ゴンッ!!



縦振りが頭にヒット。

「っ……いつてー！」

圭一は腹と頭の痛さのあまりにひざまついた。

「もう終わりにするか?。」

「くっそー。まだまだ。」

「……。」

勇人は無言で圭一に突っ込んだ。

その後も勇人は容赦なく圭一をボコボコにした。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

圭一は息切れ起こしているが勇人はまだ余裕だ。

「……どうする?。」

「まだ……まだ……」

「ならこいよ。お前から突っ込んでみるよ。」

「く……く……く……」

圭一は残りの力を振り絞るように大きく構えて突っ込んだ。

「もう限界か。こんなに大きく振りかぶるとは、基礎知識まで死に始めたか。」

そう言つて、勇人は右足を後ろに出し、ほうきの先を圭一の腹に狙いを定めた。

勇人はこの腹突きで終わらせるつもりだ。

「こいつで終わりだ。」

「……かかったな。」

「!?。」

圭一は急に大きい構えを直し、横へステップした。

「へへ、俺が口先の魔術師のことを忘れたか。こうでも言えばお前が本気で来ると思ったんだよ。」

圭一は勇人の横に着いた。勇人の攻撃は突きのため横に回ればチ

ヤンスである。

「うまいな。だがこの構えは突きだけじゃないぜ。」

「何!?!」

そういうと勇人は後ろに下げた足を軸にして回転しながら姿勢を低くした。

「おしかったな圭一。」

勇人は回転の遠心力を使って、圭一の足を狙った

ガンツ

「何!?!」

圭一はとっさにほうきで防いだ。

「甘いぜ勇人。お前がそんなくらい用意していることは見え見えなんだよ。」

圭一はとっさに勇人の足を払った。

「おわつ。」

勇人は完全にバランスを崩し仰向けに倒れた。

「くらえ勇人。」

圭一は今度こそ大きく振りかぶった。

パシツ!!

「何!?!」

勇人は片手で振り下ろされた箒を取った。

「また、おしかったな圭一。」

グイツ!!

「なあ!?!」

勇人はそのまま引つ張り、ほうきを奪った。

「く……こうなれば……」

圭一はとっさに拳を振り上げた。

「……」

勇人はなぜか何もしなかった。そして

ドゴツ!!

「ぐっ……」

圭一の拳は勇人の腹を食い込んだ。

「や……やった……やったぞ。勇人に一本取ったぞ。」

勇人は痛みを耐えながら立った。

そして勇人は口を開いた。

「……なあ、圭一。」

「ん……どうした勇人。まさか、今はなしとか言わねえよな?。」

「そうじゃない……」

「じゃあ、何だよ。教えるよ。」

「ダメだ……気づかないなら今日の修行は終了だ。」

「はあ!?……なんだよ、負け惜しみか。情けねえなあ。それで

も難見沢ガーディアンかよ。」

「……ダメだこりゃ。」

「だから何がダメなんだよ!?!。」

圭一が少し怒りだした。

「はてさて、圭一は何年かかるかな?。」

「なんだよ!!いいかげんにしろよ!!さっきから無視しやがって

!!。」

圭一は完全にキレた。

それでも、勇人は表情を一つも変えず、夜空を仰ぎ見た。

「ちなみに俺は親父からこの方法で鍛えられた時は5年かかったぞ。

まあ、3歳ぐらいだったから理解が浅かったせいだけだ。」

「さっきからなに訳の分らんことを!!。いい加減にしろ。」

圭一は勇人に向かつてまた拳をあげた。  
「……今なら親父の気持ちがわかるな。」  
勇人は聞こえないように呟いた。そして

ガッ！！

「いつて！！。」

圭一の振り下ろした拳をほうきで殴った。さらに

ドゴッ！！バゴッ！！

「うぐっ……」

圭一と同じように腹を殴った。さらに腹蹴りを食らわした。

「が……ぶえっ！！」

圭一は腹の圧迫により吐いた。

「……この程度か……こりゃ、10年かかるかもな。」

「く……くっそ……この野郎。」

圭一は憎しみの目で勇人を睨んだ。

「あらら……俺とおんなじことしてるよ。」

「な……に……」

「もう終わりだ。ダメだからって、せいぜい雛見沢症候群にはなるなよ。」

「……勇人……教えてくれ……」

「何度も言うけど、ダメ。俺だってこれ乗り越えて強くなったんだから。神の才能だけで強くなったわけじゃねえよ。」

「なんでだよ！？。せめて理由だけでも。」

「それもダメ……だんだん落ち着いてきたな。」

「え……ああ……」

圭一はいつの間にか落ち着きを取り戻していた。すると圭一は  
「……なるほどわかつたぜ。お前の修行が何のためか。」

「へー、言ってみるよ。」

「へへへ、それは・・・落ち着くことだ。」

圭一は自信満々に答えた。

「いかなる時でも落ち着き、クールになることだ。」

「残念、その解答は30点。」

「なに!？」

「自信満々だったのに残念だな。まあ、そう簡単に見つかるような意味じゃないよ。」

「どうすれば見つかるのか?。」

「こりねーなー。言わないって言っただろ。」

「うーん・・・一体、何なんだよ。」

圭一は腕を組んで考えた。

「まあ、落ち着きに気づいたくらいならヒントぐらいあげてやるよ。」

「まじかよ。」

「でも、あんまり役に立たないけど。」

「えー、なんでだよ?。」

「何回も愚問すんな・・・ヒントは、これからすぐに気づくよ。」

「え・・・それだけ?。」

「それだけ。」

圭一はポカーンと口をあけた。

「ははは、何、口あけてんだよ。まあ、当然か。」

「なあ勇人、それはヒントと言わないんじゃないか?。」

「これでも、ものすげーヒントのつもりだけど。」

すると家の方から声が聞こえた。

「おーい、勇ちゃんと圭ちゃん。いつまで運動してるの?。」

「もう終わったところだよ。行くぞ圭一。」

「あ・・・ああ。それより、なんか腹が減ってきた。」

「なに圭ちゃん、運動しすぎて吐いたの?。」

魅音は冗談交じりで言ったが勇人は少し反省気味になった。

「そういえば、まだご飯があったな。おにぎりにして食うか。」

「そうしろ。あんまり食いすぎるなよ。」

「じゃあ、後でね圭ちゃん。」

圭一は台所の方へ言った。

「さーて、俺も寝るかな。どこの部屋で寝れb」寝られると思ってるの勇ちゃん?。「少しだけ思ってた。」

「部活はいかなる時でも始まってるとだよ。さあ、男子全員が望む女子の寢床へご招待だよ。」

「何企んでんだ、おい。」

「なーにも。ただ部活がそこであるから来てもらうだけだよ。」

「……」

勇人は黙っていたが、嘘だということを簡単に見破れていた。

「圭一はどうするんだよ?。」

「ちゃんと後で来るように仕組んであるから先に行って待って。」

「あー、俺もなんか腹減ったから圭一とおにぎり食ってく」ガシッ「逃げられると思ってるの。」離せー!。」

勇人は魅音にずると引きずられていった。

台所

「あー、腹いっぱいだ。」

圭一は満足いくまでおにぎりを食った。

「さーて、寝るか……って、どこで寝ればいいのかわからねえな。」

圭一はとりあえず魅音たちがいるところを探し始めた。すると前から葛西が来た。

「あ、葛西さん。」

「こんばんわ、前原さん。」

「あのー、魅音がどこにいるかわかりますか?。」

「この先の廊下を右に曲がればすぐわかりますよ。」

「ありがとうございます。」

「では、わたしはこれで。」

葛西はそのままどこかへ行った。そして

「わたしの役割は終えましたよ、詩音さん。」

葛西はそう呟いた。

わいわいがやがや

「おっ、あつこの部屋から皆の声が聞こえるな。」

圭一は明かりがもれている部屋に近づいた。さすがに、女子の部屋に入っているのは気まずいから入りはしないだろう。

と、思ったが

「男が変態が何が悪い。」

一体誰に言っていることやら。すると圭一は躊躇することなく

ガラッ！！

「やあ、皆の衆。何してるのか……」

そこには勇人が縄でぐるぐる巻きにされていた。

「勇……人……」

ピシヤッ

沙都子が逃げ場をなくした。

「をーっほっほっほ、まんまと罠にかかりましたわね、圭一さん。」

「さあ、部活の幕開けだよ。」

魅音は高らかに宣言した。

部活メンバー + 詩音の部活が幕をあける。



## 伝わらない思い

「おい魅音、この縄をほどけ。」

そう言っつて魅音に睨みつけながら勇人は言った。

しかし、勇人の視界からひよっこり現れた梨花が魅音の代わりに答えた。

「ダメなのです。ほどいてしまうとせつかく捕まえた猫さんが逃げてしまうのです。にゃー。」

梨花は猫の手のまねをした。

自分を猫扱いされて少し怒ったが、逃げられないことは変わらないので無駄だと諦めた。

「く……わかつたよ。もう逃げないからほどいてくれ。」

「名前の通り約束できるかい、勇ちゃん。」

「人の名前を何だと思ってるのだから……約束してやる。」

「よろしい。」

魅音は勇人の縄をほどいてやった。

「ふー、なんか伸ばさねえと落ち着かんな。」

そう言っつて、勇人は伸びをした。

すると圭一が

「んで魅音、部活って何をするんだよ。」

「よくぞ聞いてくれた圭ちゃん。この人数で夜やることと言えば一つしかない。」

すると魅音は近くの枕を圭一に投げた。

それを圭一は軽くかわした。

「おっと、そういうことか。」

それによつて圭一は理解した。

「ルールを言うよ。チームは男子VS女子。当たったものは即退場。リーダーを決めて先にリーダーを倒したチームの勝ち。」

『ちよつと待てー!!。』

勇人と圭一は声をそろえて言った。

「男子VS女子って、あきらかに人数おかしいだろ。」

「圭一の言うとおりでぞ。不釣り合いすぎるだろ。」

「安心しなさいって。ちゃんとハンデは考えてあるから。」

すると魅音は近くに落ちてあつた枕を全て勇人たちの方へ投げた。

「最初、枕を全て男子側にしてからのスタートだから。」

渡された枕は十個。それに場所は十五畳の広さと八人にしては少しせまめ。まとめて投げれば高確率でリーダーに当たるだろう。

「これなら文句ないでしょ、圭ちゃん。」

「まあ、これならいいだろう。」

「それじゃ、そっちのリーダーを決めて。」

「んじゃ、リーダーは俺になる。」

「オーケー。こっちは、部長であるわたしがリーダーだよ。」

男子側のリーダー・勇人 女子側のリーダー・魅音

勝負開始。

「よし、すぐに終わらせてやる。」

圭一は枕を取り、構えた。

しかし、勇人が肩を掴みながら圭一を止めた。

「まて圭一、明らかに罠だろ。」

「え!?!」

「よく思い出せ。魅音は何て言った。」

「それは、俺らが枕を全て持って」「違う、こっち側にあると言っ  
たんだ。」ということは。」

「こういうことだ。」

勇人は枕を一つ取り天井へ投げた。すると

ガラッ

天井が開き、中から枕が雪崩のように落ちてきた。圭一と勇人は安  
全地帯でそれを見ていた。

「残念だったな沙都子。魅音が教えてくれたおかげでな。」  
「きー、悔しいですわ。」  
「沙都子、かわいそかわいそなのです。」  
梨花は沙都子の頭を撫でてやった。  
「やるね、勇ちゃん。でもこっちにはまだ秘策があるんだよね。」  
「上等、打ち破ってやるぜ。」  
ちなみに秘策とは……

時は戻って、勇人たちの修行中、魅音たちはお風呂に入っていた。  
「はうー、魅ちゃんの家のお風呂は広いね。」  
それは六人ではもつたいたないくらいの大浴場だった。  
すると魅音はレナのことなど無視して沙都子と羽入に釘付けだった。  
もちろん、理由は一つ。

「沙都子と羽入ちゃんはいいい成長してるね。」  
「み……魅音さん、どこを一点集中しながら言っていますの?。」  
「気にしない気にしない。それより、おじさんが成長を手伝ってもいいよ。」

魅音は手をわきわきしながら近づいた。

「あうあう、魅音が完全におじさんの目になっっているのです。」  
「えーん、レナさん、魅音さんがいじめますわ。」  
「はうー、沙都子ちゃんはレナが守ってあげるからね。」  
「あつ……ちよ、沙都子、それはいくらなんでも……」

スパパパーン!!

レナの高速連続パンチが魅音に炸裂した。

「レナ……いつもに増して……見えなかったよ。ガクッ。」  
魅音は撃沈した。

そんな中、梨花は自分の胸に手を当てながら皆を見ていた。

「どうしました梨花ちゃん、なんか不満そうな顔をして?。」  
「拷問狂は黙っているなのです。」  
「なんですって!!。」  
「こちらもなんか騒ぎが發展してきた。」  
「そうですか。そんなに気になりますか。」  
「!!……別に胸なんか気にしてないのです。」  
「あら、私はただ気になりますかって言っただけですけど。」  
「……調子に乗るな拷問狂。」  
梨花はなぜか近くにあったモップを手に取った。  
「遊んであげるわ。おいで、拷問狂。」  
梨花は人差し指をクイクイツと威嚇した。  
「上等じゃん。ぶちまけられてーか!!。」  
詩音はなぜか持っていたスタンガンを構えた。

## 戦闘中略

落ち着きを取り戻した皆は仲良く(詩音と梨花はまだ喧嘩中)湯につかっていた。  
すると、魅音は羽入に聞いてきた。  
「ねえ羽入ちゃん。神ってことはさあ、なんか不思議なことができたりするの?。」  
「できるのですよ。姿を消したり空を飛んだりできるのです。」  
「他には何かあるのかな、かな?。」  
「ビームやバリアーなども出せるのです。」  
「つまり歩く凶器なのです。」  
「梨花!!、例えが悪いのです!!。」  
「バリアーか……そうだ。」  
「どうしましたの、魅音さん?。」

「部活でまくら投げしようよ。勇ちゃんを倒す方法を思いついたから。」  
「バリアーを使って勝つつもりですね、お姉。」  
「なっ・・・なんでわかるのよ!?!?。」  
「誰でもわかりますわよ。」  
「でもそれは卑怯すぎないかな、かな?。」  
「勇ちゃんの初メイド姿見たくないの?。」  
「・・・はう、勇人君のメイド姿、お持ち帰りい〜。」  
「決定だね。んじゃ、よろしく羽入ちゃん。」  
「わかったのです。」

戻って、今

「勇ちゃん、どっからでも投げてきなよ。」  
「大した自信だな。じゃあ、遠慮なくいかせてもらっせ。」  
「勇人は枕を一つ取り、魅音に狙いさざめた。」  
「くらえ!!。」  
一寸の狂いもなく魅音に飛んでゆく。  
しかし、魅音は一步も動かずにいた。  
「今だよ、羽入ちゃん。」  
「はいなのです。」

ポフッ!!

『あれ!?!?』  
全員が同じセリフを言った。  
魅音の顔面には枕がひつついていた。  
「魅音がこんな簡単にやられるのか。いや、もしかしてこれが秘策か!?!?。」

「気をつける勇人、何か企んでるかもしれない。」

男子側はこの状況を飲み込めず、無駄な警戒をしていた。

一方、女子側は

「羽入ちゃん！。どうしてやってくれなかったのよ!?!。」

「あうあう、僕はちゃんとやったのです。」

「あんたのせいで、私たちの負けじゃない。」

梨花がキレていた。

いや、梨花だけではない。

「だから、僕はちゃんとやったのです。」

「羽入さん、いくらなんでもこんな重大なところでのミスは許されませんわ。」

「これは、はじめをしなくてはなりませんわね。」

「あうあう・・・うう・・・僕はちゃんとやったのです。」

圧倒されてしまい、羽入は泣きだした。

「み・・・皆、落ちてこうよ。羽入ちゃんが泣いてるよ。」

「おいおい、何があったんだよ。」

勇人と圭一が近づいてきた。

「羽入が泣いてるじゃねえか。何してんだよお前ら!!。」

勇人が羽入の涙に気づいた。

その瞬間、勇人は無性に腹が立ち、気を抑えられなくなっていた。

「勇ちゃん!!・・・その、これは・・・。」

「納得いく説明じゃなかったら殴るぞ。」

勇人はほぼ化身状態になりかけていた。

「勇人・・・ひっく・・・使えないのです。」

「何がだ?。」

「神の力が使えないのです・・・。」

『ええ!?!』

全員が驚いていた。

「おかしいのです・・・ひっく・・・いくら飛ばうとしても消えようとしてもできないのです。」

「・・・あつ！！まさかあいつが。」  
「何、圭ちゃん。何か知ってるの。」  
「多分な。あの六一が目的があるって言ってたんだ。」  
「まさか、その目的が羽入の力を消すことなのかよ。」  
「ああ。多分な。」  
「でも、羽入ちゃんは神だよ。羽入ちゃんが神なんて皆知らないと思うし、それに羽入ちゃんの力が何か分からないのに封じることなんてできるのかな、かな。」  
「そう言われると、やっぱり違うのか。」  
「多分あつてると思うのです。・・・六一は僕が神だつてことを知っていたのです。」  
「！！！！つ・・・まじかよ！？。どうしてあいつは気づいたんだよ！？。」  
「あう・・・わからないのです・・・」  
「こりゃ、部活どころじゃなくなってきたね。」  
「魅音はそういうと圭一が反応した。」  
「おい魅音、それは関係ないじゃねえか。」  
「えー、いいじゃん別に。」  
「よくない。とにかく罰ゲームは受けてもらうからな。」  
「そういうと圭一はどこからかメイドやらスク水やら取り出した。」  
「レナはメイド、魅音は体操服とブルマ、沙都子と梨花ちゃんはエソジェルモートの制服、羽入と詩音はスク水だ。」  
「圭一は皆にそれぞれの服を渡した。」  
「俺ちよつとトイレ行く。」  
「なんだよ、この最高の瞬間を見逃すつもりか。」  
「勇人は何も言わずに出ていった。」

俺は適当に庭を散歩しながら考えていた。

「羽入の力が使えなくなつた。そもそも、あいつは羽入の力にどうやって気づいたんだ。」

皆、六一がやるには不可能だと言っているけど俺はそんな気がしない。

なぜだが、あいつを初めて見たとき、あのときの平十と同じ感じがした。

「……六一には気をつけないと。化身状態でろくに覚えてないけど……」

そういえば、寝るところこだっけ。

まあ、いいや。夏だから外で寝てもそう簡単に風邪ひかないだろう。

「おーい、ゆーいとーい！」

あれ、羽入がやってきた。

ちなみに、スク水の姿ではない。

「おいおい、罰ゲームはどうしたんだ？」

「皆で圭一をフルボッコにして、やめさせたのです。」

「……圭一、かわいそうだな。」

「そんなもって……」

ガッ!!

「うぐ……」

突然、誰かに後頭部を殴られた。

当たり所が良かったのか、一瞬で視界がくらみ始めた。

「ふふふ、勇人も僕たちと……」

最後に聞いた羽入の声がそれだった。

「……んん……」

目覚めたら俺は暗闇の布団の中にいた。



「あれ……どこからが夢だっけ……いつて……」  
考えてみると急に後頭部に痛みを感じた。

「と、いうことはあれは夢じゃねえのか。」

「そうなのです。全部本当のことなのです。」

「……なぜか左から羽入の声が聞こえたような……」

「勇人、起きたのですか。」

今度は右から梨花の声が……

「……ええ!!なんで二人g「しーっなのです。皆寝てるのです。」え……」

目が慣れてきて周りが見えてきた。

するとそこには……

「皆……いる……レナも魅音も……圭一まで。」

皆眠っていた。圭一の顔が少し腫れていた。

「じゃあ、俺の後ろを殴ったのは?。」

「僕がモップで殴ったのです。こうでもしないと勇人は僕たちと寝てくれないのです。」

「そんな理由で殴るな。大体、普通に考えて女子と寝るとかまずいだろ。」

「そんなの僕たちにはどうでもいいのです。みー。」

「うわっ。」

突然、梨花が面白半分で手を握ってきた。

「……僕もなのです。」

羽入はさみしくなったのか空いてる手を握ってきた。

「おい、羽入も何やってんだよ。」

「……勇人聞いてほしいのです。」

急に羽入がまじめになった。

「僕は……こわいのです。」

「羽入……」

「急に力が使えなくなった今、僕はどうすればいいのですか?。」

「……わかんねえよそんなこと。大体、お前はなんで六一の攻

撃を受けたんだ?。」

「え!?!。」

「だってよ、消えたりできるんなら簡単に回避できたじゃねえのか?。」

「それは・・・突然のことで忘れてたのです。」

「じゃあ、忘れるほどの力がなくなっただくらいでなんで泣くんのだ。」

「あう・・・。」

「勇人、羽入を責めないで。」

俺は梨花の声を無視してでも言っただけだ。

「お前、甘い考えしてるとこの先、生きていけねえぞ。少しは最善のことw「勇人のバカなのです!。」なっ・・・。」

羽入は急に怒り出し、夜のことを忘れて大声を出した。

「んん、なにになに、敵でも来たの?。」

それによつて魅音が起きた。

いや、魅音だけではなく皆起きたようだ。

「ん・・・どうしたのかな、かな?。」

「何の騒ぎだ?。」

今起きた全員、状況を飲み込めなかった。

「勇人は僕の味方でいてくれると思っていましたのに・・・。」

羽入は急に泣きだした。

しかし、そんなのどうだっていい。

「味方だから言っただろうが。このわからずや。」

「!?!つ・・・うう・・・うあーん!?!。」

たまらず、羽入は出て行った。

「・・・勇人。」

「なんだよ梨花。まさか俺が悪いなんて言うんじゃねえだろうな。」

「ちがうのです。勇人は悪くないですけど悪いのです。」

「意味がわかんねえよ。俺はもう寝る。」

俺はなんかぎくしゃくしたから布団をかぶりそのまま眠ろうとした。皆の視線が妙に痛かった。

「俺は悪いことをしてない・・・ただ、羽入のためを思ったただけだ・・・なのに・・・」  
俺はそのまま眠りに落ちた。

## 洗脳型難見沢症候群

さんと晴れた太陽が難見沢を照らす朝、皆は出発の準備をしていた。

勇人は冗談交じりで魅音に聞いた。

「そういえば、魅音は補講があつたよな。行かなくていいの？」

「いいのいいの。今はそんなことはどうだっていいのよ。」

「受験生が言うセリフじゃないな。」

「ほらほら、そんなこと気にしたら負けだよ。」

「お前、まじで受験やばいぞ。」

魅音は完全に勉強のことをすっぱかしていた。

すると圭一がまじめな話題を変えた。

「なあ、やっぱり監督は症候群になっている可能性もあるんだろ？」

「そうだろうな。だけど、医者なら何か対策している可能性もある。」

「とにかく、行ってみないと分からないのです。」

「そうだな。どうやって診療所まで行くんだ？。まさか歩いて行くなんて言わないだろうな。」

「大丈夫ですよ圭ちゃん。葛西が送ってくれるって言ってました。」

「また、あの車に乗るのか。」

「なら、勇ちゃんは走ってきたらどうですか？。」

「悪かったです。乗せてください。けど・・・。」

勇人は詩音にあることを頼んだ。

「それなら構いませんけど。」

そうして、全員は車に乗り込んだ。

移動中

「ふー、風が気持ちいぜ。」  
「勇ちゃん、そのまま落っこちても拾いませんからね。」  
「なんと、勇人は車の上にあった。」  
「あんな狭いとこよりこっちの方が百倍ました。」  
「そんな愚痴をこぼしながら車内を覗く。」  
「車内後部座席は・・・」  
「魅ちゃん、レナの髪を引っ張らないでよ。」  
「ゴメン、レナ。」  
「みみみみみ。圭一、僕の足がペチャンコになるのです。」  
「そう言われても、どうする事も出来ねえ。」  
「は・・・羽入さん、絶対に動かないでください。動いたら角が刺さってしまいますわ。」  
「わ・・・わかつたのです。」  
「相変わらずの風景だった。」  
「大変ですね、お姉。」  
「なんで、あなたが前に座るのよ。」  
「そりゃー、葛西は私のボディガードですから。」  
「そんな理由で納得できるか！！。」  
「他愛のない声を聞きながら勇人は村を見ていた。」  
「・・・おかしい。なんで人がいないんだ?。」  
「勇人が見渡す限り、人のいない田舎風景があるだけであつた。」  
「しかし、それは怪しすぎるぐらい静かすぎた。」  
「いくら田舎でも誰一人見つからないのは怪しいな。」  
「大丈夫ですか、契さん。」  
「ああ、大丈夫です。それより、葛西さんも気づきましたか?。」  
「はい。やはり不自然かと。」  
「何の話をしてるんですか?。」  
「別に。ただ、皆いつも通りだなんて思っただけ。」  
「当然です。皆さんは一回は修羅を乗り越えたのですから。」  
「そのおかげで誰かさんの惨劇人生が終わったんだよな。」

「一体それは誰ですか?。」

「すぐそこにいるよ。」

勇人は誰かは言わなかった。

詩音は納得しなかったが、葛西が口を割いた。

「もうすぐ着きます。降りる準備はよろしいですか?。」

「準備も何も、これでは何もできませんよ葛西。」

「ははは、そうのようですね。」

「葛西、笑うな。」

魅音は声の勢い余って持っていたものを引っ張った。

「痛い痛い、魅ちゃん。痛いってば。」

「ご・ごめん、レナ。」

「外にして正解だったな。」

勇人は小さく呟いた。

ついに診療所の前まで着いた。

「ぶはー、やっと息苦しいところから解放されたな。」

「ははは、外は気持ち良かったぞ。」

「よく落ちなかつたな、勇人。」

「まあな。それより、そろそろ気を引き締めるよ。何が起こるか分からないからな。」

その言葉を合図のように皆の目が少し変わった。

「私はここで見張っております。」

「よろしくね、葛西。」

そうして、葛西を残し、皆は診療所に入った。

「監督ー!!!。いますかー!!!。」

魅音が呼んでみたが、返事はなかった。

「入江ー。羽入と沙都子がメイド服できたのですよー。」

「り・梨花。それはちょっとまずいんじゃないませんか。」

梨花が最終手段を使ったが、それでも返事がなかった。

「おかしいな。これで反応しないとなると、まさか・・・」

ガチャー！！

後ろから扉が開く音がした。

「！？」

全員後ろを振り返った。そこには

「どこですか！！メイド姿の沙都子ちゃんと羽入ちゃんは！？」  
目を輝かせながら入江が入ってきた。

「きたきた。監督、ちよつと話があるんですけど。」

「それより、沙都子ちゃんと羽入ちゃんを！！。」

「入江、質問に答えるなのです。」

梨花が少し圧倒気味に言った。

「な・・・何でしょうか梨花ちゃん。」

「雛見沢症候群の研究はどうですか？」

「え・・・ああ、沙都子ちゃんのことですか？」

「違うのです。今、雛見沢が大変なことになっているのですよ。」

「ああ、そっちですか。つい、沙都子ちゃんのことを思っていましたので。」

「で、どうなのですか？」

「あと少しで解明しますけど。」

「おい待て。」

勇人が梨花と入江の話に割り込んだ。

「お前、症候群にかかってないか？」

「何を言っているのですか契さん。私は平常心を保ってます。それなのにどうして？」

「じゃあ、単刀直入に言う。」

勇人は一息おいてから言った。

「ためー、症候群にかかってんだろ。」

「え！？」

全員は目を丸くして驚いた驚いていた。

「な・・なぜですか?。」

「背中に隠してある銃は葛西から奪ったやつだな。」

「!!。」

『ええ!?。』

また驚いた。

「な・・なぜ気づいた!?。」

突然、入江の雰囲気が変わった。

あの狂気に包まれた謎の雛見沢症候群の雰囲気に。

「そりゃ、肩が少し変だからな。背中の何かを落とさないようにしてるからな。」

「くっ・・。」

「んで、背中に隠すほどの大きさと言えば葛西さんの銃かなって思ってたわけだ。」

「やるねー、君は何でも見破る能力でもあるのかい。」

『!?。』

突然、聞き覚えのある声が耳に入る。

皆は反射的に声が出た方に振り向いた。

「やあ、昨日はよく眠れたかい。」

「六一!!。」

そこには六一が悠々と立っていた。

「今日は殺しに来たよ。皆仲良く死ぬるなんていいと思わないかい?。」

「誰が思うか!!。」

「そっかい。素直に喜ばないもの。」

すると後ろから銃を持った造園業みたいな人達が入ってきた。

「あれは・・・山狗!?。」

「山狗って何、梨花?。」

「どうして!?。なんで山狗がいるのよ!?。番犬に捕まったんじや。」



「ああ、東京なら今、僕が持つてるからね。」

「ええ!?!。」

「あのー、俺、無視すか。まさか、また羽入が大事なところ喋っていないパターンか?。」

「勇人を無視して話は進む。」

「簡単だったよ。番犬とかいう奴の首を五・六個持っていったらすぐに旗あげたよ。」

「え……嘘……。」

「さあ、あいつらを捕えろ。銃は撃つな。まずは、追われる恐怖をあじわらせる。」

「六一は山狗に命令した瞬間、勇人たちに迫ってきた。」

「逃げろ、皆。」

「ちよつと、詩音がないよ。」

「はあ、なんでだよ?。」

「とにかく、お前ら先に逃げとけ。俺が探すから。」

「わ……わかった。詩音は勇ちゃんにまかせたよ。」

「そう言っつて、皆は窓から外へ逃げ、勇人は診療所の奥へ行った。」

「山狗は二手に分かれ、それぞれを追った。」

「さあ、鬼ごっここの始まりだ。」

契view

「しお……ん、どこだ……。」

「手当たり次第に叫んでみるが返事がない。」

「ちくしょう。後ろから鬱陶しいのがあるってときに。」

「見つけたぞ。」

「噂をすればなんとやら、もう来てたみたいだ。」

「……先にやっとかか。」

「俺はあの造園業者みたいになやつらに突っ込んだ。」

数は三人とは、舐められたものだな。

「相手は子供だ。さっさと取り押さえるぞ。」

「おらよー!!。」

のんびり他の奴に命令している奴の腹めがけて拳を振るつ。

ドゴツ!!

「がは・・・」

一人目、一撃ノックアウト。

これで大人かよ・・・

「このガキ!!!、調子に・・・」

「乗るよつと!!!。」

ザシユ!!

そのまま、隠し持っていたスケボーで斬った。

二人目撃沈。

「これで二人・・・うぐ!?!。」

急に首を絞められた。

やっべ、もう一人忘れてた。

「そのまま落としてやる。」

「ぐ・・・のやる・・・」

あがくが力が強すぎる。

さっきは馬鹿にしたが、さすが大人と言ったところか。

「く・・・くそ・・・」

やっべ・・・意識が・・・

ビリリ!!

『うげっ!!...!!』

急にしびれが・・・まだ仲間が・・・

「はるろくん、何やってるのですか?。」

首を動かすと、スタンガンを持った詩音が立っていた。

「・・・おい、俺ごとしびれさせることないだろ。」

「あらら、ごめんなさい。でも、そのおかげで助かったんじゃないやありません?。」

「うぐ・・・まあ、確かに。てか、お前どこに行ってたんだよ?。」

「ちよつと、様子を見るに。」

「誰の様子だよ?。」

「それは・・・」

突然、口を閉じる詩音。

これは、追求してたら時間がかかるな。

「やっぱいいや。とにかく今は逃げるぞ。」

「へっ!?。」

俺は詩音の手を引いて走り出した。

「ちよつ、早いつて勇ちゃん。」

「仕方ないだろ。なんならお姫様だっこしてやろうか?。」

「結構です。」

そんなきつぱり断らなくても・・・

「お楽しみ中悪いね。」

「ん!?!?・・・うわつと。」

六一の声が聞こえたと思ったら、急に何本もの刀が飛んできた。それを軽くかわす。

「あぶね。おい詩音、お前は先にその窓から逃げとけ。」

「・・・でも勇ちゃんが・・・」

「すぐに追いつくよ。だから行け。」

「・・・わかりました。」

詩音は窓から外へ逃げた。

「・・・さーて、ここから先は行かせないぜ。」

「行く気はないよ。てか、行く必要がないからね。」

「何!?!」

ザー・ザザ・

あいつの無線のから声が聞こえた。

「こちら雲雀13。目的の一人を捕獲した。どこに連行すればいい。」

「な・・ウソだろ。」

「あー、御苦労さま。適当に待機しといて。後でそっち行くから。」

「了解した。場所はポイント13の14です。」

「はいはい。んじゃ、逃がさないように。」

ガシッ!!

俺は速攻で六一の首を締めあげた。

「おい、そのポイントはどこか教えろ。」

「おややや、なに焦ってんだい。」

「首がつぶれる前に言え。」

どんだん力をあげて首を潰していくが何一つ表情を変えない。

「死を選ぶか。」

「うん、君の死をね。」

バンッ!!

「なっ・・・」

ドサッ

「ふー、やっと息ができるよ。」

「く・・・うぐ・・・」

ちくしょう、誰かに足を撃たれてしまった。

まだ人がいるとは・・・油断しすぎた。

「僕はすぐに殺すなんてことはしない。よっぽど面倒じゃないとね。」

「てっめー。」

「さーで、どうなぶり殺そうかな?。」

俺は六一を睨んだ。

ただそれしかできなかつたからだ。

「死ぬ前に撃つた人でも教えてやるよ。」

「またお会いしましたね、契さん。」

「う・・・嘘だろ・・・」

そこには葛西さんがいた。

「なんで・・・いつからだよ・・・」

「いやいや、なんで君たちは感染しないのかな?。刺されにくい性質だからかな。」

刺されにくい?、どういう意味だよ。

「な・・・何言ってるんだよ・・・おい!!!」

すると六一は俺を無視して葛西にあるものを渡した。

「はいこれ。やっぱあなたはこれだろ。」

「実にわかってらっしゃる。」

六一は葛西に散弾銃を渡した。

「な・・・なんで葛西さんが・・・」

「僕の薬はただ狂いすぎた症候群だけじゃない。」

「じゃ・・・じゃあ・・・なんだよ・・・」

「・・・洗脳型難見沢症候群だ。」

「せ・・・洗脳だと・・・」

「そう。失敗作もあるけど、大体は成功してるよ。」

「鷹野さん、早く撃たせてください。」

「鷹野さん、早く撃たせてください。」

「ははは、あなたはせつかちですね。それじゃ、どうぞ。」  
それを聞くと葛西は俺の頭に散弾銃を突きつけた。  
「残念だったね。今はよっぽど面倒のようだ。」  
「それでは、短い間でしたけれど・・・」  
「バイバイ。」

パンツ!!

## たび重なる最悪

圭一 view

勇人と別れた後、俺たちは近くの山へ逃げ込んでいた。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

ずっと走りっぱなしで山道じゃさすがに足がこたえるぜ。

「どうしたの圭ちゃん？。まさかもうばてたとか言わないよね？。」

「あ・・・あたりまえだろ。お前こそ、結構、息上がってんぞ。」

「話しながら走るともつと疲れちゃうよ、圭一君。」

「そ・・・そうだな。」

しかし、細道を通っているにも関わらず追手もしつこいもんだ。

すると沙都子が

「勇人さんは大丈夫でしょうか？。」

「心配ないのです、沙都子。勇人は僕たちを助けてくれたことだつてあるのですよ。だから心配ないのです。」

「そ・・・そうですね。梨花のおっしゃるとおりですわ。」

さすが梨花ちゃん。うまくおさめたな。

無事に何もなく逃げていたが、突然空気が変わった。

「きゃあ!?!。」

「!?!・・・沙都子!?!。」

沙都子が足を滑らせ、下へと転がり落ちた。

それに続くかのように次々と災難が起こる。

「ああああ、前から山狗が来ているのです。」

「何!?!。先回りされたのか!?!。」

「圭一君、沙都子ちゃんが気絶してるよ。」

「まじかよ!?!。」

くっそー。こういうときはどうすればいいんだ。

いや、落ち着け前原圭一。こういうときこそクールになるんだ。

「・・・俺がおとりになる。」  
結局、俺が出した結論はクールじゃなかった。  
だが皆を守るなら、俺は覚悟を決めている。  
「ええ！？。圭ちゃん、いくらなんでもそれは・・・」  
「これしか方法がない。隙を突いて皆は沙都子を助けて逃げてくれ。」  
「で・・・でも、それじゃ圭ちゃん、これ以上言っても無駄だよ。」レナ・・・  
「圭一君、これだけは約束して。必ず、無事に合流するって。」  
「ああ、約束だ。」  
そう言っただけは魅音の家から持ってきた金属バットを構えた。  
「皆、また会おうな。」  
俺は山狗どもに突っ込んだ。  
ここから先は、この前原圭一が相手だぜ！！。

### 梨花 view

圭一がおとりになっている間、沙都子を助けるために、坂を下った。  
しかし、またしても最悪なことが起こった。  
「へへへ、ついでにさ。」  
「！！っ・・・あれは山狗！？。」  
どうやら、山狗全員が追いかけて来たわけではなかった。  
山狗が沙都子を連れて逃げようとしていた。  
まだ私たちは坂を下り終えてない。  
「沙都子を連れて行かせないよ。」  
すると魅いが坂を下りながら両手に銃を取り出した。

バンッ！！バンッ！！



「うおつと、あぶねえ。」

「魅い!!!、沙都子に当たったらどうするのですか!?!。」

「だけど、それじゃあ沙都子が・・・」

「早く逃げねえと。」

「逃がしちゃしないよ・・・ととと・・・」

魅いがバランスを崩してしまった。

その際に、山狗の一人は沙都子を連れて行ってしまった。

「そんな、沙都子ちゃんが・・・」

「追うよレナ。沙都子を見殺しになんてできないからね。」

そう言つて、魅いは追いかけ始めた。

「ま・・・待つてよ魅ちゃん。」

それに続いてレナも追いかけた。

「羽入!!! 私たちもいっくおつと、行かせねえぞ。」うぐ・・・」

しまった。

口をでふさがれてしまった。

まだ余りがいたなんて。

「梨花!!!・・・あう!!!・・・」

羽入までふさがれた。

「よいこは、おねんねだ。」

チクッ

「!!!っ。」

突然襲う腕の痛み。

なにかの注射をされてしまった。

その薬はすぐにわかった。

「く・・・麻酔・・・か・・・」

視界と感覚ががどンドン消えていった。

「次はお前・・・」

最後に見た光景は私同様に羽入が注射されるところだった。

レナ view

「魅ちゃん待つて!!。梨花ちゃんと羽入ちゃんが来てないよ。」

「ええ!?!。おいてっちゃった!?!。」

魅ちゃんがやつと落ち着きを取り戻し、止まってくれた。

けど、それはほんの少しだけだった。

「戻ろうよ。梨花ちゃんたちが心配だし、私たちだけで沙都子ちゃんを助けるのは難しいよ。」

「じゃあ、沙都子を見殺しにしろっていうの!!。」

魅ちゃんが怒りだしてしまった。

「そ・・・そうじゃないよ。」

「じゃあ、なんなのさ!?!。言ってみなさいよ!!。」

「それは・・・。」

「何も言えないんだったら一人で戻ったらいいじゃない!!。私は

沙都子を見捨てることなんてできないから!!。」

そう言つて、魅ちゃんはまた駆けだした。

私はただそれを見ることしかできなかった。

「・・・どうすればいいの・・・。」

どうして、皆ばらばらになっていくの。どっちが正しいの。私は涙を流しながら膝を着いた。

その瞬間・・・

バシユン!!

「きゃっ!?!。」

死角から網が飛んできた。それに私は捕えられた。

「こ・・・こんな網なんて、鉦で・・・。」

鉈を振ろうとしたが

ガッ!!

「うっ……」

「そうはさせねえ。」

鉈を持っている手首を思いっきり踏み潰された。骨が折れちゃったかもしれない。

すると、山狗の人が無線を取り出した。

「こちら雲雀13。目的の一人を捕獲した。どこに連行すればいい。」

「どうやら、私を連行するつもりのようなだ。」

「……さま……待機し……そっち……から。」

ピーピーガーガーと雑音でよく聞こえない。

だけど、声色で話している相手はあの六一君だとわかった。

「了解した。場所はポイント13の14です。」

「は……いい……逃がさ……うに。」

すると、無線を直してこつちを向いた。

「来るまで暇だし、ちよつといたぶつてやるよ。」

「え……」

ドゴッ!!

「あう……」

急にお腹を蹴られた。

あまりに突然だったからかなり食い込んだ。

「いい声出すね〜。次はどこ蹴ろうかな〜。」

急に雰囲気が変わった。

その狂気に満ちた目に、私の体が震えだした。

「……た……助けて……」

ただ、助けを求めることしかできなかった。

魅音 view

「待て ！！。沙都子を返せー！！。」

追いかけるも中々追いつかない。

すると、

「はあ・・・はあ・・・うわっ!?!。」

しめた。

相手がこけた。沙都子を投げ出している。

「遂に追いついたよ。覚悟しな。」

私は銃を敵の額に当てた。

「ひー！！、命だけは！！。」

「なーに言ってるのさ。散々迷惑かけておい・・・」

バシユン！！

「おっと、そう簡単には捕まらないよ。」

誰かが死角から網を飛ばしてきたが、よけた。

それでも、沙都子をさらった奴の頭に銃口を向けている。

「そこにいるの、出ておいで。あんたも一緒に撃ち抜いてあげるよ。」

「

空いている方の銃を向けながら、網が飛んできた方に声をかけたが反応がなかった。

「出てこないってんなら、撃っちゃうよ。」

それでも反応がない。どうやら撃たたいようだね。

「舐められたもんだね。私は撃つって言ったら撃て ガシッ なに

!?!?・・・」

突然、背後から腕を掴まれた。

まだいたのか。

「調子に乗るなよ、ガキ!!。」

「く・・・離しなさいよ!!。」

振りほどこうとするが異様に力が強い。

「うう・・・う・・・」

「!?!?・・・沙都子!!。」

「こ・・・ここは・・・!!?!?魅音さん!!。」

「沙都子!!逃げて!!。」

「え・・・でも・・・」

「早く!!。」

「・・・うう・・・」

沙都子は惜しみながら逃げだしてくれた。

「相手より自分の身を考えた方がいいぜ。おい、お前はあのガキを追え。」

すると、ぞろぞろ増援がやってきた。

「い・・・いつの間に・・・」

「あのガキはあいつに任せて、お前は終わりだな。」

「く・・・」

すると、一人が注射を取り出し、それを私に刺した。

そして、急にめまいに襲われた。

「け・・・圭ちゃん・・・ごめん・・・ね・・・」

沙都子 view

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「待てー!!。」

後ろから梨花が言っていた山狗という人が追いかけてくる。

一体、わたくしが気絶している間に皆さんに何がありましたの。もしかしたら、あの人たちに・・・

「い・・・今はそれより・・・逃げないと・・・ああっ！！・・・」  
泥に足を取られてしまった。

「お前もお終いだな。」

「いや・・・助けて・・・にーにー・・・」

徐々に近づいてくる山狗にわたくしは怯えて動けなかった。

ガッ！！

「うぐっ！？・・・」

「！？。」

急に山狗が気絶した。

そして、わたくしの目の前には

「そんな、汚れた手で沙都子に触ろうとするな。」

「ゆ・・・勇人さん!!。」

「大丈夫か、沙都子?。怪我不いか?。」

「・・・うう・・・勇人さーん・・・。」

ずっところえていたが我慢できなくなつて、泣いてしまった。

「・・・怖かったか?、もう大丈夫だから泣くなよ。」

「・・・違いますわ・・・わたくし・・・わたくし・・・。」

「?・・・なんだ・・・言ってみるよ。」

「わたくし・・・魅音さんを見捨ててしまいましたわ。」

「・・・それは、どういう状況だったんだ?。」

勇人さんは優しく聞いてくる。

「・・・魅音さんが捕まっついていて、怖い人が沢山いる状況でしたわ。」

「・・・じゃあ、悪くないよ。」

「え!?。」

ずっと、怒られると思っていたわたくしの罪を否定してくれた。

「むしろ、正しいんじゃないのか。」

「・・・でも、魅音さん!」じゃあ、魅音はお前に何て言っただ?

「それは・・・。」

「さぞかし、逃げろつてところだろ。なっ?。」

「え・・・ええ・・・そうすわ。」

「なら、お前は悪くない。お前は百点の回答をしてるぜ。」

「そ・・・そんなこと!」うるさい。もう反論するな。俺が悪くない

と言ったら悪くない。悪いという奴は俺がぶっ飛ばす。「ああ・・・」

何か納得いかないところがあるけど、うれしかった。

自分の罪が許されることを知ると涙がまた出てきた。

「・・・うう・・・。」

「泣きたいなら今のうちに泣きまくれ。これから、大変だからな。」

「うう・・・うわーん・・・。」

とにかく泣きつくした。

泣きつくすしかなかったから。

## 救出

「そう言えば、ねーね・・詩音さんはどうされましたの?。」

「ちよつと、とりこんでしまつて先に逃げてもらつたんだが、速攻で捕まつて。そんで、葛西さんに詩音を任せて俺はお前らの方に行つたつてわけ。」

「そうですね。それで、詩音さんは大丈夫ですの?。」

「わからない。葛西が見つつけ次第連絡を・・。」

「ザ・ザ・ザ・」

突然、勇人の腰から無線の音がした。

「おや、きたようだ。」

「いつの間に、無線なんかお持ちしていたのですの?。」

「別れ際に葛西さんからもらったんだ。」

「契さん、応答願います。どうぞ。」

「こちら勇人、詩音は見つけましたか?。どうぞ。」

「詩音さんを確保しました。しかし、山狗には捕まつていなかった様子でした。どうぞ。」

「へ!?!?・・じゃあ、別の人だつてことか・・わかりました。こつちで探してみます。」

「勇人さん、もしかしたら魅音さんかもしれません。」

「ああ、なるほど。そういう可能性もあるな。」

「あの、そちらは誰かと合流しておりますか?。どうぞ。」

「はい、沙都子と合流しておりm「沙都子!!、そこにいるの!!。」「うわっ!?!?・・ビビった。」

「沙都子、聞こえる?すぐにねーねーが助けに行きますからね。」

「ブチッ」



そう言うと詩音は一方的に無線を切った。

「……ねーねーってなんだ?。」

「そ……それより、一体勇人さんは診療所で何がありましたの?。足を怪我されているようですし、血が服にしみてますわよ。」

沙都子は話を無理やり変えようとした。

(聞かれたくないんだな。そっとしておこ。)

勇人は心で理解した。そして、沙都子の話題に乗った。

「あ……まあ、一通り説明しとくよ。」

契view

説明前半部略

「それでは、短い間でしたけれど……」

「バイバイ。」

絶体絶命に追い込まれた。自分の死を覚悟していた。

バンツ!!

「……あれ!?!。」

頭が撃ち抜かれてない。てか、無傷。

「……な……に……」

撃たれていたのは六一の方だった。

「誤算でしたね。あなたの薬の効き目は私には失敗だったようです。」

「く……そ……」

すげー。あの一瞬で横腹一発しか当ててない。しかも急所をちゃんと外している。

「これを散弾銃でやるとは、すごい射撃のセンスだな。」

「・・・とつ、今は感心している場合じゃない。」

俺は六一の首を掴みあげ

「おい、ポイント13の14つてどこだ。」

「さあ・・・知らない・・・」

「すつとぼけるな!!。」

「・・・うるさいな・・・もう寝る。」

次の瞬間、予想のしない、いやできないことが起きた。

グシヤー!!

『!?!?。』

突然、六一は自分の頭を自分の手で貫いた。間近の勇人には返り血がつく。

「な・・・お前・・・」

俺の声はすでに六一には届いていなかった。

「・・・くそ、自害しやがった。まだ、何も聞いてないのに。」

「落ち着きましよう。過ぎたことは仕方ありません。」

「・・・そうですね。それより・・・足いてー!!。」

急に足の痛みが復活した。いや、むしろ思い出したと言った方が正しいだろう。

「すみません。」

「いや、あいつを騙す方法としては百点だからいいですよ。」

「とりあえず、弾を抜きましよう。まだ、入ってますから。」

「お願いします。」

すると、葛西さんは入江の部屋から治療道具を取り出し、足の弾を抜き、さらに応急処置をしてくれた。

「これで、大丈夫です。」

「ふー・・・まだ痛い、弾が入っているよりましです。」

「そうですね。それより、これからどうします?。」

「そうですね・・・葛西さんは詩音さんをお願いします。俺は、他

の皆を探します。」

「わかりました。お気を付けください。それと、これを。」

葛西さんは俺に無線機を渡した。

「さっきの山狗から奪ったものです。もう周波数は合わせてあります。何かあったら連絡を。こちらも何かあれば連絡します。」

「わかりました。それでは。」

そう言つて、俺と葛西さんは別れた。

「んで、現在に至るつてわけだ。」

「そうですよ。なら、早く皆さんを探しに行きましょう。」

「さっきまで、泣いてたのは何だつたんだか。」

そうして、沙都子と勇人は山奥へ進んだ。

少し進んだあたりで沙都子が

「ここら辺で魅音さんが捕まっていたはずでしたけれど・・・」

「みごとに、何も無いな・・・ん？、これは・・・」

勇人が見つけたのは二丁の拳銃だった。しかも、血が付いていた。

「これつて、魅音が持つていった武器だよな？」

「そうですね。じゃあ、魅音さんは・・・」

沙都子は最悪を想像してしまった。

「おい沙都子、まさか魅音が死んだなんて思つてないだろうな。」

「ち・・・違いますわ。そんなこと思いませんわ。」

「だよな。だつて、魅音だもん。あいつが死ぬなら雛見沢が滅ぶだろうよ。」

「勇人さん、それは冗談のつもりですか？」

「・・・さすがに、ビミョーだったか。」

勇人は頭をかきながら苦笑いした。

すると沙都子はあるものに気づいた。

「!?!?・勇人さん、上!?!。」

「え!?!?。」

「もらった。」

勇人の上から番犬の人が飛び降りてきて・・・

ガッ!!!

車で待機中の山狗がいた。

「たつく・・・あの野郎はいつまで待たせるつもりだ。」

すると、近くの草陰が動いた。

「!?!?・・・誰だ!?!?。出て来なければ撃つぞ。」

草陰の揺れが大きくなる。そして・・・

「俺だ、撃つな。金髪のガキを捕まえた。」

番犬の人だった。背負っていたのは眠っている沙都子だった。

「なんだよ、脅かしやがって。さつさと乗れ。」

そう言うと番犬は沙都子を後部座席に乗せ、車に乗った。

すると、山狗の男が話した。

「さつさと、集合地点へ行くか。」

「そうだな。」  
「そうだなじゃねえよ。お前のせいで遅れたんだろうが。」  
「ああ・・・すまん。」  
「けっ。」

山狗は不満そうな顔をしながら車を走らせた。

### 祭具殿前

祭具殿前には沢山の山狗と番犬がいた。  
すると、階段から沙都子を連れた二人組が現れた。  
「よくやった。これで、後二人だな。」

祭具殿の入口前には圭一、魅音、梨花、羽入が眠っていた。  
番犬は沙都子を圭一たちのところに置いた。

その番犬は近くの人に話した。  
「残りの二人はまだなのか。」

「オレンジの髪のカキについては連絡なし。同様にもう一人の緑の髪は連絡もなし。」

「そうか・・・あつ、まだ金髪のカキの持ち物見ていなかった。」  
そう言くと番犬は沙都子の持ち物をあさりだした。  
すると、番犬は黒くて丸い物を手に取った。

「これは・・・爆弾!?。うわっ!!。」  
番犬はより人が集まっているところに爆弾を投げた。

ドガンー!!

山狗、番犬ともに半分消えた。

「おい、何をやってい」「うわ、まただ。」「う・・・うわっ、こっちに投げるな!!。」

「また出た ぽいっ また ぽいっ もういっちょ ぽいっ ダメ

押し の ぽいつ  
」

ドガンー!!ドガンー!!ドガンー!!.....

あたりに轟音が鳴り響き続けた。

すると、投げた番犬は沙都子と話していた。

「いやー、容赦ないな沙都子は。てか、なんで火薬持ってんだか。」

「をーっほっほっほ、火薬はトラップの常用道具ですよ。」

なんと、番犬の正体は勇人だった。まあ、十中八九は気づいていたと思うけど.....

「それにしても、なんで気付かないんだか。」

沙都子の爆弾のおかげでここにいた山狗と番犬は全滅した。

「これから、どうしますの?。」

「レナがないのが気になるが、とりあえず葛西さんに連絡するか。」

「そういうと、勇人は無線機を取り出した。」

「おーい、聞こえますか。どうぞ。」

「.....はい、聞こえます。何かありましたか。すごい爆発音が聞こえましたけど。どうぞ。」

「軽く山狗たちをこらしめただけです。ちなみに、レナ以外は皆見つけました。どうぞ。」

「ご安心を。こちらで竜宮さんは見つけました。どうぞ。」

「おお!、じゃあ、皆無事だということですね。」

「しかし、竜宮さんは全身打撲を受けています。かなり殴られたようです。どうぞ。」

「え!?...まじかよ.....」

「大丈夫ですか?。とりあえず、合流できますか?。」

「あ...はい、場所は.....どこだこ?。」

「祭具殿前ですわ。」

「ああ、祭具殿っていうところです。どうぞ。」

「わかりました。今からそちらに向かいます。それでは後ほど。」  
「症候群の人たちや山狗には気を付けてください。」

「勇人は無線をなおした。すると、沙都子が不安そうな顔をしながら  
「どうしましたの？。さつき取り乱したりしまして。」

「ああ・・・レナが怪我していたらしい。」

「ええ！？・・・本当ですよ！？」

「葛西さんが言ってたんだ。全身打撲らしい。」

「レナさん・・・」

「落ち込むなよ。むしろ喜べ。全員助かったんだからな。」

「そ・・・そうですね・・・」

「勇人は落ち込む沙都子を励まそうとするが元気にならない。  
すると

「・・・う・・・う・・・」

「！！。」

沙都子と勇人は反射的に皆がいる方を見た。

「う・・・う・・・体が・・・うまく動かない・・・です・・・」

「梨花！！大丈夫ですよ！？」

「梨花が起きたようだ。まだ体のいうことはきかなさそうだが。沙都  
子は梨花に飛びついた。

「みみ・・・苦しいのです・・・沙都子・・・」

「ご・・・ごめんあそばせ、梨花。・・・でも・・・よかった。」

「さつきまでの落ち込みが紛らわせたな。」

「すこしだけ、ほっとする勇人だったがそれも束の間に終わった。」

” 八八八八八・・・ヒ八八八八八・・・ ”

「！？」

突然、不気味な笑い声が聞こえた。そして、その声は皆知っていた。

「・・・六一！？・・・」

「勇人の頭に一瞬六一が横切ったが、空耳だと思った。」

「あいつは死んだはず。まさか……祟り!？」

” 八八八八八……祟リジヤナイヨ。チャントイルヨ。”

すると、祭具殿の扉が開き始めた。そこには

「やあ、勇人。君にとつては今日で二回目かな。」

「ろ……六一!!。なんで生きてんだよ!？」

「簡単だよ。あれは僕じゃないからだよ。」

「ふざけんな!! 声から見た目全部お前だったじゃねえか。」

「頭悪いな。あれは僕であつて僕じゃないんだよ。」

「意味わかんねーよ!!。」

「だから、クローンだつてことだよ。」

「く……クローン!? 今はそんな技術、ろくに発展してねーだろ。」

「そりゃ、人間やつたらね。」

「……どういうことd ドゴツ!! うが……」

六一は瞬間的に勇人の腹を殴った。距離は5メートルはあったが本当に一瞬だった。

「あれ……六一さんは?。」

沙都子は余りの早さに気づいてない。

「沙都子……後ろ……なのです。」

「へ……!!、勇人さん!!。」

沙都子が六一を見つける時間：5秒

「はは、沙都子ちゃんは鈍いな。」

「な……なんですつてー!!。」

沙都子が挑発に乗ってしまった。

「さ……沙都子……落ち着くのです。」

梨花の声は届いていなかった。

「あなたなんて、これでおしまいですわ。」

そういうと、沙都子は爆弾を投げた。このときの沙都子は勇人がいることを忘れていた。



「子供は単純だね。」

ガシッ

「ん?。」

「逃がさねえぞ。」

勇人は六一を捕えた。

「なんだい、一緒に死ぬのかい?。」

「それは、どうかな。」

バン!!!ドガン!!!

突然銃声があったと思いきや、すぐに轟音に変わった。

「おらよ!!!。」

すかさず勇人は六一を誰もいないところにけつとばした。そして

バンッ!!

「う……。」

葛西は、六一の足を撃った。

「甘いな、六一。」

「……まあ、いいや。バイバイ。」

グシャッ!!

「!?!。」

六一は自分の頭を手で刺した。

「またかよ……。」

すると、沙都子が目の前のことに気が動転した。血がそこらじゅうに飛び散っていること。そして、人が手で頭を貫いて死んでいるこ

と。

「い・・・いやあああああああああ。」

「！！・・・さ・・・沙都子、落ち着け。」

すると、梨花が沙都子を撫でた。梨花の体は結構回復していた。

「大丈夫なのです。あれはよくできた人形なのです。」

「ほ・・・本当ですよ、梨花?。」

「でないよ、瞬間移動だったり、あんなに血がブシャーだったりできないのです。」

「そ・・・そうですね。」

梨花が何とか沙都子の気を取り戻させた。

「とりあえず、皆起きるまで休憩するか。まずは、このした・・・人形を処理しなきゃな。」

「それなら、私にお任せください。詩音さん、手伝ってください。」

「こんなグロイものを女の子にやらせないでください。」

「あなたが私の信頼できる人だから頼んでいるのです。」

「そ・・・そう言うのなら、しかたがないですね。」

「葛西さん、うまいな。俺らは皆がおきるまで休憩だ。」

「わかりましたわ。」

葛西たちは死体処理<sup>シヤクタイ</sup>、勇人たちは皆が起きるまで休憩をとった。

勇人は休憩中、頭の整理をした。

「あれも、きつとクローンだろうな。あいつは一体何者なんだ?。」

大体、人間なのか?・・・あー、もうわかんねー。」

勇人は考えるのをあきらめた。

## もう一人の神

「あっち向いて、ホイ。はいまた俺の勝ち。」

「きー、悔しいですわ。もう一回ですわ。」

「沙都子、これで56連敗なのです。」

「勇人たちは暇つぶしにあっち向いてホイをしていた。」

「ははは、何度でも相手になってやるよ。」

「そうやって、調子に乗っていられるのも今のうちですわ。」

「沙都子、ふぁいとー、おーなのです。」

「沙都子、次負けたらかぼちゃ食べさせますからね。」

「そ．．．そんな．．．」

「嫌なら、勝てばいいじゃねえか。」

「そうですね。勝てばよろしいことですわ。」

「沙都子が燃え上がっているのです。」

ヒートアップしたその時

「あう．．．ここは．．．祭具殿?．．．」

「あつ、羽入が起きたぞ。」

「うう．．．私は一体．．．」

「魅力も起きたのです。」

「ふわ．．．あれ、俺は．．．」

「圭一さんもですわ。」

皆は意識を取り戻した。

圭一はレナがいないことに気づいた。

「あれ．．．レナは?。」

「ああ、レナは怪我してしまって。今は葛西さんの車の中で休んでいるところだ。」

「本当か!?。」

「．．．ああ。」

すると

「みんなー！！。大丈夫かな、かな？。」

「なっ！？・レナ！？、お前が大丈夫かよ？。」

レナがやって来た。決して怪我は大丈夫な状態ではない。

「レナはこれくらい大丈夫だよ。」

「全身打撲で大丈夫なやつはいないだろ普通。大人しくしとけて。」

「

「だってだって、勇人君が集合って葛西さんが言ったんだもん。」

「え？俺、そんなこと言ってないぞ。」

「あれ・ほんとかな、かな？。」

「まじだよ。」

すると、葛西さんがやってきた。レナはすぐに問い詰めた。

「葛西さん、勇人君が集合なんて言っていないっていつてますけど。」

「はい、そうです。」

葛西は何の躊躇もなく答えた。

「ど・どうして嘘つくのかな、かな？。」

「それはですね・・・。」

”ソイツハ我ガシモベダカラダヨ。”

『！！。』

突如、六一の声が聞こえた。

「どこにいやがる！！。出てきやがれ！！。」

勇人は怒鳴ってみた。

”サツキカライルジヤナイカ。上ヲ見テゴラン。”

皆はすぐさま上を見た。そこには

”ヤア、マタマタ会ツタネ。”

「な・・・浮いてやがる。」

六一は空に浮いていた。そして、神々しい力を放っていた。

” 役者ガソロットタネ。”

「一体、何のつもりだ！？。お前は何者なんだ？。」

” 僕ハココノ神ダ。”

『 ええ！？ 』

皆が驚いた。

「お前は鷹野三四の従弟だっていつていたはず。なのに今さら。」  
「そうなのです。大体、僕が本当の神なのです。」

” 僕ガ元々ココノ神ダッタハズダガ、ソコニイルダメ神ガ僕ヲ蹴落  
トシタノダ。”

「ぼ・・・僕なのですか！？。僕は知らないのです。」

” トボケルナ！！。我カラ全テヲ奪イヤガツテ。死ネ！！。”

突如、どこからとなく出した槍を羽入に向かって投げた。

キンッ！！

「大丈夫か、羽入？。」

勇人はすかさず羽入に駆け寄り、スケボーで防いだ。

「ありがとうございます。」

” 人カラ奪ツタ玩具ヲ使イヤガツテ。ダガ、才前ニハ過ギタモノダ。”

返シテモラウゾ。”

すると、六一は勇人のもとへ急降下してきた。その速さは半端ない。「うわっ。」

余りの早さに勇人はひるんだ。六一はその隙を狙った。

”戻ルガヨイ。我が玩具ヨ。”

そう言うと六一は勇人の頭を握った。

「うがあああああ……ああ……あ……」

「勇人！！。このっ……」

圭一が六一に殴りかかるが

”部外者八黙レ！！。”

「おわっ！？。」

突如発生した突風が圭一をはねとばした。

”コレデヨシ。サラバダ下種ドモ。”

六一は瞬間に消えた。勇人が倒れた。

「勇人、大丈夫なのですか。」

羽入が駆け寄った瞬間

”ヨクモ洗脳シテクレテナ！！。偽神メ、殺シテヤル！！。”

勇人は化身の目になった。

「ゆ……勇人……どうしたのですか！？。」

「羽入、逃げなさい！！。早く！！。」

梨花が叫んだが

”クタバレ悪魔!!。”

化身勇人はスケボーを振りかざした。

ドガツ!!

「あう!!。」

羽入は紙一重でかわしたが地面がかなりえぐれたため、バランスを崩した。

「葛西、なんとかしなさい!!。」

詩音は葛西に命令するが

「なにいつてんだガキが!!。調子こくんじゃねえ!!。」

「え!?!。」

葛西は詩音に銃を向けた。

「ガキども、動くんじゃねえぞ。動いたらこいつの頭がぶっ飛ぶぞ!!。」

「う・・・このままじゃ羽入ちゃんがあぶないよ。」

「でも、動いたら詩音が殺される。どうしろっていつのよ。」

” 終ワリダ!!。”

そういつている間にも勇人はまた振りかざしていた。まだ、羽入の体勢はとれていない。

「やめる勇人!!やめてくれ!!。」

ドガツ!!

勇人の振りかざしたスケボーは羽入を外し、地面をえぐっていた。

「あう!?!。」

”大丈夫か、ハニユウ・・・”

「勇人！！、勇人なのですか！？。」  
「勇人はどうにか自分の意識を取り戻していたが半分は化身状態だった。」

” あいつニ妙なコトされてオカシクなつタンダ。俺が化身ヲおさえるカラ今のうちにニゲロ。”

「無理なのです。葛西のせいで逃げ出せないのです。」

” そうカ。だツたら・・・”

勇人は葛西に命令した。

” 我に従工。ソの者たちを逃がせ。”

「お・・・仰せのままに。」

葛西は銃をおさめた。

” 今のうちニ。”

「でも、勇人はどうするのですか？。」

” 早く・・・そろソ口限界が・・・”

「行くわよ羽入。」

梨花は羽入の手を引っ張った。

「り・・・梨花、勇人g「勇人の気持ちを知ってあげなさい。」



梨花・・・」

梨花は羽入を連れ、とにかく走った。

”・・・ありがとう、リカ・・・”

勇人はそう呟いた。

皆は学校へ避難していた。運よく症候群の人には見つからなかった。とりあえず、皆は自分たちのクラスにいた。

「近くに学校があつてよかつたぜ。レナ、怪我は大丈夫か?。」

「少しきついな。でも、大丈夫だよ。」

「全身打撲で大丈夫とは、ほんとすごいなレナは。」

「えへへ。」

「ねえ梨花、勇人さんは一体どうなさつてしまいましたの?。突然、羽入さんを襲いだして。」

「僕にもよくわからないのですが、多分六一が勇人を洗脳したに違いないのです。」

「わたくし、もう誰かがいなくなるのが嫌ですわ。」

「沙都子・・・」

”見ツケタ。”

『!!!。』

目の前の教壇には勇人が立っていた。

「勇人!!。お前は洗脳なんかに負けるわけないよな!?。」

”洗脳?、違ウ。我八戻ツタノダ。ソシテ、本物ノ神ノ下デ鬼ケ淵

村ヲ復活サセルノダ。”

「そのついでに、君たちを殺そうとしているわけだよ。」

「この声は六一!!。」

圭一はすぐさま声がした方を向いた。そこには、いつの間にか六一がいた。今は神々しい力はない。

「どうして、私たちは殺そうとしているわけ?。」

「僕はずっと君たちを見てきたんだよ。100年間のループも全て。」

「ええ!?。」

梨花は驚いた。

「さらに、どのタイミングで復讐しようか考えた結果、幸せになった瞬間がいいなと思ったわけだよ。」

「つまり、わたしのループが終わった時ってことね。」

「幸せを壊すのって楽しいからね。そう、その神がやったように。」

「だから、僕は何も知らないのです。」

「ふざけるな!!。大体、お前みたいなやつが神になるからこの村はダメになったんだ。おい契、こいつらをぐちゃぐちゃにやれ。」

” 仰セノママニ。”

すると、化身勇人は近くにあつた机を軽く持ち上げ、投げた。

「うわっ!!。皆、逃げるぞ。」

圭一たちはかわして、逃げようとするが

” 愚力者メ。”

化身勇人はすかさずドアの方へ机を大量に投げ、道を封じた。

「くそ。じゃあ、窓から・・・。」

「させないよ。ほら。」

六一の力で、窓が壁に変わった。

「嘘だろ!?!」

「デスマッチだよ。がんばってね。」

そう言くと六一は消えた。

” 才前タチノ腸わたヲ沼ニ沈メテヤル。 ”

化身勇人は突然、斧をどこからとなく取り出した。

「まったく、神は何でもありかよ。」

圭一はバットを取り出し、構えた。

” 神ニ逆ラウト八命知ラズナ。 ”

化身勇人は圭一を狙った。

” マズ八貴様ノ腸カラ頂コウ。 ”

「圭ちゃん、私も援護します。勇ちゃんには悪いけど、このスタンガンで眠らせちゃいましょ。」

「頼む、詩音。俺がおとりになるからその隙に。」

” 死ネ。 ”

化身勇人は瞬間で圭一に近づいた。すでに斧を振りかざしている。

バギツ!!

斧は床をかなり深くえぐった。

「おっと、神は瞬間移動することなんてわかってるから読みやすい

ぜ。」

圭一は軽くかわした。

「今だ、詩音。」

「わかっています。」

すかさず、詩音が化身勇人に近づく。化身勇人はまだ斧を抜いている最中だ。

「これで、眠らしてあげます。」

詩音はスタンガンを構えた。そして

ビリリ！！

”グオ……コノ愚力者ガ！！。”

「嘘！？、倒れない！？。」

なんと、化身勇人はスタンガンの電撃を耐えた。

化身勇人は斧を抜くのをあきらめ、

ドゴツ！！

「あう……。」

化身勇人の拳は詩音のみぞに入った。詩音は気絶した。

「詩音！！。」

”マズハコイツノ首ヲトルカ。”

化身勇人は詩音の頭を持つとした。

「まずい、勇ちゃんは詩音の首をもぐ気だよ。」

「そうはさせるかー！！。」

すかさず圭一が詩音を助けに行く。

”単純ナ人間メ。甘イ考エ八死ヲ招クコトヲ教エテヤル。”

すると、化身勇人は詩音を投げた。

「うわっ!?!」

圭一はそれをうまく受け止めるが

”ソノママ貫イテクレル。”

化身勇人はいつの間にか槍をもっていた。

「させないよ!?!」

キンツ!!

レナが鉦でガードした。

「サンキュー、レナ。でもお前、怪我は?。」

「これくらい大丈夫だって言ったでしょ。」

”ソナモノデ防ゲルト思ツタカ。”

ピキキツキキ・・・

「ええ!?!」

鉦にひびが入った。そして

バリツ!!

「うぐ・・・」

「うわっ!?!」

鉦を貫いた。圭一たちはかわしたが、レナは怪我のせいで鈍くなっており、完全に避けきれなかった。

「レナ！！、早く逃げる！！。」

”時ステニ遅シ。”

化身勇人は槍をレナに構えていた。

”終ワリ・・・ウグ！？・・・”

「！？・・・なんだ？。」

突如、化身勇人が苦しみだした。

「何だがわからないが、今のうちに逃げる、レナ。」  
レナはその隙に化身勇人から距離を取った。

”ウガアアアア・・・コノ・・・静マレ・・・ウガアアアア・・・”

「・・・勇人・・・勇人なのです！！。勇人が戻ろうとしているので  
す。」

「ちよつと・・・羽入！！。待ちなさい。」

急に羽入は化身勇人に近づいた。

「勇人、僕なのです。羽入なのです。戻ってくるのです。」

”ウガアア・・・コノ・・・偽神・・・ガ・・・”

「危ない、羽入！！。逃げなさい！！。」

化身勇人は再び槍を構えたが羽入は逃げない。

「勇人は化身なんかには負けないのです。僕は勇人信じるのです。皆  
を信じたように。」

「羽入・・・」

化身勇人は構えているが振り下ろさない。

”・・・ハ・・・ハニユウ・・・”

「勇人！？、勇人なのですか！？。」

”羽入・・・ウグ・・・”

「勇人、しっかりするのです。そして、早く戻ってくるのです。」

”・・・おレハ・・・化身なんかジャ・・・ない・・・俺は・・・契  
勇人だー！！。”

「勇人、戻ってきたのですか！？。」

「ああ、どうやら完全におさまったようだ。」

なんと、勇人は化身状態から解放された。

## 真実と決断

「さあて、今のうちに色々済ませるか。」

「なんだよ、色々って?。」

「色々は色々だ。まずはレナ、ちよつときな。」

「なにかな、かな?。」

「勇人はレナの頭に手を置いた。すると

「・・・あれ、怪我が治っていくよ。」

「嘘っ!?。」

なんと、勇人はただ頭に手を置いただけでレナの怪我を完治させた。

「な・・・何をしたんだ一体?。」

「あいつの神の力で治療したんだ。この部屋も元に戻るか。」

そう言つて勇人は手を一振りすると机がきれいに戻り、斧で開いた穴を塞ぎ、壁になつていた窓も戻つた。

「詩音も回復させるか。」

「あれ勇ちゃん、なんで詩音がやられてるの知ってるの?。化身の記憶ないんじゃない?。」

「さー。多分、あのおときあいつがなんかやつたときのせいだろ。だから、化身の記憶もあるわけ。」

「納得できないんだけど・・・。」

「勇人は適当に言つて、詩音を回復させた。」

「うう・・・あれ?、痛みがない・・・。」

「大丈夫か、詩音?。」

「!?!?、勇ちゃん!?!?。」

「大丈夫だよ詩音。いつもの勇ちゃんだから。」

「詩音は最初は驚いたが魅音の説得で理解した。しかし

「そうだったんですか。でも、お腹を殴つたお返しをさせてもらいますからね。」

「しゃーねーか・・・って待て!!、それはいくらなんでもまずい



「!!。」

詩音はナイフを持っていた。

「大丈夫です。神様なんですから。」

「俺はあくまで化身だ。」

「そんなこと、私の知ったことじゃありません。」

「おいおいおい。俺、死にたくないぞ。」

「くけけけけ、軽く刺すだけですから。」

「うひゃー!!、逃げろー!!。」

「逃げられると思っっているのですか?。」

勇人と詩音の死の鬼ごっこが始まった。

数分後、鬼ごっこ終了。勝者・勇人。勝因・詩音のナイフを奪った。

「ふう、さすがにきつかったぜ。」

「それより勇人、色々はもうないのか。」

「まだある。皆、ちゃんと聞けよ。これから重要なことを話すから。」

「

「重要なことってなにかな、かな?。」

「今、雛見沢におこっていること全般だな。あと、羽入のことも。」

「僕もなのですか?。」

「そうだ。まず、俺について話すか。」

「勇人についてか。」

「まず、あいつが言ったけど、俺はあいつに化身として作られた。」

さらに契家は記憶を引き継ぐことができる。だから、今の俺は昔の

ことも大体分かる。ついでに、あいつは神の力も少しくれたんだ。」

「それならさ、園崎家が作られたってどういうことかわかるの?。」

「あ、あれは適当なんだ。ただ適当に三つの家を選んでそう決め

付けただけ。だから、お前は普通の人間だ。」

「えー、私にも神の力があると思ったのに。」

魅音はがっかりした。

「次は、洗脳型雛見沢症候群についてだ。」

「一番気になるところなのです。」

「あれは、神の力で作られた薬なんだ。あいつがお前らの100年間ループを見て考えたんだと。疑心暗鬼にならなくても狂乱させ、普通の雛見沢症候群よりも狂い具合が上がっている。さらに自分で操るために洗脳的能力も付け加え、手ごまにしようとしているんだ。」

「ひどい。あんな奴の手ごまなんてまっぴらごめんよ。」

「でもよ、あいつはどうやって村人たちを感染させたんだ?。」

「蚊だよ。」

「蚊!?!。」

「感染の王道を使っただってわけだ。偶然にもお前らには蚊は寄ってこなかった。それはわかんねえだが。」

「わたくしは蚊に刺されないようにちゃんと対策しておりますわ。」

「僕もなのです。」

「僕だつてちゃんとやっているのですよ。あうあう。」

「私も気をつけているよ。」

「おじさんも抜かりはないよ。」

「当然、私もです。」

「俺だつてちゃんとしてるぜ。」

「へー、ちゃんとやってんだな。んじゃ、次は羽入のことだ。」

「ついに僕の番なのです。」

「まず、お前が何も知らないところから。」

「あう?。」

「お前の記憶は俺の先祖が消したんだ。」

「な・・なんでなのですか!?!。」

「あいつが神だった頃、お前はあいつを憎み、あいつの全てを奪って、さらにお前の神の力で亜空間に閉じ込め、神の座を横取りしたんだ。」

「ぼ・・僕がそんなことを・・。」

羽入はそんな自分が信じられなかった。

「しかし、その頃の羽入は自分のやったことが最低だと気付いた。すると立ち直れなくなってしまうた。」

「気の弱いあんたらしいわね。」

「梨花・・・ひどいのです。」

「だから、俺の先祖はお前の記憶を消して立ち直らせたわけ。しかし、あいつの力は神の中でもかなり優れていたため羽入の力では抑えきれず出てきたわけだ。」

「それで復讐をしているわけなのですか。それなら、しょうがないのです。」

「でも、俺は羽入の方がいいな。」

「なんでなのですか？。僕がいなければこんなことが起きなかったのですよ?。」

「あいつは元々あんな性格だったから、むしろ改善された神の方がよかったと俺は思う。それに、あいつがあのまま神だったら梨花はとっくに死んでるぞ。」

「あう・・・でも、僕は六一より力はないしそれに意思も弱いし・・・」

「村人一人一人を大切にする神の方が俺は好きだな。」

「勇者・・・勇者はやっぱり優しいのです。」

「な・・・俺はただいい方を選択しただけだ。」

「勇人がまっかつかのかのたこさんみたいなのです。にぱ〜。」

「なんだと!!。もう一度言ってみやがれ!!。」

「はう〜、真っ赤な勇者君かぁいいよ〜。お持ち帰りい〜。」

「うわっ!!、まだ怪我なおすんじゃないかった。こうなりゃ・・・」

勇者はレナを

ヒョイ・・・ドタツ!!

走ってきた勢いを使って投げた。レナは宙を飛んで床に落ちた。

「いたたた。勇人君は容赦がないよ。」

「容赦したらお持ち帰りされるからな。それより、次はこれからのことについて話すぞ。まあ、簡単なことだけだ。」

「これから一体どうするのか?。」

「六一を殺す。」

「!?。」

皆は驚いていたが勇人は冷静だった。

「あいつを殺せばあいつの作った力は全てがなくなる。」

「それって、勇人君も消えちゃうってことだよな。」

「・・・レナはお見通しか。そうだよ、俺も消える。あいつの力で作られたからな。」

「おい勇人、お前が消えることはないじゃねえか。」

「仕方ないだろ。それしか方法がないんだ。なんなら、お前は他にいい方法があるのか?。」

「それは・・・。」

圭一は反論がしたかったができなかった。

「覚悟の上で決めたことだ。だからわかってくれ。」

「・・・嫌ですわ。」

「沙都子?。」

「もう、誰かを失うのは嫌ですわ。」

沙都子は涙を流した。しかし勇人の表情は険しくなった。

「わたくしは嫌ですわ。勇人さんが無事で、かつ元通りになる方法

W「甘えるな!!。」え!?!?。」

「沙都子!!。耳の穴かつぽじってよく聞け!!。人はいつか別れというものがある。遅かれ早かれここにいる全員と別れることになる。大体、最善な方法なんて考えてる暇はないんだよ。」

「勇人、いくらなんでもひどいぞ。」

「知るか!!。どうせ全て終わって時間が経てば皆、俺なんて忘れていくんだよ。」

「なら、今というこの時間を大切にしようよ。ね?。」

「今を大切にする？。ふざけるな！！。こんな症候群がうじゃうじやいるところで今を大切にできるか。もういい、俺はあいつを殺しに行く。」

「まっつてよ勇ちゃん。」

魅音の声もむなしく、勇人は消えた。

「・・・うう・・・ひつく・・・ひつく・・・うえーん・・・」

沙都子は泣き叫んだ。梨花が頭を撫でて泣きやまそうとしている。

「あいつ、急にキレやがって。一体どうしたんだ？。」

「・・・勇人君は、わざとあんな風にふるまっただよ。」

「え！？、どうしてだよ？。」

「きつと、勇人君は嫌われれば私たちに悔いが残らないと思ったんだよ。そして、私たちの未来のために犠牲になろうとしている。」

「何よそれ。そんなの間違ってる。」

「そう、勇人君はまた間違えたの。だから教えてあげなきゃ。」

「だけど、あいつの居場所が分からないと・・・」

「場所ならわかるのです。」

「え！？。」

羽入は一枚の紙を持っていた。

「勇人が消えたところにありましたのです。まったく、勇人はほんと素直じゃないのです。」

「これは・・・」

紙には「沼」と書いてあった。さらに続けてこつも書いてあった。

”別れを受けいれる勇氣があるなら来たらいい。だが、仲間を見捨てないとか俺を助けるためとかで来るな。”

「どつする？。」

「圭ちゃん、それは愚問だよ。」

「そうだったな。沙都子、早く顔を戻せ。勇人の所へ行くぞ。」

「・・・ひつく・・・わかりましたわ・・・ぐすん・・・」

皆は学校を出て、真っ先に沼に向かった。

### 鬼ヶ淵沼

「おや、帰ってきたんだ。ちょうどいいね。今、新しい薬を作ったところだよ。」

六一は振り向きもせず勇人の存在に気付いた。沼の近くで怪しい薬を作っていた。

「まだ、生きてるねあいつら。まあ、この新しい薬を使おうか。自分で死ぬまで指をもぎ取り続けるこの薬でね。」

「……ふん!!。」

ザクツ!!

勇人は詩音から奪ったナイフを六一の背中に刺した。

「うが……お前……裏切ったか……」

「演技はこれくらいにして、本人を出せ。」

「……あれ、いつからわかったんだ?。」

「ここに来た瞬間から。」

すると、空からもう一人、六一が降りてきた。

「何、ナイフを刺したってことは逆らうのかい?。生みの親に。」

六一は自分のクローンを沼に捨てながら言った。

「こんな最悪な親なんて知らねえな。俺の本当の親は天国にいるからな。」

「はあ、せつかく使える玩具を取り戻したのに壊されてたか。なら、思う存分壊すだけだよ。」

六一は剣を取り出した。

「お前に与えた力は僕の代わりに皆を治めるためだけの力だから弱

「いよ。勝てると思ってるのかい?。」

「ああ、勝つ気満々だぜ。」

「それに、僕が死んだら君も消えちゃうんだよ。いいのかい?。」

「覚悟はついてる。もう未練はない。それに梨花には、もうつらいループをさせたくない。」

「勇人はスケボーを構えた。」

「神の力で強い武器でも出せばいいのに。」

「ご忠告どうも。でも、どんな武器よりこれが一番なんだよ。」

「なら、負けたときの理由はどうするのかい?。」

「負けねえよ。切札だってあるからな。」

「楽しみだよ。さあて、どっちの腸が沼に落ちるかな、かな?。」

「レナの真似するな。気持ちわりい。さっさといくぜ。」

「その後の未来を賭けた、神とその化身の戦いが始まった。」

## 神の終末

契view

俺は六一と殺りあっていた。誰もいない不吉な沼の前で。

すると、六一は余裕ができたのか

「ハンデとして、神の力は使わないでおこう。」

「そいつはありがたいな。おらっ!!!。」

キンツ!!!

俺のスケボーと六一の剣がぶつかり合う。

「すごいね。スケボーで剣と殺りあうなんて君ぐらいしかいないと思うよ。」

「それはそれで嬉しいような悲しいような感じだな。」

「お前はなぜ羽入ダメかみの方につくんだい?。」

「どこを取ってもあいつの方がいいからな。」

「何言ってるんだい。カモダメ、意思も弱い、チビで、神のできそくないが?。ははは、本当に壊れちゃったんだ。」

「いや、むしろあいつのおかげで俺も改善されたな。お前も改善されればいいのにな。・・って無理か。復讐するつもりだろ?。」

「そうだよ。あいつは僕の全てを奪った。ただ自分のために。お前だって普通は復讐するだろ?。」

「どうだろうね。大体、自分が未熟だったから乗っ取られたんじゃないのか?。」

「なんだと!?!。あいつが不意打ちしてきたんだ!!!。」  
おっと、怒りにまかせて無駄に振りまくってやがってる。

「あいつさえいなければ!!!。あいつさえいなければ!!!。あいつさえいなければ!!!。」



「単純な神様。簡単な挑発に乗るとかそれでも黒幕かよ?。」

「うるさい!!。壊れた玩具ごと気が!!。」

すると、六一はやたら刃物を生み出した。

「おい!!、力は使わないって言っただろ。」

「神の逆鱗に触れた罰を受けるがいい。」

無数の刃物が飛んできた。

「よっほつとつちよつた。」

それをリズムよくかわす。

「こんなもんより、レナのパンチの方が難しいぜ。」

「そうか。ならこれはどうだい?。」

突然、手を前に出した。そして

「オヤシロビーム!!!。」

ドビュン!!

「のわっ!!。」

間一髪避けた。それにしてもビーム撃ったよ。ほんと神様はめっちゃくちやだよな。

「なら、俺だって。オヤシロビーム!!!。」

ビュン!!

俺も対抗して撃ったがあいつに比べてはるかに弱い。

「こんな弱いビームが通用すると思ってるのか。」

六一は交わすことなく俺のビームを受け止めた。

「まんまとかかったな。」

「何!?。」

俺はもうあいつの後ろに移動していた。ビームはおとりってわけだよ。

「くらえ!!!。」

ザシュッ!!

「ぐわ・・・」

くそ、身をひるがえしてかすただけか。だが、ダメージはまあまああるようだ。

「やるな。だが、もう引き返すことはできなくなったよ。」

「はなから引き返すなんてするつもりはない。俺はお前を殺す。そして、雛見沢に幸せなその後を訪れさせる。」

「神みたいないなことを言いやがって、むかつく野郎だ!!。」  
完全にキレたようだ。

「さあ、このままお前を倒してや」 ブシャツ!! が!?!?.....」

「ははは、馬鹿な奴だ。」

な・・・何が・・・起きたんだ・・・いきなり体が切り刻まれた・・・  
「うぐ・・・」

痛み能耐えきれず、倒れてしまった。

「見えなかったか。でも、お前が動いてなかったただだよ。」

「まさか、時間を・・・ぐ・・・」

やべ、出血で意識が・・・

「神に勝てると思ったのか。ぎやははははは、片腹痛いことだな。」

「くっそ・・・負けて・・・たまるか・・・」

俺は全ての力を振り絞って立った。俺は神の力を使い、回復しようとする。

「まだ立てたか。だが、これならビームもかわせないよね。」

あいつ、ビームで終わらせるつもりか。

「ま・・・間に合え・・・」

「終わりだ。オヤシロビーム!!!。」

ドロン!!!



地面に残ったのは勇人の手が付いたスケボーだけだった。

「ひやはははは、消えちゃった。」

「なんかすごい音が聞こえるぞ。勇人が心配だ、急ぐぞ」

「勇ちゃん、無事でいて。」

皆で鬼ヶ淵沼へ駆けている。

「勇人君、お願いだからまだ無事でいて。」

皆、勇人のことを心配していた。

すると、タイミングが最悪なところで

「君たちはこの先には行かすことができない。」

「んっふふふ、覚悟してくださいね。」

「あ・・赤坂と大石!!。」

赤坂と大石が前に立ちはばかった。

「あああう、やばいのです。ピンチなのです。」

「こうなったら、俺が相手になってやるうじゃねえか。」

圭一はバットを取り出した。しかし、そのバットは最初に使っていたのとは違う。

「圭一さん、そのバットは・・・」

「ああ、悟子のだ。さつき、学校にいる間に変えておいたのさ。こっちの方がしっくりくるからな。」

「圭一君、私も手伝うよ。」

レナも鉈を構えた。

「さすがに大人相手に2対2はきついでしょ。おじさんも参加するよ。」

魅音も二丁拳銃を構えた。

「詩音、梨花ちゃんたちを頼むよ。」

「任せてください。お姉たちも気をつけて。」

「待つのです。いくらなんでも危ないのです。ここは皆で力をあわせ、「羽入ちゃん、今やばいのは勇ちゃんなんだよ。」あう・・・」

「俺たちのことは大丈夫だ。それよりも、間違えた人の方が先決だから先に行け。」

「行くわよ、羽入。」

「あうく、わかつたのです。」

羽入は圭一たちを信じて先へ進んだ。

「鬼ヶ淵沼まで、あと少しなのです。」

もう、距離は200メートルは切っている。

しかし

ザクッ!!

「う・・・」

「!?!?・・・詩音さん!!」

突然、注射が飛んできたて詩音の足に刺さった。

「詩い、しつかりするのです。」

梨花が呼びかけるが返事をしない。

「無駄ですよ。この入江特製麻酔は野生の像も瞬時に眠らせてしまいますすからね。」

「監督!!」

「新しい村でメイド帝国を築くのです。そのために、死んでもらいますからね。」

「この最低な大人はわたくしが相手になりますわ。」

「沙都子、手伝うのです。」

沙都子に続き梨花も立ちあがった。

「ぼ……僕も一緒に戦うのです。」

「羽入さん、お気持ちは嬉しいですけど、勇人さんを追ってくださいませ。」

「ど……どうしてなのです!?!」

「鈍いわね。さっさと行きなさい。それが、彼の命を救うかどうか決まるのよ。」

「梨花……」

「いってくださいまし。皆さんのためにも。」

「沙都子……わかったのです。」

羽入は沼へと駆けだした。

羽入 view

遂に沼に着いた。しかし、そこには誰もいなかった。

「あれ、一体勇人はどこに行ったのですか。」

よく探してみるけど

「……やっぱりいないのです。もしかして、もう倒しちゃったとか……」

「うん、倒したよ。」

「!?!……六一……」

木の上に六一の姿があった。

「残念だったね。ほら。」

六一は僕に何か投げてきた。それは僕の目の前に落ちた。

「これは……手!?!……まさか。」

「そつだよ。お前が壊した玩具の手だよ。」

「嘘……嘘です!!これはよくできた玩具で偽物なのです。」



「1」。

「勇人……」

「ベギツ!!」

「うぎゃあああああああああああああ。」

「あう!?!、一体何が……」

急に落とされた。そこには方腕が千切れた六一がいた。そして、横にはスケボーが地面に深く刺さっていた。

「まさか……」

「そのまさか登場。」

少し離れたところに勇人の姿があった。

「勇人!!。本当に勇人なのですか!?!。お化けじゃないんですか!?!。」

「化身がお化けに入るならお化け、入らないなら本物だ。」  
この言葉を聞いた瞬間、張り詰めてた心が落ち着いた。

契view

羽入が捕まっていたんで、スケボーをぶん投げ、見事羽入を掴んでいた六一の腕に命中。

「お……お前……なんで生きてやがる!?!。」

「俺に力を与えたのが間違いだっただな。そのおかげでクローンを作ったわけだ。」

俺はクローンの破片である手を拾って見せびらかせた。

「お……おのれ……」

「とどめだ。」

俺はスケボーを再び手に取り、振りかざした。  
すると、羽入が割り込んできた。



「やめるのです勇者!!!。」

「おいおい、こんな絶好のチャンスを無駄にする気か?。」

「勇者が消えちゃ嫌なのです。勇者が消えたら僕はまた立ち直れなくなるのです。」

「紙に書いてあったはずだ。別れを受け入れる勇気がないなら来るなつて。」

「嫌なのです。絶対にダメなのです。これは神の命令なのです。」

「また、神の命令か・・・。」

「もらった!!!。」

「あう!?!。」

「!!!、しまった!!!。」

六一が隙をついて羽入を捕えた。

「さあ、どうしよっかな?。」

「片腕になつてもまだ動けたか。」

「そうだ。おい、羽入こいつを生かしたかったら沼に飛び込め。」

「何!?!?。」

「ただし、普通にじゃないぞ。腸を出して、目玉一個置いて行け。」

ほら。」

六一がナイフをこつちに投げた。ナイフは俺の足元に刺さった。

「んな!?!?・・・そんなこゝでできないなら、羽入こいつを変わりにしてやるるか?。」く・・・。」

なんて外道な奴だ。しかし、このままだと羽入が危ない。

「・・・わーったよ。やってやるよ。」

「勇者!!!、ダメなのです!!!。僕が死ぬべきなのです!!!。こんなことの根源は僕のせいなのです!!!。だから、やめてくださいです!!!。」

俺は羽入の言葉を無視した。そして、ナイフを拾い

ザクツ・・・グチャグチャ・・・

腹を刺し、腸をほじくりだそうとした。

「勇者！！。勇者！！。やめてくださいなのですー！！。」  
「いっつつつ……ほら。」

俺は腸を取り出した。血がべとべとに垂れている。

「な……なぜ死なない!?。」

「まだ、死なないの間違いだ。おら！！。」

俺は腸を使つて六一の首を締めた。

「うぐ……。」

「隙あり！！。」

ベギツ！！

「うぎゃあああああ。」

さらに、もうひとつ片腕を奪った。そして、羽入を取り返した。

「大丈夫か……って俺のいうセリフじゃないな。」

「あ……あ……あ……あ……。」

俺の傷を見た羽入の意識はほぼ死んでいた。

「悪いな、こんなグロイすぎたことはループになかったか。じゃあな。そろそろ、とどめをさすから。」

「!?!?…ダメなのです!!。」

羽入は俺の腕を掴んで止めた。意識を取り戻すの早いな。こんなグロいもの見たら誰だつて失神するだろうに。

「どちらにせよ、もうすぐ俺は死ぬ。自由にさせてくれ。」

「勇者……。」

俺は羽入を優しく押しのけた。

「けけけ。まさか、ここまで生命力がある玩具を作っていたとは。」

「それは違うぜ。ナイフを刺す前に、神の力で腸をもう一つ作つてたんだ。それを取り出しただけ。どうせ死ぬんだし、これくらいの痛みなんてどうでもいいしな。それじゃあ、終わらせてやる。」

俺はスケボーを振りかぶり、そして

ザシュツッ!!

六一の首を取った。

すると、体が少しずつ小さな光の粒へ変わっていった。

「どうやら、本物だったらしいな。」

「勇人……」

羽入は涙ぐんでいた。

別れの時がもう目の前まで迫ってきた。

## 全ては何もない

「 勇人・・・ひつく・・・ぐず・・・」

「 泣くなよ。まだ消えてないから、最後まで笑い笑えつて。」

「 僕は・・・無力なのです。・・・村人一人守れないなんて・・・」

「 羽入・・・」

「 おーい！！！」

圭一たちが駆けつけてきた。梨花たちもいた。

「 おい、何があつたんだ！？。急に赤坂さんたちが倒れたんだ。」

「 症候群が消えるの早いな。」

「 ！？・・・勇人、お前・・・」

「 見ての通り、消えている最中だ。」

「 羽入！！。あんた止められなかったの！？。」

「 ひつく・・・うぐ・・・」

羽入は泣きながらうなずいた。

「 何やってんのよ、あんた！！。」

「 梨花、羽入を責めるな。こいつは精一杯、俺を止めようとした。」

それを俺があきらめさせただけだ。」

勇人はまだ消えてない腹を見せた。

「 う・・・」

沙都子が吐きそうになった。

「 あっ・・・わり。沙都子にはきつかったか。」

「 おい、勇人！！。俺たちはまだ1ヶ月も過ごしてないじゃないか。」

「 よく思えばそうだったな。ははは・・・」

「 笑えねーよ。大体、まだお前の修行の意味を聞いてないぞ。」

「 だから、教えられないって言ってるだろ。あきらめの悪い奴だな。」

「 こついつときこそ教えるべきだ。」

「 こついつときこそ教えるべきだ。」

「・・・きつと、赤坂と闘っている最中にお前は俺の修行の意味を分かっていたと思うな。」

「な・・・何だよ一体・・・」

「んじゃ、なんで羽入は一人でここに来たんだ。」

「それは、早くお前を止めるためn「ほら、わかってる。」え!?!?」

圭一はまだ、頭に?マークを出していた。

「お前、どっちの意味でも鈍感だな。」

「え!?!どっちって何だよ?。」

「あー!?!。死に際なのにイライラするな。」

「だったら、早く教える。」

「・・・お前の好きな仲間ってことだよ。」

「え・・・それだけならいつでも思っているぜ。なのに今こ」「あの時の修行の時は勝つために頭がいっぱいだったぞ。」「あ・・・」

「どんな時でも仲間のことを忘れてはいけない。いつでもじゃない、どんな時でもだ。」

「意味は一緒じゃないかな、かな?。」

「圭一はいつでも、俺はどんな時でも。んで、俺の方が圭一より上だからどんな時でもだ。」

「わけわかんねーよ!?!。」

皆の軽い笑い声がした。

「すごいね勇ちゃん。こんな時でも笑わすなんて。」

「へへへ、死ぬ時ぐらい、いい死に方をしないとな。」

「何がいい死に方かな、かな?。」

「何だよ、レナ?。」

「一人で抱え込んで、ろくに私たちに相談しないで死んだんだよ。偉そうに仲間って言っているけど、一番仲間を思っていないのは勇人君だよ。」

「・・・」

勇人は何も言うことができなかった。

「なんで頼らなかつたの？。そんなに私たちは無力なの？」

「・・・俺は幸せすぎだな・・・」

「質問に答えて!!。」

レナは勇人に怒鳴った。

「今のが答えだけど。」

「え!?!。」

「幸せを守るために俺は一人で戦った。幸せにキズを付けたくなかつた。」

「そんなの・・・勝手だよ。私たちだって勇ちゃんを幸せの一つだと思ってるんだよ。」

「勝って・・・だな。今になってなんか反省してきた。でも、遅いか・・・」

「そうだよ・・・勇ちゃんは勝手に馬鹿だね。」

「魅音に馬鹿って言われたらおしまいだな。」

「勇人さん・・・」

沙都子が勇人に近づいてきた。勇人はなるべく腹を隠した。

「どうした、沙都子?。」

「ありがとうございますわ。」

「え!?!。」

勇人は驚いていた。

「わたくしたちのために犠牲になってしまって・・・」

「沙都子はわかってくれるのか・・・」

「でも、その犠牲によって助けられた人達は犠牲になった人よりくるしいものですわ。」

「あ・・・」

「わたくしは犠牲によって生きている人ですから・・・」

「・・・ゴメン・・・」

遂に勇人が謝った。

「遅いよ、勇ちゃん。」

「そうだな・・・でも、今になって皆を頼りたくなつた。」

「きつと、勇人は雛見沢症候群になっていたのですよ。」  
「ええ！？……」

「だから、仲間に頼らないでいたんだと思うのです。」  
「じゃあ、症候群じゃなかったら俺は変わってたんだろうか？。」  
「わからないのです。もう過ぎたことなのです。」

「そっか……」

勇人の体はもう4分の1しかなかった。

「そろそろ、消え終わるな。」

「勇人……ぐす……」

「羽入、もう力は戻っているはずだろ。これからも皆を見守れよ。」  
「……わかったのです……もう……犠牲者を出さないようにするのです。」

「……なんか心いてーな。」

勇人の体はもう顔だけになった。

「最後に、言っとくか。」

勇人は最後に皆に言った。

「今が苦しくても、その後は楽しいはずだ。」

『え！？……』

「昔、母さんに聞かされてな。学校がめんどくさい俺によく言っただよ。だから、お前らにも教えておこうと思ったわけだ。」

「そんなの嘘に決まってる……」

梨花が反論した。

「だって、やっと超えたループの先にこんなことがあるじゃない。」

「……梨花、お前は負け組だ。」

「な……なんでよ？。」

「それは、その後のお楽しみだ。」

「ふざけないで、教えなさいよ。」

「やーだね。負け組に教えることなんてねーよ……っであれ？。」

梨花からどす黒いオーラがあふれていた。

「・・・今、殺してあげるわ。レナ、鉈貸して。」

「はい、梨花ちゃん。」

「うぎゃー、やめろ!!!。あ!!!、足消えて動けねー!!!。」

「さようなら、首だけ勇人。」

梨花は鉈を振りかざした。そのとき

「勇人!!!。」

「ん?、羽入!?!。」

羽入が急に勇人のことを呼んだ。梨花は鉈を下した。

「勇人、さよならなのです。勇人が勝ち取ったその後を天国で見送ってくださいますか?。」

「・・・ああ、見ていてやる。じゃあな・・・雖見沢ガーディアン、契勇人はこれにてガーディアンを終了する。最後に、皆、ありな。」

勇人は言いきる前に光になった。

「いつちやっただね。」

皆は名残惜しそうに空を見ている。

「勇ちゃんの言ってた通り、その後が幸せになるのかな。」

「とりあえず、帰ろう。まずは、勇人の家に宿題を取りいかねえとな。」

「あーっ!!!。私、補講があつたんだっ!!!。」

「明日からはいつもの日々に戻るね。」

皆は帰って行った。しかし、何か軽い感じだ。まるで、人が一人消えたことを感じてないように。

「勇人、まさか皆の記憶を・・・。」

羽入は一人呟いた。

「でも、どうやって・・・六一が死んでいるなら勇人の力もないはず・・・なのに・・・。」

「なにしてるの羽入。帰るわよ。」

羽入は思いつめながら帰った。



それから、皆は夏休みを充実し、2学期が始まるうとしていた。

「皆さん、今日は新しいお友達が来てます。」

「またかよ。雛見沢はいつから有名になったんだ?。」

「いいじゃん、数が多ければ多いほど楽しいものだよ。」

「そうだよ、圭一君。」

「骨があるなら部活に紹介しようかね。」

「わたくしのトラップの餌食にして差し上げますわ。」

「沙都子、またチヨークトラップなのですか?。」

「梨花、今回は一味違いますわ。速度を30キロあげましたわ。前は防がれてしまいましたから。」

「おいおい、前回つて、俺の時はトライだっただろ。」

「あら、なにか前に防がれたような記憶があるような感じがしますのですが。」

「はいはい、静かに。それでは、入ってください。」

ガララ・・・ビュン・・・ズガガ!!

「う・・・」

ドタッ

人が倒れる音がした。

「おいおい、ほんとに大丈夫か?。」

皆は倒れた生徒に近づいた。そこには

「うえーん、おかーちゃんに言いつけてやる　! !。」

と泣く中学生ぐらいの男は走って出て行った。

「あいつ、親に頼りすぎじゃないか?。」

「頼り方は半端じゃないね。こりゃ、部活に紹介はやめようか。」

「ちよつと、あなたたち、何をやっているのですか!?!。後で職員室へ来てもらいますからね。」

そう言つて、知恵先生は転校生を追いかけた。

「沙都子、やりすぎなんじゃないの。後で、こっぴどく怒られるよ。」

「それくらい、圭一さんの口先で何とかしてもらいますわ。」

「俺かよ!?!。」

他愛のない楽しい話、しかし羽入はふと梨花に聞いた。

「梨花、契つて知っていますか?。」

「あんた、馬鹿にしてるの?。約束つてことよ。」

「そうでしたか・・・僕、つい、度忘れしちゃいました・・・」

羽入は頭を掻きながら笑つた。

「変な羽入。」

そう言つて、梨花は席に戻つて行つた。

「梨花、ちよつと僕トイレに行つてくるのです。」

「そう。」

「ゆつくりぶりぶ」スパパパーン!! ふげ・・・」

「魅ちゃん、またそんな言葉は使っちゃダメだよ。」

「あれ、まだ言つたことないような・・・がくっ・・・」

魅音撃沈。

羽入は苦笑いしながらどこかへ向かつた。

羽入 view

僕は祭具殿に行つた。完全にサボりですけど・・・何かにここに来て  
いって呼ばれて・・・

でも、もうひとつ気がかりなことがある。

「・・・皆、勇人を忘れてる。」

力は消えたはず。あの時から、皆の記憶が変わっていった。  
「でも、僕だけは覚えてる。なんで……」  
とにかく祭具殿へ向かった。

到着。早速、中に入った。

だけど、そこには何も変わらない。

「……どうして、僕はここに来たんだろう……あっ!!」  
そこにはあるはずがないものが置いてあった。

「勇人のスケボー。どうしてここに!?!」

僕たちはあのときに勇人のスケボーは勇人の家に置いたはずだった。

「どうしてここに……」

「そりゃ、誰かが移動させたからだろ。」

「へっ!?!……」

後ろから声が聞こえた。それは、約1ヶ月前に別れた人の声。

「ああ……あ……」

一生、会えないと思っていた。だけど

「よっ、ただいま。」

会えた。

「ゆ……勇人!?!……あうあう、僕も遂に末期症状が!?!」

「おい、落ち着けて。」

どうしようどうしよう。僕も富竹みたいに首をかきむしって死ぬんだ。

ボカッ!!

頭に痛みを感じた。そのせいで、記憶が少し飛んだ。

「あう、僕は一体何を……」

「俺を見て、末期症状だとか叫んでたような。」

「ゆ……勇人!?!。どうして……」

「沼に案内したあの紙のおかげだ。」

「あの紙……あう?。」

「もう忘れたか。あの紙に契約をしたんだ。この紙を取る神の守護者となるって。」

「神……紙……かみ……」

「ちよつと、日本語がむずかったか?。」

「で……でも、六一が死んだらから、力が……」

「あの時から、俺はお前の守護者だ。つまり、お前がおれば大丈夫ってわけ。」

「じゃあ、なんで皆の記憶を消したのですか?。」

「あれ、俺はそんなん知らねえぞ。」

「あう!?。でも、皆勇人のことを忘れて……」

「あつ、多分あれだろ。よくある別れのパターンだろ。」

「よくありませんのです。」

「ははは。でも、その後はやっぱり幸せだろ。」

「あう……それは……そうです。」

僕は飛びきりの笑顔で答えた。だって、会えたんだから。

「でも、よく思えば、実質は契勇人という奴は死んだからもういないんだよな。」

「あう!?……じゃあ、君に新しい名前を付けてあげるのは。」

「へ……まさか……」

「当然、契勇人なのです。」

「はー、やっぱりか。」

「やっぱりなのです。」

「それより、学校は大丈夫か?。」

「あう!!完全に忘れてましたのです!!。」

「こりゃ、知恵先生のげんこつじゃ済まないだろうな。」

「こつなつたのも、勇人のせいなのです!!。」

「ははは、そんなポカポカ殴るより、早く戻ったら。」

「そうなのです、早く行くのです。」

「俺は当然行かねえぞ。忘れてるなら、俺の席はないはずだから

な。」

「あう・・・また、転校生として来ればいいのです。」

「それも有りだけど、登校したら、また不良に絡まれるのはちょっとな。だから、今回は神の座のお留守番でいいや。」

「そうなのですか。放課後に皆を連れてくるのです。そしたら、何か思い出すかもしれないのです。」

「早く行行って、げんこつの数が増えるぞ。」

「それじゃ、行ってくるのです。」

僕は手を振って、祭具殿を出た。

## 契view

俺は羽入と別れ、一人たたずんでいた。我ながら嘘が上手か下手かわかんねえな。

「それにしても、まさか天国に力があつたとわな。」

実は、天国に神の力があり、それによって祭具殿に入ると記憶を消すようにして、羽入をおびき寄せたわけ。神の記憶を消すのは甘くないから、強い力を天国で借りたわけ。

皆の記憶はあの時に俺が死んだら消えるようにしておいた。力がなくなっても記憶が戻らないように。

「これで、羽入の記憶も消せましたし全ては元通りだな。はー、普通の人間に生まれたかったな・・・。」

そういうと頬に涙を感じる。

「あのときは我慢できたのにな。ちくしょう・・・。」

どっどん涙があふれてくる。

「ぐす・・・母さん、その後の幸せを勝ち取るのは結構大変だな。」

でも、得られたものは絶大にでかい。

「俺って、間違いだらけのダメ化身だな。でも、あいつらのおかげで仲間が間違いじゃないことはわかった。」

体が透けてきた。

「短い時間でここまで仲良くなるなんて思わなかったな。詩音なんて2日だけだからな。」

「どんどん消えていく。進行速度はあの時より速い。」

「楽しかったぜ。ありがとう、皆。俺みたいに間違っなよ。まあ、そのために記憶を消したんだけどな。」

そして、俺は完全にこの世から消えた。

あなたは今は幸せですか？それとも、つらいですか？。

もし、つらいのならあきらめず、その後を信じて生きてください。

その後は形はどうであれ、幸せがきつと待っています。

信じられないなら負け組、信じられるなら勝ち組です。

## 全ては何もない（後書き）

えー、ちよつと最後の方は何でもありません。

こんな小説を読んでくださった心の広い方々に感謝しています。

最初と最後では書いていく感覚が変わってきたため、少し違つたりもあると思いますが・・・

とりあえず、ひぐらしサイコーってことで。

変な部分や誤字はなるべくチェックしてましたがもしかしたらあったかも。（汗）

自分的には満足してます。

では、また別の小説で会いましょう。（＾ー＾）ノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2462i/>

---

ひぐらしのなく頃に 神殺し編

2010年11月19日22時06分発行